
『りりつば』

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『りりつば』

【Nコード】

N0022S

【作者名】

米寿

【あらすじ】

これは、例えばの話なんだけど。

ある世界で役目を果たした青年は、消えるはずだった。

しかし、なんの因果か、青年は魔法少女たちの世界へと降りたっていた。

詳細不明・結末未定。前後不覚の青年、千歳鷲介が魔法少女たちの

世界で右往左往の大活躍！、の予定。

彼と彼女たちに翼はないこともないんじゃないか。

例えば、そんなファンタジー。

りりつば if 羽田鷹志編？（前書き）

皆さん如何お過ごしでしょうか？

米寿です。

累計アクセスが50000を越えたのを記念してお話を投稿致します。

これは、もし、千歳鷺介ではなく羽田鷹志がリリカルなのはStrickersに來ていたらというものです。

これは、その一つ目のお話です。

何かしらの節目に一つずつ進めていきたくていおりますので、厚かましいのは十分承知ですが宜しくお願い致します。

りりつば if 羽田鷹志編？

こんにちは、この日記を読んでくれる機動六課の誰かさん。
僕の名前は羽田鷹志^{はねだたかし}。機動六課スターズ分隊に所属していた隊員。
この日記を読んでくれたアナタが、僕のことを覚えていてくれた
のなら嬉しけれど。

もちろん、覚えてるよ。

僕が機動六課にお世話になってどれくらいかは分からない。
皆と出会い、仲間にしてもらって一緒に色々なことをやってき
た。

仲間にしてもらってなんて言い方したら、呆れられてしまうかも
しれないけれど。

うん。ホントそうだよ。

機動六課の皆は僕にとっても優しくしてくれた。
もちろん、僕が次元漂流者っていう立場も、少なからず関係して
いたと思う。

それでも、皆がかけてくれた優しい言葉と向けてくれた笑顔は、
僕の中で宝物になって、生涯忘れることはないだろう。

相変わらずおおげさだね。

そんな大切な宝物をくれた仲間達にどうしても伝えたいことがあ
る。

本当なら直接言うのがいいのだろうけど、口下手な僕には上手く
伝える自信がない。

でも、こうして文章にすれば伝えられるかもしれない、そう思っ
て日記を残そうと思ったんだ。

にやはは…羽田君らしいなあ。

世界の運命がかかった大事な戦いの前にこんなことをしている場
合じゃないのかもしれない。

闘いの時に、あんなことをするんじゃないかなかったって後悔するかも
しない。

それでも僕は、どうしても、この世界に僕がいたってという証拠を
残したかったんだ。

羽田君…。

色々なことを選べず、主体性のない僕が運ばれた世界。

望んだわけじゃないけど持ち合わせてしまった魔法という力。

逃げ場所を失って、言い訳できない僕にとってこの世界は、優し
くなくて辛いことの方が多かった。

全然気が付かなかったよ。羽田君はいつも笑顔だったから。

でも、僕はその時、生まれて初めて知った。

生きていくことは、自分にとって優しくないことに正面から向き
合っていかなければいけないことなんだって。

僕はそんな当たり前のことさえ知らないまま、ここに来るまでた
だ漠然と生きてきたんだ。

うん。生きていくって難しいよね。

だから、これを読んでいる機動六課の誰かさんに聞いて欲しい。

羽田鷹志が、最後の最後まで話すことを躊躇って言い出せなかった秘密を。

あ、いや。これは日記なんだから聞いて欲しいはおかしいよね。

こんな時までそそっかしいんだね。ふふっ、しまらないなあ。

僕は機動六課の皆に一つだけ嘘をついた。

これを読んでいる誰かさんは気が付いているかもしれないけれど、それは、僕にここに来るまでの記憶が無いってことだ。

謝っても許して貰えないかもしれないけど、ごめんね。

皆気付いてたよ。なんとなくだけだね。そして許すよ。これからそれを聞かせてくれるんでしょ？

だから改めて自己紹介しよう。

僕の名前は羽田鷹志。

私立美空学園に通っていた、少し夢見がちなだけの普通の高校生だ。

うん、続けて。

僕には現実で辛いことがあると、自分に都合のいい世界へと逃げ込む癖があった。

そして、現実で好きだった人にそのことを指摘された僕は、逃げることも立ち向かうこともせずただ逃げ出した。

受け止めきれなくて、でも投げ出せもしなくて、結局どっちかずだった。

好きな人がいたんだね、羽田君。

逃げ出した後、目を覚ましたら僕はこの世界に来ていた。

ついさっきまで好きな人の家にいたはずなのに、目を覚ましたら
どことも分らないビルの屋上で眠っていた。

自分で書いていて、とても信じられない話だけれどね。

そうだね。でも、羽田君は確かにそこにいた。

それから後は、機動六課の皆知る通りだ。

お互いたくさん迷惑をかけて、お互いたくさん助け合ってやって
きた。

そんな風に思うのは少しおこがましいかなって気持ちもあるには
あるけれど、今だけでも胸を張ってそう言いたい。

おこがましくなんてない。胸を張っていいと思うよ。

そして、そんなどうしよもない僕がこの世界で頑張ろうと思った
のは、ある人に出会えたからだ。

この世界で最初に出会ったのがその人じゃなかったら、僕はこん
なにも頑張らなかつたと思う。

ここまで書いたら、機動六課の皆には、その人が誰かなんて丸分
かりだよな？

そうだね。というか羽田君、隠す気なんてないよね？

いくら空を飛びたいと願っても、翼の無い僕は空を見上げること
しかできなかった。

憧れで、でも決して手の届かないと分かる聖域。

そんな聖域だと思っていた場所から、その身に翼を宿したその人、
高町さんが僕の前にやって来たんだ。

なんか照れるな。

もし、高町さん以外の誰かにこの日記が見られていたら、僕は恥ずかしさのあまり消えてしまつかもしれない。

冒頭で、こんにちは機動六課の誰かさんと書いてあるのにとんだ失敗だ。

でも、その心配はきつと杞憂に終わると思う。

笑えないっ…。その失敗は、全然笑えないよっ…。

その時、僕はこの世界から文字通り消えているだろうから。でも、勘違いしないで欲しい。

僕は進んで犠牲になりたかった訳じゃないし、機動六課の皆を悲しませたかった訳じゃない。

分かってるよっ…。分かってるよっ…。そんなことぐらいっ…。

なんとなく、本当になんたなくなんだけれど予感があった。

僕にも空を自由に飛べる翼があるんじゃないかと思いはじめたあの日から。

僕が本気で、大好きな皆のいる世界を守りたいなんて、夢見がちな普通高校生の身でそんな大それた想いを抱いたその時から。

どうして話してくれなかったのっ…。そしたら私はっ…。

こっついう風に書いたら、優しい高町さんはきつと自分を責めてしまつと思っけどね、出来ればそれは止めて欲しい。

傲慢で自分勝手なことを書いていると僕も思う。

でもこの結末は、僕が生まれて初めて逃げずに悩んで、悩み抜い

た末に辿り着いた答えだから。

勝手だねっ…。本当に自分勝手だよっ…。

もし、本当にもしもの話なのだけれど。

この闘いが終わってもまだ僕がこの世界にいるなら、その時はこの日記を皆で読んでもらっていい。

かなり恐ろしいけど、どんな辱しめも不名誉も甘んじて受ける覚悟が僕にはある。

もしそうだったらどんなに楽しかっただろうねっ…。

さて、かなり長くなっちゃったけどここまでがこの日記のプロローグだ。

ここから先は、僕の機動六課での思い出話を書いていこうと思う。退屈かもしれないけれど、最後まで読んでくれると嬉しいかな。

見るよっ…。ちゃんと最後までっ…。だからっ…。だからっ

！！！

「あの時の…。あの時のサヨナラを取り消してよっ！羽田君っ！！」

僕達、機動六課はこれから最後の闘いに望む。

広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツィが引き起こした未曾有の重大事件。

それは、僕達から色んなモノを奪っていった。

スバルさんの優しいお姉さんのギンガさん。僕をお兄さんだと慕

つてくれた高町さんとハラオウンさんの子どものヴィヴィオ。
だから、必ず取り返すんだ。皆のあんなに悲しい顔を見るんな
ら、もうたくさんだから。

「こんな所でどうしたの、羽田君？」

「ちよつと考え事をしてただけです。心配ないですよ、高町さん。」

「そつか。隣、いいかな？」

「はい。僕は全然かまいませんよ。」

「ありがとう。」

そう言つて高町さんは僕が寄りかかっていた壁に同じ様に寄りか
かった。

大事な闘いを前にしても、高町さんの顔は普段通りに見える。

僕は人の心の機微を読むのは得意じゃないから、分からないだけ
なのかもしれないけれど。

「必ず皆を助けようね。」

「はい。」

それつきり二人の間に沈黙が続く。

以前の僕ならその沈黙を恐れて何か話をしなきゃなんて思っただ
らう。

僕が沈黙を恐れていたのは、そうすることではしか相手との繋がり
を確認できなかったから。

でも、今は違う。言葉を無理に交わさなくても、僕達は繋がって
いられる。それをこの世界に来て僕は知ることができた。

言葉は交わしたい時、必要な分、交わせばいいんだ。

「それじゃあ、行きましようか高町さん。」

「うん。行こうか、羽田君。」

だから、これで充分。

僕達がやれる事とやる事なんて最初から決まっているのだから。

ブリーフィングルームに着くとそこには既に高町さんを除く部
隊の隊長と副隊長が揃っていた。

どうやら、高町さんは僕を呼びに来てくれたらしい。大事な闘い
を前に余計な迷惑をかけてしまったみたいで恥ずかしい。

「遅刻やで羽田君？」

「おせーぞ、羽田。」

「すみません。八神部隊長、ヴィータ副隊長。」

「羽田君、大丈夫？」

「あはは。僕なら大丈夫です。フェイト隊長もご心配おかけして
すみません。」

なんだか僕は隊長や副隊長といると謝ってばかりの気がする。

これは、出会った頃から今日までの間、変わらなかった。
僕自身すっかりしなきゃとは思っているのだけど、そうそう上手く
はいってこない。

「ホンマ羽田君もいつも通りやな。」

「だな。」

「そうだね。」

「うん。」

「あはは…。はい。」

どうやらそれも皆にはお見通しみたいだ。
繋がってるのが分かるのは嬉しいけど、これは正直に言うと恥ず
かしい。

「ほんなら、私らも出動や！」

八神部隊長のその合図に皆が思い思いに頷く。

艦のハッチが開き、眼下に青い空が見える。

僕が求めてやまなかった空が、今日は闘いの中心地になっている。

そのことが悲しくないなんて言うのは嘘になるけれど、今はそれを
悲しんでいる時じゃない。

あの空には、僕達の助けを待ってる子がいるのだから。

「ヴィヴィオ待って。今からお兄さんが助けに行くからね。」

空に身を投げて体に宿る魔力を循環させる。

そうすることで、僕の中にあるデバイスは力を発揮する。
今の僕にとってそのデバイスの名前は、自分への戒めと同時に想
いを通すための大事な相棒の愛称だ。

「行こう、『グレタガルド』。セットアップ！」

その声に相棒が応えて青い鎧が僕を包みこんだ。腰には大振りの
剣がかかっている。

初めてこの姿になった時は本当に驚いた。だって、この姿は僕が
都合のいい様に産み出したいわば妄想の産物そのものだったからだ。
以前の僕なら嬉々としてこの力を受け入れていただろう。やっぱ
り僕は皆が望む英雄だったんだって。

【What can I do for you? master?
r? (マスター。どうかしましたか?)】

「ううん。なんでもないよ。」

【I see. (そうですか。)】

でも、妄想を妄想だと知ってしまったあの時に僕のグレタガルド
は終わりを迎えた。

だからこの力を素直に受け取っていいのか戸惑った僕は、この力
を使わないことにした。

怖かったんだ。また、現実から目を逸らして都合のいい妄想に浸
ってしまうのが。

そんな自分の心を守りたいだけの臆病な決断は、後悔になって僕
に跳ね返ってきた。

その時に知った痛みを僕は忘れない。僕がしたことは必死で生き
ている人の想いを踏みにじったのと同じだってことを忘れない。

【master。(マスター。)】

「どうしたの？」

【gain a victory。(勝ちましょう。)】

「そうだね。」

今度は間違わない。想いを通すために力が必要なら、それを使うのを迷ったりしない。

それが僕にとってどんなに苦くて辛いことを思い出すことになってもだ。

守りたい人がいるなら、助けたい人がいるなら、その想いは貫く。そうやってはじめて、僕は起動六課の皆と同じ場所に立つことができるのだから。

「あのフェイトちゃん？そろそろ…。」

僕が思考の海に漂っている間にいつの間にか目標に近づいていたみたいだ。

どうも僕は一つのこと集中しすぎると周りが見えなくなってしまう傾向があるらしい。

これも分かっているけど結局最後まで治らなかった僕の悪い癖だ。

「フェイト隊長も無茶すんなよ。地上と空はアタシらがキツチリ押さえるからな！」

「うん。大丈夫！」

「頑張ろうね！」

「うん。頑張ろう！」

拳を合わせる高町さんとフェイト隊長。

ここからはお互いに負けられない戦地へと赴かなければいけない。こんな時、何か気の効いたことを言えればいいんだけど、僕の口ではこれが精一杯だ。

「お気を付けて。」

「うん。ありがとう。」

フェイト隊長が加速したのを合図に、僕達も上昇を開始した。

そして雲を突き抜けた先、僕の視界があまりにも大きすぎる目標を捉える。

「あれが聖王のゆりかご…。」

「うん。」

僕の呟きに高町さんが答えた。その瞳は真っ直ぐゆりかごを捉えて離さない。それを見て、自然と背筋が伸びる。

「待っててね、ヴィヴィオ…。」

「行きますよう。」

今度は高町さんの呟きに僕が答えた。

視線が交錯する。

そして、頷きあつた僕達はゆりかごへ向けて一直線に加速した。

りりつば if 羽田鷹志編？（後書き）

お疲れ様です。

楽しんで頂けたでしょうか？

前書きでも言いましたが、何かの節目に続けられればと思っております。

本編の応援も宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第1話「千歳鷲介（イーグル）」（前書き）

初めて米寿といます。

この作品は、俺たちに翼はないと魔法少女リリカルなのはS t r i
k e r Sのクロスです。

初めての作品なので至らない点は数多くあるかと思いますが、ご容
赦下さい。

それでもよろしければお読みになって頂けるとさいわいです。

第1話「千歳鷲介（イーグル）」

「ええ、ええ、わかってますとも、くれぐれも失礼のないように、つすよね?」

「存在自体、失礼な奴が言っても説得力がないって、ってひどくないっすか!？」

「ああ、そういうことっすか、なるほどなるほど。ようがす、納得致しました。」

「しかし、ねえ、そればかりはどうしようもないことはお三方もご承知でしょう?」

「まあ、善処はしますけど期待はしないという方向で手を打って頂けるとありがたいっすわ。」

「ではでは、そろそろ到着なんで一旦切りますね。また、後程とということぞ。」

ピツという音と共に通話は遮断された。

なんかアレコレいう声が聞こえた気がするのだが、そこは後程とあってあるので気にしないってことで。

本当にいいのかって顔してますね。大丈夫っすよ、信頼してますからね。

足が止まり、青年は顔をあげた。

目の前には、立派な、それはもう立派な建物が建っております。出来立てといったところでぴっかぴかな感じが漂っているのでございませぬ。

表現がクドイ？すみません。こういう性分なんでご勘弁頂きたいつて、アナタとは付き合い長いんですからいちいち説明の必要ないつすよね？

シーン。はい、リアクション無しつと。毎度のこととはいえ、寂しいつすよ。ほっとかれるのが一番キツイんすよ。

まあ、おふざけはこのへんにしてそろそろ行きましようかね。お待ちさせるのも悪いですしね。

フツと息で前髪がかきあげられる。

「機動六課、ぬるつといつう。」

機動六課部隊長室。そこには3人の人間が集まっていた。

スターズ分隊長、高町なのは一等空尉。

ライトニング分隊長、フェイト・T・ハラウン執務管。

機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐。

彼女等は、機動六課の隊長陣であり、時空管理局に勤めているものなら、その名前を知らない者はいないくらい、超がつく程の有名人でもある。

「はやてちゃん、急な呼び出しだけど、何かあった？」

「うん、二人とも訓練の途中でごめんな。」

「ううん、気にしないで、はやて。」

「ありがとうな。二人を呼び出したんは、例の人がくるからなんよ。」

「お歳暮の人だよな、はやて。」

「例の人って……。あとフェイトちゃんも変な呼び方しないの。」

その時のことを思い出したのか、三人は顔を見合わせて笑った。

「でも、意外なところからきたって感じやな。」

「確にね。千歳ちとせしゅうすけ驚介さんだったよね？どんな人かな？」

「はやては会ったこと、ある？」

「どんな人かもようわからんし、会ったこともないねんけど……。」

「「けど？」」

「ある意味で、ただもんやない気がするわ。二人も、そう思うやろ？」

「「うん、確に。」」
そして三人はまた笑った。

その笑いが収まるの見計らった様なタイミングで、はやて宛てに通信が入った。

「失礼します。」

通信はロングアーチという機動六課のスタッフで、はやての副官でもある、グリフィス・ロウラン准陸尉かだった。

冷静な彼にしては珍しく困った表情を浮かべている。

「グリフィス君、どないしたん？」

「千歳鷺介という方が、『部隊長に取次をお願いします。』と云っているのですが……。」

「うん、わかった。グリフィス君、手間とらせて申し訳ないんやけど、千歳さんをここまで案内してあげたって。」

「了解しました。そちらまでお連れします。……。」

「気にはなんとつたんやけど、さつきからえらく微妙な表情してるな。何かあったん？」

「はい…。『これからお世話になります、あっ、これつまらないものですが。』と言って、唐突にコレを渡されたので困惑してしまいました……。」

コレと呼ばれたものをモニターに映した。のし紙が巻かれ粗品と書かれていた。しかも地味に大きい。

「勢いのあるセールスマンみたいで、訳もわからず、思わず受け取ってしまったんですが…。なんなんでしょう、コレ？」

それを見て、三人は軽く吹き出してしまった。

「????どうされたんですか？」

怪訝そうに彼は訪ねた。

「な、何でもあらへんよ。ごめん、ごめん。改めて、千歳さんのエスコートよろしくな。」

「?了解しました。今から、お連れします。」

ある意味ただものじゃないという彼女たちの考えは、正しかった、ということが証明されたようだった。

第1話「千歳鷲介（イーグル）」（後書き）

お疲れ様でした。

楽しんで頂けたでしょうか？

この作品は二ヶ月に一度の更新を予定しています。

再度のお付きあい頂けると幸いです。

第2話「元気？、平和？、青春？」（前書き）

皆様お元気でしょうか？米寿です。

調子が良かったため投稿させて頂きます。

頑張りますのでこれからも宜しくお願い致します。

第2話「元気？、平和？、青春？」

どうも、どうもー、朝でも昼でもコンバンワ！千歳鷲介です。

元気？平和？青春？

シーン。またリアクション無しと。

ホントはリアクションしたいのに我慢してません？この千歳ぬる鷲介、いつでもアナタのリアクションをお待ちして……。

えっ？そんなことより、ちゃんと挨拶できそうかって？

そんなことって……。まあいつすけどね……。

先程、『眼鏡のイケメン君』ことグリフィスさんに部隊長との取次をお願いし終えた所ですよ。

新たにお仕事を共にするわけですから、第一印象が肝心なわけですよね。

そこで、爽やかな笑顔で挨拶、そして、粗品をお贈りしてのイメージアップ。

どうです？なかなかのもんでしょう？

まだ、安心できないって顔してますね。ええええ、言わなくても、ワタシには丸分かりです。

でも、そんなアナタ！ご案下さい。それを見こして、以前、部長・分隊長宛てにお歳暮を送らせて頂いております！！

マーベラス！どうです、この華麗な根回し！これで、『千歳君はなんて礼儀正しい子でしょう！』なんて具合になつてゐるはずです。

ここまでの安心保証はなかなかありませんよ？これでアナタもご満足頂けたんじゃないやありませんか？

これで、いかに千歳鷲介が、お買得の目玉商品ですつてことが、先方にキツチリ伝わっていることがお分かりになつたでしょう。

だから、大丈夫つすよ。問題無いつす。大船に乗つた気持ちでいて下さい。

視界の端にグリフィスが歩いて来るのを捉えたので、居住まいを正しました。

「大変お待たせしました。これから部隊長室にご案内します。」

「これは、これは、ご丁寧に。ご迷惑をおかけして恐縮です。宜しく願ひします。」

敬礼で応え、グリフィスに先導される形でその後を付いていく。

いやー、しかし、敬礼が様になるなんて、人生何が起こるかわか

らないもんですね。

アナタもそう思うでしょ？

「こちらが部隊長室になります。では…。」

一呼吸置いた後、グリフィスは扉をノックした。

「失礼します。千歳鷺介さんをお連れしました。」

「ご苦労さん。入ってもらってかまへんよ。」

「失礼します。」

「囑託魔導士の千歳鷺介です。本日は貴重なお時間を取らせてしまい、大変申し訳ありません。」

曰く様になった敬礼で挨拶する。

「気にせんでええよ。遠路はるばるご苦労様やったね。」

「はっ。恐縮です。」

曰く様になつた敬礼で応える。

「グリフィス君もエスコートご苦労様や。」

「いえ。これくらいは。」

「千歳君のことは後日キチンと皆に紹介するから、グリフィス君は仕事に戻ってもらつてかまへんよ。」

「分かりました。では、失礼します。」

グリフィスが退出したのを見計らつた様に目の前にいる女性が切り出した。

「さて、ほんなら、お互い自己紹介せんとな。実際に会うんは初めてやな、機動六課部隊長の八神はやてや。よろしゅうな。」

「「えっ!?!」」

目の前の女性以外の二人が声を揃えた。

「実際会ったのはってはやてちゃんは千歳君のこと知ってたの？」

「さつき、『どんな人かよー分からんし』ってはやて言ってたよね？」

「なのはちゃんもフェイトちゃんもなんや勘違いしてへんか？」

「お歳暮貰ったやろ？少なくとも全然知らんいうことないやんか。」

「そ、そうだよ。あはは…。」

「しかも、フェイトちゃんなんか、『お歳暮の人だね』なんて言っとたやないか？」

「……！」

「ちょ、ちょっと！もうっ、はやて！後、語尾に　なんて感じじゃなかったよ！ごめんね千歳君。」

「いえ、お気になさらず。」

どうやら、はやての含みある一言で自己紹介という話の腰骨がボキリと音を立てて折れてしまったようだ。

なにやら、楽しいことになってますよ。

しかし、愉快な方たちが揃っていますね。これは職場の潤滑油のワタシにかなりの出番が期待……。

どうしました？コメントはいらないうて？察しが良すぎるのもどうかと思っんですけど。

でも、このコメントは言わせて頂いても罰は当たりませんよ。

楽しいなあ、機動六課。

第2話「元気？、平和？、青春？」（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

楽しんで頂けたのなら幸いです。

更新は二ヶ月に一度を予定していますが、確実ではありませんので、
ご容赦ください。

では、次話またお会い致しましょう。

御一読ありがとうございました。

第3話「観察と考察（セクハラ）」（前書き）

米寿です。

3話目投稿致します。

人間やればできるものですね。

今回もお楽しみ頂けたたら幸いです。

第3話「観察と考察（セクハラ）」

「なんや、ごたごたしてしもうたなあ。仕切り直しいうことで、改めて私から自己紹介させてもらおうわ。」

「機動六課部隊長の八神はやてや、よろしゅうな。」

よろしくと言われた以上はやらなきゃ失礼っすよね？

何をするつもりかって？またまた、トボケちゃて。というか、それはフリっすよね？アナタも芸が細かいっすね。さっすが。

ここまでされちゃあ、やらない訳にはまいりません。

ようがす。この千歳鷺介にどーんと、任せちゃて下さい。

まず、このお方が八神はやて部隊長ですね。栗色のショートヘアにクロスの髪留めが大変良くお似合いです。

小柄でかわいらしい顔立ち、時折覗かせる、悪戯っ子のような表情も彼女の魅力をより引き立てています。

プロポーションもバランス良く整っていて無駄なところがありませんね！

文句の付けどころはございません。マーベラス。

「初めましてだね。機動六課スターズ分隊長高町なのはです。よろしくね。」

続いてはこのお方、高町なのは分隊長です。艶のある長い茶色の髪をサイドアップにして、可愛いリボンでまとめられています。

俗にいうサイドテールですね。

可愛らしく、整った顔立ちに、幼さと凛々しさとが同居した表情の併せ技はかなりの破壊力を秘めているでしょう。

出る所は出て、引つ込む所は引つ込んでいる。女性の憧れに近い、まさに理想の体型といっても、過言ではないですね！

もちろん、文句の付けどころはございません。マーベラス。

「は、初めまして。さつきは、ごめんね。機動六課ライトニング分隊長フェイト・T・ハラオウンです。よろしく、千歳君。」

最後はこの方、フェイト・T・ハラオウン隊長。

流れるようなブロンドの髪が、キラキラと輝いて大変美しいです。

先程のお二方は可愛い系でしたが、彼女はキレイ系で、言わずもがな顔立ちは整っています。

ルビーの様な深紅の瞳は見るものを惹き付けて離さない。そんな魅力を持っています。

女性的なシルエットが強調されたプロポーションは、美しさと妖艶さを重ね備えた仕上がり具合！

当然、文句の付けどころはございません。マーベラス。

お三方とも写真よりも実際の方が断然お綺麗です。素晴らしい！

どうです、ご満足頂けたんじゃないですか？千歳鷺介の女子力チエックは？

シーン。そして、リアクション無しと。

三度目の正直を期待してたんですけど、ツレナイっすねえ。

「はっ。千歳鷺介です。宜しく願いしま…。」

ピピッという音が鷺介の言葉を遮った。どうやら部隊長室に通信らしい。

「ごめんな、千歳君。どなた様やるか？」

そっぴいながら、ささっと指を動かすと中空にモニターが浮かび上がった。

モニターに映っているのは、気品溢れる初老の男性。優しい笑みをその顔にたたえている。

「久しぶりだね、はやて君。そして、なのはさんにフェイトさん。元気そうで何よりだ。」

「グレアムおじさん!?」「グレアムさん!?」「

「うちの愚息がそちらに着いた頃かと思って、連絡させてもらっ
たよ。驚かせてしまったかな?」

「ホンマ、ビックリしたわ。グレアムおじさんも元気そうやね。」

「驚きましたよ。お久しぶりです、お変わりないですね、グレアム
さんも。」

「お久しぶりです、ビックリして、心臓が止まるかと思っ
ちやいました。」

「すまない、すまない。」

「……ところで、鷺介。」

和やかだった空気が突然張りつめたものへと変わった。グレアムの
目は細められその眼光は鋭く鷺介を射ぬいている。

「な、な、なんでございましょうか……。」

「着いたら、すぐ、連絡をする様に言ってあったはずだが。」

「え、ええ、仰る通りでございませす。」

「しかも、ロツテとアリアとの通信も話半分。挙げ句途中で切断了らうじゃないか？」

「いや、そ、それはちょうど六課の隊舎に着いてですね、断腸の思いで、泣く泣く通信を切ったからなんですって。」

「ふむ。それは、確かに、仕方がないかもしれない。」

「でしょう！そうでしょう！仕方がなかったんです！決して悪気があつたわけじゃ……。」

「悪気はなかった、か。」

「左様でございます！この千歳鷲介、お世話になつた大恩人にそんな無礼な真似を働くはずが……。」

「では、その後の通信拒否はどうかね？」

「……………」

「ロツテもアリアも大層ご立腹だったよ。」「鷲介ブチのめす！」「』』』と言つて飛び出して行ったきり戻ってないんだ。」

「あわわわわわわ。」

「一体何処へ行ってしまったんだろうね？鷲介に心当たりはあるかな？」

「あばばばばばば。」

シューと後ろでドアがスライドする音がした。ドアの先には、陰の様な黒さに、光を放つ瞳、三日月型に裂けた口に笑いを浮かべた人の形をした、何かが並んで立っていた。

「驚ウウ、介エエ。」

「見イツケタア。」

「ひいひいひいひい！」

「なんだ、心当たりがあるなら、そう言ってくれればよかったものを。」

「でも、これで安心だ。ロツテとアリアが見付かったのだからね。そうだろう驚介？」

「う。」

「コ？」

「ごめんなさあーい！ーい！ーい！」

「待テヤアア！逃ガスカアアー！！！」

三人？は疾風の如く部隊長室を駆けぬけていった。

グレアムを除いた三人はポカーンとして、置いてけぼりを喰らって

いる。

「さて、驚介のお仕置きが済んだら、これからの話をしようじゃないか。」

さっきまでの優しい笑顔を浮かべ、何食わぬ顔でグレアムはこの場を締め括る言葉を紡いだのだった。

第3話「観察と考察（セクハラ）」（後書き）

お疲れ様です。お楽しみ頂けたでしょうか？

では、また次話でお会いしましょう。

御一読ありがとうございました。

第4話「千両道化？」（前書き）

米寿です。

いかがお過ごしでしたでしょうか？

一身上の都合で、大変申し訳無いのですが、第1話及び2話で予定していた更新頻度を不定期と訂正させて頂きますこと、この場を借りて謝罪致します。

読者様に変な御迷惑をおかけすること、誠に申し訳なく思います。

長くなりましたが、また、楽しんで頂ければ幸いです。

第4話「千両道化？」

突然ですが、そのアナタ！

聴いて下さい！

美しい女性達が、自分の事を追いかけてきてくれるって、素晴らしいシチュエーションだと思いませんか？

共感して頂ける方は沢山いらつしゃると、ワタクシ、千歳鷺介は確信しております。

しかし、残念なことに現実ではなかなか起こりえない！

だからこそ、ラブコメなんかのフィクションでは、演出として使われるんだと思う訳ですよ。

世の男性陣にとっては、憧れであり、夢でもある。そういうものであるわけです。

では、夢、そして憧れである『美しい女性達が、自分の事を追いかけてきてくれるというシチュエーション』が、突然現実で起こったなら、人（千歳鷺介）はどうするのか？

この命題を、ワタクシなりに考え、人（千歳鷺介）がどのような行動に出してしまうのかを、ご理解頂きたいからでございます。

今回のケースでは現実に『美しい女性達が、自分の事を追いかけてきてくれる』という結果が、人（千歳鷺介）に起こった場合です。

人（千歳鷺介）は何故この結果が引き起こされたか、その原因が気になるはず。

なんの理由もなく、夢が突然叶うなんて、そんな都合のいい事は考えにくい。

何か原因があるはずだ、と思ってしまうのは、仕方がないですよ
ね？

しかし、幾等考えても原因に確な答えを与える事が千歳鷺介（人）にはできない。

言い換えると、原因が分からない、また理解もできないってことです。

原因が理解できないのに、結果は目の前で起きている。

そして、それが千歳鷺介（人）にとって夢の様な結果なら、なんなんだ一体…という具合に恐怖を与えることになると思うんですね。

そして人は、恐怖を感じたら逃げ出すという行動を取りますよね？

なら、人である千歳鷺介が、逃げるといふ行動を取るといふこともご理解頂けるはず。

熱が入り過ぎて長くなってしまいました。

よって、この命題に対するワタクシの回答は、

『美しい女性達が、自分の事を追いかけてきてくれるというシチュエーション』は、現実に行くと恐怖を生み出す原因になり、その結果、逃げ出すという行動に繋がる、

となるわけです。

どうでしょう？

ご納得頂けました？

シーン。また、リアクション無しと。

いえいえ、今回はそれも仕方ないです。責める気なんて、毛頭ありません。前回同様、前フリが長くなってしまいましたからね。

反省。反省。

けど、次回は頼みますよ？

まあ、そんなこんなで千歳鷺介は現在絶賛逃亡中、夢も希望もありません。

うん？

一つ気になることがある？

ようがす。お聞き致しましょう。

逃げる間際に盛大に謝ったのは、

今の状況が、『美しい女性達が、自分の事を追いかけてきてくれるというシチュエーション』

ではなく、

『美しい女性だったモノ達が、怒りに任せ自分の事を追いかけてきてくれるというシチュエーション』

だと正しく原因を理解していたから逃げ出したんじゃないか、って？

……。

……どうやら、アナタとは決着をつけなければならない運命の様です。

ワタクシの主張とアナタの主張。

不思議ですね、彼女達を想う気持ちは一緒のはずなのに、

辿り着いた答えは、

互いに、遥か、遠い。

譲れない選択をしたなら、それをかけて戦うしかない。でしょ？

さあ、それではクライマックスといきましょうか！

千歳鷺介の選択が正しかった事を証明致しましょう！

地面を踏みしめ足を止める。そして、振り返る。

振り返った先には姉と慕う愛しく、美しい人達の姿。

「姉さん!!」

「……………」

「姉さんと俺、きっと分かりあえてるよね!!」

「……………」

「「こんなんでも、俺、姉さんの事、…………ホントに、信じてるんすよ。」

「……………」

姉さんから返事は無いけど、伝わってるはずですよ。それだけの関係を築いてきたんですから。

「「鷲介。」

「はい。」

「アナタの想いは確かに伝わったよ。」

「ええ、私達の事をよく分かってくれてるわ。」

「ははっ、そんなの当然じゃないっすか。今更っすよ。」

「「じゃあ、」」

「「コレカラ、ドナルカモ、ワカルヨネ。」」

「も、モチロンっす。」

おかしいっすね。姉さんたちの笑顔は確かに美しいままなのに、冷や汗が止まらないんすよ。

「ココナラ…」

「モンダイナイワネ…」

そう言われてみれば、部隊長室からはえらく離れてしまいました。

かなり広い場所っすね。演習場が何かでしょうか？

しかし、いつの間にか、こんな遠くにきてしまったんだなあと思うと、なんだか感慨深いっすね。

「姉さんも恥ずかしがりやっすね。愛しい弟分と離れ離れになる寂しさを誤魔化すのに、再会した途端暴力に訴えちゃうなんて。いえ、いいんです、いいんです。分かってますから。そんな姉さんが可愛いとも思いますし寂しかったのは、俺も同じ…」

「イチド。」

「ソラノカナタマデ。」

「「イキナサイ！」」

「きいいいいいやあああああ！……！」

桁違いの巨大な魔力が体を飲み込んでいく。もう永くはもたないことは、容易に想像できる。

すみませーん。意識が途切れる前に、一言いいつつか？

どうも。では。

『逃げ出す』という選択をした千歳鷲介はやっぱり間違いじゃなかったでしょ？

また、会えるかって？

そうつすねえ、まあ、機会があれば。

第4話「千両道化？」（後書き）

お疲れ様でした。

いかがでしたでしょうか？

私事で大変恐縮なのですが、お気に入り登録して頂いた読者様、ありがとうございます。

作者にとって大変な励みになりました。

これからも頑張りますので宜しくお願い致します。
御一読ありがとうございます。

第5話「君達の答え（アンサー）」（前書き）

皆様、いかがお過ごしでしょうか？

米寿です。

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第5話「君達の答え（アンサー）」

「お騒がせして、すまないね。」

「いや、ええんですけど…。せやけど、ほっておいて大丈夫なんですか？」

「日課みたいなものだからね。気にしないでくれると、こちらとしては助かるよ。」

ヤレヤレ、またか。と言わんばかりにグラムは肩をすくめた。

その仕草は、堂に入り、アレが日常的に起こっていることの証明としては充分であるようだ。

「ね、ねえ、なのは…。あのね、」

「フェイトちゃん、待って。その先は言わないで。きっと同じことを考えてると思うから。」

「う、うん…。そうだよ、分かった。ごめんね。」

「気にしないで、フェイトちゃんのせいじゃないから。」

なのは・フェイトの二人は自己発信、自己完結の行程を完了させ、無理矢理自分を納得させている。

「グレアムおじさんも、苦労しとりますね。」

「ありがとう、はやて君。しかし、それはいささかの外れな慰めかな。」

「？それは、どういう……。！…もしかして…」

「流石、査察官といったところかな？察しがいいようだね。」

グレアムは悪戯っぽい笑顔で微笑んだ。

その顔からは、かつて提督と呼ばれた頃の彼を連想するのは難しい。まるで近所のおじさんのような親しみやすさ。それが、素顔だといつても、違和感がないくらいに。

「本当は驚介が戻ってきたからにしようと思ったんだが、時間がかりそうだから先に『これまでの話』をしてしまおう。いつまで経ってもそういうところは、変わらないようだ。困った子だよ。」

そう苦笑いして、グレアムは語り始めた。

今から五年か六年くらい前だった。私の家の庭に突然魔力反応と術式が現れ、光と共に魔法で鷺介は転移してきたようだった。

私が断定できないのは、見つけたのがロツテとアリアで、私が直接見たわけではないからなのだが。

目立った怪我はなかったのだが、意識がなかったのね。目を覚ましたら転移の経緯等を聞くために、一旦家に招き入れることにした。

程なくして意識は取り戻したのだが、困ったことにどうしてここにいるのか当の本人もサツパリのようだね。

なので魔法でここに転移してきたと言えば、『助けて頂いてもらってる身で大変恐縮なんすけど、今時そんなファンタジー（笑）じやあ、誰も騙されませんよ、冗談がお上手っすね。』と切り返してくる始末だ。

それだけに、実際に魔法を使ってみせた時の鷺介の顔は傑作のレベルで笑えるものだったよ。

あれほど痛快な気分になることは、滅多にないだろうね。

思い出すだけで、笑える。ウーパールーパーとゴリラを足して二で割った様なあの……。

すまない。話が脱線してしまったようだ。どこまで話したかな…。

えっ？どんな顔だったか気になるのかな？

でも、その話は一先ず後にしようか。まあ、念話を使ってやった時もなかなかの顔だったのだが…。

それも含め機会があればいずれ語らせて頂くとよ。

そうだ、思い出した。こちらが魔法を使ってみせた後からの話だった。

鷲介も、実際に魔法を見せられた以上は納得するしかなかったよ。うで、渋々だが魔法という存在を受け入れたようだった。

これで分かったのは、鷲介が転移する前の世界では魔法文化に触れる機会がなかった、あるいは、そもそも魔法文化がない世界にいたという事。鷲介自体にリンカーコアがあるという事だ。

しかし、この考えは矛盾してるっていい。何故だか、分かるかね？

そう、正解だ。聡明な君達には簡単すぎたかな？

鷲介がリンカーコアを持ち、術式を用いて魔法で転移してきた以上、鷲介は少なくとも魔法に触れる機会、魔法文化がある世界にいないからではないからだ。

原因無くして結果無し、といったところだ。実にシンプルだ。

そうなるよ、当然の事だが、どれかが嘘の情報である可能性が出てくる。

さて、ここでまた君達に考えてもらいたいのだが、かまわないだろうか？

一体、どれが嘘の情報で、嘘吐きは一体誰なんだろうね？

そう言ってグラムは、『これまでの話』を締め括った。

解答は、どうやら機動六課隊長陣の三人に委ねられたようだった。

第5話「君達の答え（アンサー）」（後書き）

お疲れ様でした。

いかがでしたでしょうか？

お楽しみ頂けましたか？

では、また、次話でお会いしましょう？

第6話「あなたの答えは？」（前書き）

米寿です。

皆様いかがお過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第6話「あなたの答えは？」

グレアムの質問は部隊長室に沈黙をもたらした。

けれど、それは仕方ないことだ。なぜなら、質問の意図が読めないからである。

さらにいえば、この質問を隊長陣三人に答えさせるといふ点も沈黙を助長する原因となっている。

質問の意図が読めない、故に質問に解答することができない。

あの時と似てる。

私とフェイトちゃんが恩師に宿題を出された時と。

きっとフェイトちゃんもそう思ってるはずだ。

なら、思い出してみよう。きっと何か見えてくるはずだから。

『自分より強い相手に勝つためには、相手より自分が強くなくてはならない』

これは、私とフェイトちゃんが、かつての恩師からもらった言葉。

この言葉の意味を考えることを、恩師は私達に宿題としました。

当時の私達は、必死になっているいろいろ考えたけど、なかなかいい答えを見付けられずにいました。

きっかけは、私の何気無い疑問だったと思う。

ねえ、なのは？

この宿題の言葉なんだけど、何かおかしい気がするんだ。

『自分より強い相手に勝つ』ってところはそのままの意味だと思う。

けど、『相手より強く無くてはならない』ってところは、おかしいよね。

だって自分が相手より強かったら、それは、もう、自分より強い相手じゃなくなっちゃう。

それじゃあ、自分より強い相手に勝った事にならないから……。

うーん……………。

うーん。と唸っているフェイトちゃんを見ながら、私はさっきフェイトちゃんが言ったことを考えていた。

言われてみれば、恩師の宿題は、確かにおかしいと思う。

だって、最初の言葉と最後の言葉が繋がってないから。

じゃあ具体的に、自分より強い相手ってどんなだろう？

思い出したのは、闇の書の防衛プログラムとの戦い。あれは、皆の力を合わせてなんとか勝ってた相手だった。

あれ???

私、自分より強い相手に勝ってるや。

もしかして……。

あっ！という声が重なる。そして二人は顔を見合わせた。

そしてまた二人の声が重なる。

『自分より強い相手に勝つためには、相手より自分が強くなってはならない』っていうのはさ……、

「グレアムさん。」

その一言で部隊長室に降りていた沈黙が、ついに破られる。

「さっきの質問に、答えてもいいですか？」

「かまわないよ、なのはさん。聞かせて欲しい。」

「はい、ありがとうございます。では…。」

そして、なのはの口から答えが紡ぎ出される。その声には、確かな響きがある。

「答えは、『どれも嘘の情報ではなく、誰も嘘をついていない』、です。」

「ふむ…。何故そう思うのかな？」

「それは、あるひとつのキーワードで説明できます。ね、フェイトちゃん？」

「うん。ここからは、私が答えても、いいですか？」

「…つまり、二人は同じ答えに辿り着いたということかな？」

「はい。」

「なるほど。では、フェイトさんにお聞きしよう。」

「あるキーワードとは一体何かな？」

「記憶喪失です。」

「……………ほづ。」

「リンカーコアがあつて術式を発動していても、転移の時に記憶を失っていたのなら魔法の使い方は分からない。」

「そして記憶がないから魔法を見て、千歳君は凄く驚いた。」

「だから、』どれも嘘の情報ではなく、誰も嘘をついていない』
という答えになる訳かい？」

「そうです。」

フェイトの瞳が真っ直ぐグラムを射ぬく。その瞳に迷いの色はない。

「……………」

「グラムおじさん。それだけじゃ、納得しきれんって顔してますよ。」

「…そう見えるかね？」

はやては頷き、それから、確認をとるように、なのはとフェイトに視線を送った。

「フェイトちゃん、続きは私から、話してええかな？」

「いいよ。はやて、後は任せるね。」

「なのはちゃんも、ええか？」

「もちろん。お任せするね、はやてちゃん。」
「しっかり任されたわ。こりゃ、気合い入れんとあかな。」

はやては、おどけた様にどんと胸を叩いた。

「さっき、なのはちゃんとフエイトちゃんが同じ答えだと言っていましたけど、ウチも同じ答えですよ。ただ…。」

「ただ？」

少し前のおどけた表情から一変して、鋭い空気をはやては纏った。

「その前に、グレアムおじさん、こっちからも質問があります。」

「なにかな？」

「ウチらって、そんなに信用ないんですか？」

はやてが投げ掛けた言葉で、再び、部隊長室は沈黙に包まれた。

第6話「あなたの答えは？」（後書き）

お疲れ様でした。

御一読頂きありがとうございます。

いかがでしたでしょうか？

ご満足頂けるよう、これからも頑張っていきますので今後とも宜しくお願いします。

では、また次回、お会いしましょう。

第7話「どじろよろしく」(ナイス・トゥ・ミー・ユー)「(前書き)

米寿です。

いかがお過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第7話「どうぞよろしく(ナイス・トゥ・ミート・ユー)」

部隊長室に降りた二度目の沈黙。しかし、その沈黙は長くは続かなかった。

グレアムは大きく息をはき、体を緊張から解放した。

「…降参だよ、はやくん。どうしても私自身で確かめておきたかったのだ、すまないね。」

そして、鷲介は嫌がるだろうがねとこぼした。

「気にせんで下さい。私も言い方がキツかったと思ってますし。」

もう鋭い空気はそこにはない。いつもの人懐っこい笑顔を浮かべたはやてがいた。

「ありがとう。これではっきりしたよ。君達になら、信…」

「隊長!!!緊急自体です!!!」
けたたましいアラートと共にグリフィスから通信が入る。

「ほ、報告します!演習場付近に正体不明の巨大な魔力反応が二

つ！現在解析中ですが、推定Sランク相当！ロングアーチは警戒体制、フォワード陣には付近で待機命令を出しあります！至急、指示をお願いしま…す…って…あれ…？」

隊長陣のなんともいえない、微妙な表情を前に、グリフィスの語尾は尻すぼみになっていった。

「なんちゅうか、えらいタイミングやなあ。」

「はあ……どういうことでしょうか？」

「気にせんでええよ、こっちの話や。」

「ロングアーチ及びフォワード陣に到達。この事態はすぐに収まる。せやから平常時に戻ってええ。詳細は後日、追って説明するわ。」

「了解しました。では、私から各人に到達しておきます。」

「よろしく頼むわ。」

シリアスなセリフへの割り込みは、場の空気をかなり難しいものにしてしまった。

「ありがとう。これではっきりしたよ。君達になら、信じて鷺介

を任せられる。」

しかし、それもどこ吹く風と言わんばかりに、さっきまでのやりとりを無かったことにした。

流石、歴戦の勇士。

三人はかなり戸惑ったが、結局、グレアムの空気にのることにした。

大事な話の最中だったわけで、背に腹は変えられない。

「グレアムさんにとって千歳君は、本当に大切なんだってことがわかりました。」

「なのはの言う通りです。配属前に、わざわざあんな質問したのも、私達が千歳君を受け入れてくれるか、確かめたかったんでしよっし。」

「特殊な事情を抱えているのは、千歳君だけやない。せやから、その事で千歳君の扱いが変わるということはありませんから安心して下さい。」

「ありがとう。かえって気を使わせてしまったようだ。すまない。」

「そんな、謝らんで下さい。グレアムおじさんが認めて、大切に思ってる人を預けて頂くわけですから。むしろこっちが感謝したいくらいですよ。」

「そうか……。では、今更なのだが、『これからの話』の返答を聞かせてくれるかね？」

はやては表情を引き締め、グラムに向き直り姿勢を正した。

「では。」

「まず、応援要請の受理、ありがとうございます。」

「そして、機動六課部隊長、八神はやてが囑託魔導仕、千歳鷺介の入隊を……」

『きいいいいいやあああああ！！！！』

「「「……………」」」

断末魔が周囲に木霊した。そして、場の空気は見事なまでにコナゴナになってしまった。

「「「ぶっ！」「」」

「くくっ、くっふ……あかん。二度目はあかんって」

「せっかく、我慢してたのに、ふうく……もっ、もう無理い〜。」

「ふっ…ふふっ…ふう…ふう…くうっ、はあっ、お、お腹痛い。」

隊長室に笑いがこぼれた。

その様子をグレアムは微笑みを浮かべ眺めていた。その瞳に、懐かしさを湛えて。

三人がある程度落ち着くまでそれなりに時間が掛った。

落ち着いたタイミングを見計らって、グレアムは口を開いた。

「いつもこうなんだ、不思議なことだね。生まれ持った才能…と
いったところかな？」

「やっぱし、ただもんやなかったなあ。」

「これから、楽しくなりそう。」

「うん、本当。」

思い思いの感想を口にしてしていると、隊長室に魔法陣が現れ、所々焦げた鷺介と二匹の猫が転移してきた。

「主役が来たようだ。私はこれで失礼するよ。」

「ロツテとアリアもしばらくしたら戻ってくるように。」

二匹は、鷲介の頭の上で一声鳴いて応えた。

通信が切れる。鷲介に起きる気配はない。

「千歳君が起きたら、本格的な話を始めようか。」

「だね。」

「うん。」

「聞こえてへんやろけど…。千歳君、どうぞよろしく。そして…。」

「『『『ようこそ！機動六課へ！』』』」

かくして、千歳鷲介の機動六課隊長陣との初顔会わせは、鷲介の思惑を大きく外れて終わった。

第7話「どうぞよろしく」(ナイス・トゥ・ミート・ユー)「(後書き)

お疲れ様でした。

如何でしたでしょうか？

ご満足頂けたでしょうか？

読者の皆様、御一読ありがとうございます。

これからも頑張りますのでお付き合い、宜しくお願いします。

第8話「見解の相違？」（前書き）

米寿です。

皆様、如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂けたれば幸いです。

第8話「見解の相違？」

あれ？

また、お会いしましたね、死神サン？

すみません、失礼しました。

アナタ、死神じゃなくて、ワタクシの帰りを待っていてくれる、大事な、大事な、家族みたいなもんでしたね。

シーン。恥ずかしさを我慢してのセリフにもリアクション無しと。

感動の再会シーンなんすから、もう少しくらい優しくして頂いても、バチはあたらないうんじゃ…

はい？

いつぶりの再会かって？

こつちの話は無視っすか。素晴らしい！いつそ、ここまでくると清々しい！

いやー、心が寒いサムイ。

…ようがす。思い出しますんで、その怖い顔を辞めて下さい。

ええっと…最後にお会いしたのは、確か……、ああ、思い出しま

した。

姉さん達の激しい『照れ隠し』に飲み込まれて、意識が旅立つ瞬間でしたね。

ということは、機会があった、という訳ですか。

いえ、機会を与えて頂いた、と言ったほうがいいですかね？

おっと。

楽しいお話の途中なんですが、姉さん達が呼んでいるみたいなんです、いけないといけなくなってしまうました。

名残惜しいんですが、すみません、失礼します。

では、また、後程。

たしたしと二匹の猫が鷺介の頭を前足で叩いている。

うっ…というつめき声が聞こえ、ゆっくりと鷺介の体が起き上がった。

「ここは……?」

「部隊長室や。千歳君、おはようさん。」

「医務室に運ばれてすらないっ!!……はっ!ええっと、すみません!失礼致しました!」

やってしまいました。

あれだけの事があったのに、部隊長室の床に放置という残酷な現実には思わず…。

もとい、美人の部隊長様からの「おはようさん。」に動揺して思わず…。

美しい女性が自分を起こしてくれる。これで、動揺しない男はいないんじゃないでしょうか?

今、その話は関係あるのかって?

察しが悪いっすね。鋼鉄の心臓を持つ、ワタクシ、千歳鷺介が取り乱すくらい、かーなりピンチな状況ってことっすよ。

しかし、まだです。

『諦める』・『逃げる』という言葉が最も似合わない男こと、千歳鷲介ならこんな状況を引っくり返すことくらい訳はありません。

さらに、グレアムのおじ様とさっきまで通信されていたはず。

きつとワタクシの素晴らしさについて語って頂いていたに違いありません。

ここまでのフォローがあつて、何を怯えていたのでしょうか。

らしくありませんでしたね。輝かしいデビューへ、再スタートといきましよう！

「あははっ。やっぱり、千歳君は面白いね。ね、フェイトちゃん」
「？」

「うん、ふふっ。グレアムさんの言ってた通りだ。」

「フォローする気ゼロッ！！！」

頭の上と、肩に乗った二匹も当然だと言わんばかりに鳴いた。もちろんこちらもフォローする気は一切ないらしい。頭と肩に感じる温もりも、世間の冷たい風にかき消されていくようだ。

はあ…苦勞って何の為にするんでしょうね？

お分かりになる方、是非、千歳鷲介まで御連絡を。

お茶かコーヒー、それにおいしいお菓子を用意してお待ちしてお

ります。

「ほんなら、こつからは、変に飾るのは無しにしていこつかな、千歳君？」

「よろしいのですか？」

「かまへんよ。なのはちゃんとフェイトちゃんもそれでええよな？」

二人は笑顔で頷いた。

「了解しました。でも、最後にこれだけは、やらせて下さい。」

男には、どうしても譲れないモノがあります。張らなきゃいけない、意地があります。決めなきゃいけない時があります。

「本日付けで、囑託魔導士、千歳鷺介。機動六課に出向になります。どうぞ、宜しくお願い致します。」

この挨拶と様になった敬礼だけはビシッと決めますよ。

「はい、よろしく願います。」

「よろしく。一緒に頑張ろうね。」

「うん。よろしくね、千歳君。」

これからお世話になる訳ですからね。ケジメはちゃんとするからね？いい男っぷりでしょ？

これでなんとか面子は保ちましたよ。いやー、一時はどうなることかと思いました。

終わりよければ、全てよし。なんともいい言葉じゃありませんか。ワタクシの門出を祝う言葉で、これ以上のものはないんじゃないでしょうか。

ん？八神隊長が何か言いたそうにしてるって？

かまいません。かまいません。なーんでも仰って頂いて結構です。めでたいですからね、大抵の事なら受け止めちゃいますよ。

「私な、千歳君に言おう、言おうと思うてた事があるんやけど。」

「あつ、私も。やっぱり、はやてちゃんもなんだ。」

「えっ？なのはとはやてもなの？良かった、私だけじゃなくて。」

「そんなら、私が代表して言うわ。」

「千歳君、ホンマに敬礼似合わんなあ。」

「うそおおーん!!」

満場一致で千歳鷺介の外向き対応は否決された。控訴しても勝ち目はないぐらいの、清々しい判決で。

第8話「見解の相違？」（後書き）

お疲れ様でした。

ご満足頂けたでしょうか？

これからも頑張りますので、宜しくお願い致します。

読者様、御一読ありがとうございました。

第9話「企業秘密」(トッピングシークレット)「(前書き)

米寿です。

皆様、如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂けたら幸いです。

第9話「企業秘密（トップシークレット）」

ロツテ・アリアも鷺介の六課配属を見届けて、猫の姿のままグレアムのもとに戻っていった。

戻る際、一度、心配そうに鷺介の方を振り向いて一鳴きしたが、鷺介はそれに手を振って応え、それで、別れの挨拶を済ませたようだった。

「みんなへの紹介は今夜の夕食前にしよか。ちようど、交代勤務の副隊長陣も戻ってくるしな。」

「そうだね。あつ、はやてちゃん。まだかなり時間あるから、先にフォワード陣に挨拶させに行きたいんだけど、いいかな？」

「せやな。ほんなら、そうしよか。よろしく頼むな、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

「うん、任されたよ。千歳君面白い人だからフォワードの皆ともすぐ仲良くできると思うんだ。じゃあ、はやて、また後でね。」

「千歳君もまた後でな。挨拶、期待しとるよ。」

「了解つす。」

「じゃ、行こっか？」

「了解つす。」

「ちゃんと、私となのはの後に着いて来てね。」

「了解つす。」

三つの「了解つす。」の違いお分かりになりましたか？

一見、同じ言葉に見えるかもしれませんが、けれど、そこに込められた想いは、相手によって違ってくるのは当然ですよ。

アナタにもそんな経験、あるんじゃない、ありませんか？

例えを上げるなら、ケイドロかドロケイかみたいなの感じっすね。

えっ？

前半部分は理解出来たのに、後半部分はまるで理解できない、と。

いやー、実に珍しい。アナタとワタクシの意見が合うとは思いませんでした。

まあ、それだけコッチの調子が乱されてるってことなんすけど。

ん？

なーんで、そんな不思議そうな顔してるんすか？

『美女お二人のエスコート、ひゃっほうー!!』って言うつとでも思いました？

またまたあ、どういふ事が分かってらっしゃるくせに。

あくまで知らないフリで通すわけっすか。

まあ、いいんすけどね。

代わりとってはなんですが、アナタとお喋りでお喋りで調子を取り戻すことに致しましょう。

では。

折角ですから、さっきの「了解っす。」の解説でもしましょうか？

それとも、フリーライター、千歳鷺介が語る『高町隊長とテストロツサ隊長の後ろ姿！トータルバランス編』、にします？

ああ、すみません、うっかりしてました。

アナタ、『トータルバランス編』よりも『ピンポイントピックアップ編』がお好みでしたね。

いや、恥ずかしくて、隠さなくったていっすよ。長い付き合い合いないっすか。

遠慮はナシっすよ。お互いにね。

ね、そう思いませんか？

隊長のお二方も。

部隊室を出て、時間に見れば、僅か三十秒に満たないくらいの沈黙。

しかし、空気はどことなく上滑りしている様に感じる。

歓迎か戸惑いか、あるいはその両方か。

「高町隊長にテストアロッサ隊長、ちょっとよろしいですか？」

呼ばれた二人は鷺介へと振り返る。二人の肩がほんの僅かに跳ねた。

「うん。なにかな？」

「千歳君、どうかした？」

「おじ様にいろいろ聞いたと思うんですけど、俺からも一つ言うておきたいことがあります、いいですかね？」

二人の返答を聞く前に鷺介は、口火を切った。

「お歳暮どうでした？ご満足頂ける自信があったんすけど？」

「「へ？」」

「いや、なかなか聞けなくてムズムズしてたんすよ。で、どうでした？」

「えっと…。お節料理が真空パックで送られてきたやつだよね？」

「そう！それなんですけど、実はあれ、俺が作ったんすよ。」

「高町隊長のにはレイジングハートさん風巻き寿司、テストロツサ隊長のには、バルディッシュさん風数の子の和え物。なかなかの自信作でして。」

「そうだったんだ。千歳君、料理上手いんだね。すごくよく出来た。ね、バルディッシュ？」

【見事でした。】

「お誉めに預かり、恐悦至極。」

「レイジングハートもよく出来てたよ。さらに、おいしかったしね。」

【お上手でしたね。】

「ありがとうございます。嬉しいなあ。」

屈託なく笑った後、鷺介はフツと息で、前髪をかきあげた。

「完全に無いわけじゃないんすよ、記憶。」

また笑顔になり、言葉は続く。

「お歳暮やお節料理のこと、後は、自分の名前だってちゃん覚えてた訳ですし。」

「そして、おじ様と姉さん達に出会えたおかげで、これまでも楽しく過ごってきて、さらに、こうして皆様ともお会いすることができました。」

だから

「だから、堅苦しいのだけじゃなく、遠慮もナシでいきませんか？」

せつかくご縁があるなら、楽しくいきたいじゃないですか。

「そうだね。ありがとう。」

「ありがとう、千歳君。」

「お歳暮の事っすか？気にしないで下さいよ。お世話になるんだ

から、そのくらい当然っすよ。」

二人はキョトンとした表情を浮かべたが、すぐにその意図を察した。

「そっか。じゃあ、そういうことにしとくね。」

「ふふっ。そうだね。」

「いえいえ、どう致しまして。」

「じゃあ、遠慮ナシってことなら、私のことは、『なのはさん』
で、皆そう呼ぶしね。」

「それなら私も『フェイトさん』でお願いしようかな。」

「了解っす。」

「それじゃあ、『なのはさん』、『フェイトさん』ご案内宜しく
お願いします。」

「うん。」

ワタクシ、この、「了解っす。」が言いたかったんすよ。

もちろん、解説は必要ないっすよね？

「千歳君？」

「はい。なんすか、フエイトさん？」

「お節料理のバルディシユは数の子で作ったんだよね？」

「そうっすよ。」

「じゃあ、レイジングハートは何で作ったの？」

「あつ！それは私も気になってたんだ。あの赤の艶具合は普通じゃ出せないと思うんだよね。」

鷺介はついつと目を反らして明後日の方を向いて、誤魔化す様子でこう言った。

「美女お二人のエスコート、ひゃっほう！！」

アナタ、やっぱり流石っすね。これを言うのが分かってたんでしょっつ？

マーベラス！素晴らしい！脱帽しました。

それに、自分で言ったという恐縮なんすけど、人間、遠慮も必要だと思っんです。

聞かなきゃよかった。なーんてことも、世の中にはありますから。

第9話「企業秘密」(トップシークレット)「(後書き)

お疲れ様でした。

ご満足頂けたでしょうか？

頑張りますので、今後とも応援宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第10話「Are you ready?」(前書き)

米寿です。

皆様如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第10話「Are you ready?」

お節料理騒動で、より仲を深められました。

ギクシヤクしていた雰囲気もどこへやら、という感じですかね。

気の置けない上司と部下の関係へ早変わり、ってまでは言い過ぎ
っすけど、打ち解けたなあ、とは思います。

なのはさんの、「もう！千歳君！」って怒り方も中々でした。

怒り方も実にチャームिंगです。素晴らしい！流石は隊長、ポイ
ントを押さえていらっしやる。

余談なんすけど、チャームिंगって死語っすかね？あんまり、見
掛けたり聞いたたりしなくなった気がするんすよね。

おっと、すみません。話が逸れましたね。

ま、なのはさんとは、ジョークが通じる仲まできたってのが言い
たかった訳です。

このまま、なのはさんとの距離が縮まっていけば、ゆくゆくは…、
なーんて事もあるかもしれませぬ。

そうなったら、式にはアナタも呼びますんで、是非、御出席を。
最高の席と時間をアナタへ御用意致します。

シーン。イタイ奴発言でもリアクション無しっつと。

ホント、ストライクゾーン狭いっすよね。ミスジャッジとかしてませんか？

不服なのかって？

いえいえ、そんなことはございません。審判のコールは絶対ですからね。

気になったんで、ちょっと、聞いてみただけっすよ。

アナタもいつか、笑ってくれる日が来るのかなって、ちょっとそう思っただけ。

シーン。時間差のクサイセリフにもリアクション無しっ!？

新パターンっすよ! ツッコミ所も、もれなく二倍の王道展開じゃないっすか!

…ようがす。

認めましょう。

アナタは、やはり、ワタクシの越えるべき壁だということ、改めて…

ちょっといいか、って？

今、かなり盛り上がってる場面……、

「そういえば、千歳君？」

なのはさんからの呼びびとあらば仕方ないっすね。

決着は一旦お預けということでもいいっすか？

なのはさんをお待たせしたら、失礼ですしね。

では、ごきげんよう。続きは後程。

「さっきですっかり忘れてたんだけど。」

「はいはい。なんすか、なのはさん。」

「魔導士ランクはどのくらい？」

「空戦のCっすよ。」

名前に『鷲』って入ってて、飛べないなんて名前負けしなくて、
本当に良かったですよ。

「へえ、空戦なんだ。フォワードは皆、陸戦なんだ。ランクは皆、

千歳君より上だけど。」

「ということは、B以上って事っすか？優秀な人材が揃ってますねえ。」

ん？

「うん。若いし伸びしろも一杯あるから、鍛えがいがあるだ。」
もしかしなくても、これって、ワタクシお荷物確定？

「そりゃ、頼もしいっすね。ははは……。」

若くないし、伸びしろもない。いやー、現実残酷ですね。

「私も聞きたい事があるだけど、いいかな？」

「どうぞどうぞ。なんでしょう、フエイトさん？」

「魔法は誰に？」

「おじ様と姉さんたちに。……辛く、苦しく、困難に溢れた道でした……。」

鷲介は目を瞑り天を仰いだ。目の端にはうつすらと輝く雫があった。多くの試練を越えてきた男の背中がそこにはあった。

しかし、生き様を背中で語る男、千歳鷲介的な演出は、ひたすらに

安い上に胡散臭かった。

「そ、そうなんだ…。なんか、ごめんね。」

「いいつすよ。気にしないで下さい。おかげで、魔導士として六課のお役に立て……………ん？」

「な、何かな？」

「いや。フェイトさんじゃなくてですね。」

「どーしたんすか、なのはさん？そんな難しい顔して。折角の美しいお顔が台無しつすよ。」

「千歳君、フォワードの皆と合流したら、一緒に模擬戦に参加して欲しいんだけど、いいかな？」

「隊長として、早いうちに千歳君のスキルとかを把握しておきたいんだ。」

こちらの軽口は完全スルーな上に、模擬戦のお誘いつすか。

遠慮は無しつてのはちゃん伝わってたみたいつすね。

「一応ボカしてるんすけど、『スキルとか』ってあたりが、ねえ。

まあ、それも仕方ないんですけどね。

姉さん達、Sランク相当の二人の全力攻撃をマトモに受けて、一

日どころか一時間も掛らずリカバリーしてますしね。

それは、疑うのも仕方がないと思います。

という訳で、ワタクシの答えはもちろん決まっております。

「ようがす、オッケーです。この千歳鷲介、精神誠意頑張らせて頂きます。」

「うん、ありがとう。」

「とんでもない！なのはさんに直々に、教導して頂けるなんて、感動で胸が張り裂け…」

「千歳君はどんなデバイスを使ってるの？」

セリフをカキ消した上に質問とは、やりますね、フェイトさん。

なのはさん同様、大分遠慮がなくなってきたみたいですね。

遠慮がないというか普通に失礼じゃね？と思ったアナタ！

小首を傾げたフェイトさんを想像してみてください。

Q・E・D（証明終了）、カワイイは正義なんです。

ん、あれ？

よくよく考えてみたら、アナタ、私をかばってくれたんじゃないか…。

そんなことより、フェイトさんが待ってるって？

そうでした。美女を待たせるのは、ワタクシの流儀に反しますからね。

丁重にお答えするといたしましょう。

「インテリジェント型のデバイスです。」

「あ、私達と同じだね。名前、なんていつの？」

「アレキサンダーって名前です。」

「アレキサンダーか、いい名前だね。どんな子？」

「……………」

「千歳君？」

「ああ、ええ、す、すみません。なのはさんの模擬戦の時まで、どんな奴かお楽しみってことでいいですか？」

「？うん、いいけど。なんかスゴい汗だよ。大丈夫？」

「お、お気になさらず。大丈夫だし。」

語尾が締まらないほど、動揺してしまいました。

あっ、内心もだ。

すっかり忘れてたんですけど、というか忘れたままでいたかったんですけど、模擬戦、つまり魔法戦にはデバイスを使用するんですね。

……これは、覚悟を決めなきゃいけないみたいですね。

『奴』を解き放つ時は、遅かれ早かれ訪れる運命。

しかも、おじ様や姉さんたちに善処するって言っちゃってますからね。

「もうすぐ着くから、千歳君、挨拶の準備しておいてね。」

「了解です。なのはさん。」

後は、なのはさんとフェイトさん、そして、これから出会うフォードの皆様に『奴』が受け入れられるのを期待すると致しましょう。

どうやら、この機動六課で、簡単にはぬるっといけないみたいですね。

さて、『奴』のことをあんまり考えても仕方ないっすから、フォードの皆様への挨拶でも考えますか。

仲良くできるといいんですけどね。

そんなことを考えながら、鷲介は二人の後に続いて歩いていく。

新しい仲間との『出会い』と物語の『始まり』は、すぐそこまで迫っている。

これは例えばの話なんだけど

魔法の力をもらってしまったある青年が

仲間と絆の意味を知り

そのために、戦うことを選ぶ

最後に皆が笑顔でいられるように

これは、そんなありふれた話

君たちに贈るのは、例えばそんな、ファンタジー

第10話「Are you ready?」(後書き)

お疲れ様でした。

ご満足頂けましたでしょうか？

ブログも終わり、ここから、いよいよ、本編へ皆様をご案内致します。

頑張らせて頂きますので、どうぞ宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございました。

第11話「出会い（メン・ミーツ・ボーイアンドガールズ）」（前書き）

米寿です。

皆様、如何お過ごしでしょうか？

楽しんで頂ければ幸いです。

第11話「出会い(メン・ミーツ・ボーイアンドガールズ)」

本来交わるはずのなかった物語達。

出会うのは、新たな仲間。

そして、動きだす。

翼のない、彼と彼女達が紡ぎ出す物語。

どんな結末が、この先に用意されているのだろうか？

これは、そんなもしもで、例えばのファンタジー。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』 始まります。

「フォワードの皆、集合ー。」

「はいー……」

「今日から、新しい仲間が増えることになったから、皆に紹介するね。」

「正式な紹介は今夜の夕食前だけど、皆には先に会ってもらうことにしたんだ。」

「それじゃ。」

「自己紹介お願い。」

「了解つす。なのはさん、フェイトさん。」

「初めまして。朝でも昼でもコンバンワ！囑託魔導士ちとせしゆうすけの千歳驚介と申します。」

「趣味は料理と読書。年は、花も恥じらう24歳！気軽にシユウちゃんともお呼び下さい。どうぞ、よろしく。」

「「ええっ！！」」

あれ？自己紹介のはずが隊長方が、驚かれているみたいですね。

サプライズ情報はなかったし、仕掛けたつもりもないんですけど…。

「千歳君って年上だったの!？」

「あれ？八神部隊長にお送りした書類に記載してありましたけど。なのはさん、ご存じありませんでしたか？」

「聞いてないよ、はやてちゃん…。」

「もう、…はやては。じゃあ、千歳君じゃなくて、千歳さん？って呼んだ方がいい？」

「フエイトさんにお任せ致しますよ。ただ、『お互い遠慮無し』っすよ？」

「うん。じゃあ、今まで通りで。なのはもそうするんでしょ？」

「もちろん。でも、千歳君、すごく若く見えるな。私達と同じくらいだと思ってたから、ビックリしちゃった。」

「お誉めに預かり光栄なんすけど、フォワードの皆様が、完全に置いてけぼりなんすけど、いいんすか？」

えっ？

何っすか？

『置いてけぼり』じゃなくて『置いてきぼり』じゃないのかって？

あー…、ワタクシがこんな事を言うのも何なんすけど。

その話、今、関係ありますか？

なのはとフェイトに、はやてが仕掛けていたドッキリは効果抜群だった。

少なくとも、フォワード陣は隊長達の意外な一面を見て、緊張がほぐれたようだった。

「ごめんね、みんな。改めて私から紹介するね。」

「こちらは、千歳鷲介君。本日付けで六課に派遣になった、囑託魔導士。」

「只今、ご紹介に預かりました、千歳鷲介です。どうぞ宜しくお願い致します。」

先程のワタクシの自己紹介は完全に流されましたね。

最近、スルーや流されることが多い気がするんですけど…。

おかしいっすね。196通り考えた挨拶から、一番無難なのを選んだつもりだったんですけど。

まあ、フォワードの皆様もポカーンとしてましたし、結果的には良かったんですけどね。

「じゃあ、みんなも自己紹介しようか？」

「「「はい!」「」」」

「スバル・ナカジマ二等陸士です!」

「ティアナ・ランスター二等陸士です!」

「エリオ・モンディアル三等陸士です!」

「キャラ・ル・ルシエ三等陸士です!」

「「「宜しく願います!」「」」」

いやー、皆様元気一杯っすね。素晴らしい!

では、お待ちかね、恒例の千歳鷲介お仲間チェックいってましまし
よう!

まず一人目は特に元気一杯の挨拶をしてくれた、スバル・ナカジ
マさん。

人懐っこい笑顔が大変キュートですな。

そして、ショートカットの髪型がボーイッシュさと爽やかさを同
時に演出しています。

マーベラス!いい感じっすな。

お次は、少し目付きのキツイ感じのティアナ・ランスターさん。

うーん。なんていうか、お綺麗な方なんすけど、なーんか悪寒と

脂汗が…。

すみません。私情は挟まないで評価し直しますね。

勝ち気な瞳とシャープな顔立ちが、クールな美人を作り上げています。

髪は両サイドで結う、ツインテールで、クールさの中に可愛らしさを調和させるアクセントになっています。

…マーベラス！いい感じっすねえ。

三人目は、フォワード陣唯一の男性、エリオ・モンディアルさん。

キラキラした瞳は素直で真面目な印象を与えてくれます。

そして、イケメン。心もイケメン、顔もイケメン。

マーベラス！いい感じっすね。

最後は、最年少のキャロル・ルシエさん。

フワフワした雰囲気を持った子っすね。

一緒にいる、ちっちゃいドラゴンとセットで、マスコットのなかわいさを感じますね。

マーベラス！いい感じっすね。

こんな感じですかね。

後、すっごい気になってるん事があるんですけど、いいっすか？

ちっちゃいドラゴンがすっごいこっち見てるんすけど…。

何なんでしょう？

えっ？

ルシエさんをイヤらしい目で見てたからじゃないのかって？

アナタ、何をいつてるんですか？

これから、一緒に働くお仲間ですよ。そんな邪な気は一切ありませんよ。

というか、こっちも気になってたんすけど、アナタも様子がおかしいっすよね？

奴を使う前の予行練習？

ああ。なるほど、そういっことっすか。

ありがとうございます。でも、いいんすよ。

覚悟は決めていますから。

さっさと、そろそろ戻りますね。

大丈夫っすよ。なんとかやっけていきますから。

信じて下さい、ね？

「挨拶も済んだし、千歳君を交えて模擬戦、いってみようか。」

「「「「はい！」「」「」」

「あのー、なのはさん。いいつすかね？」

「どうしたの、千歳君？」

「お互い、初対面なんで、スキルの確認とかしたいんで、お時間を少し頂けなでしょうか？」

「うん。そうだね。じゃあ、十五分後に始めるから準備、しつかりね。」

「「「「了解！」「」「」」

「了解っす。」

フォワードメンバーと鷺介は少し離れた所で集まって準備を始めたようだ。

この場には、なのはとフェイトが残っている。

フォワードと鷺介の様子を見ていたフェイトが口を開いた。

「ねえ、なのは。千歳君は、どんな魔導士なんだろうね？」

「ちょっと予想できないけど、でも…」

「でも？」

「みんなの力になってくれる。そんな魔導士だったらいいなって思うんだ。」

「そうだね。それに、グラムさんとロツテさん、アリアさんが魔法を教えてみたいだから期待できそう。」

二人は顔を見合わせて微笑んだ。その顔には新しいメンバーになる、鷺介への期待が込められていた。

しかし、その表情は長くは続かない。

二人の視線の先には鷺介の姿。

先程の柔らかな表情から一転、真剣な眼差が送られる。

「…なのにも気付いてると思うけど、Cランク魔導士がSランクの攻撃を受けて、あんな短い時間で復帰できるなんて、普通ならありえない。」

「うん。何かあるんだと思う。だから、この模擬戦で見極めたいんだ。千歳君の力を、人となりを直接この目で。」

一陣の風が、隊長二人の髪をフワリと巻き上げた。

模擬戦までの時間は、後十分弱。

様々な思いが交錯する中、物語の歯車は、今、静かに回り始めた。

第11話「出会い（メン・ミーツ・ボーイアンドガールズ）」（後書き）

お疲れ様です。

ご満足頂けたでしょうか？

これからも頑張りますので、宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第12話「有意義なミーティング？」（前書き）

米寿です。

如何、お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第12話「有意義なミーティング？」

ギン姉へ。

今日、六課に新しい仲間がやってきました。

男で、しかも年上の囑託魔導士の人です。

仲良くできるか、心配だったけど、とつてもいい人で安心しました。

そして、いきなりなのはさんと模擬戦する事になったんだけど…

あつ、時間だ！

ごめんね。

続きはまた、メールします、スバルより。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』 始まります。』

「それじゃ、まずにフォーメーションの確認するわよ。千歳さんもそれでいいですか？」

「どうぞどうぞ。みなさんのポジションをお伺いしたかったので、それでよろしくお願いします。」

「フロントアタッカーはスバル、ガードウィングはエリオ、フルバックはキャロ、私、ティアナがセンターガードです。千歳さんはどこのポジションなんですか？」

「そうっすね。どんな作戦を立てるかによりますね。おっと、その前に二つ程いっすか？」

「なんでしょうか？」

「皆さんを何とお呼びするか決めときたいなと思ったんすよ。」

本当は、部隊のコールサインでお呼びすればいいんでしょうけど、ワタクシまだ、どこに配属されるのか決まってないんすよね。

というわけで、御提案ってな訳です。

「こちらの希望としては、スバルさん、ティアナさん、エリオさん、キャロさんなんすけど、どうっすかね？」

「千歳さんの方が年上だから、スバルって呼び捨てでいいですよ？」

ええ、ええ、そうくると思ってました。

しかし、そうは問屋が下ろしませんよ。

「いえいえ、そうは参りません。六課への配属は皆さんの方が先
つすから。」

「でも…。」

真面目っすね、スバルさん。なら、これで駄目押しといかせて頂
きましようかね。

「さらに、階級もスバルさんの方が上ですし。気軽に驚ちゃんと
でも呼んで下さい。」

ワタクシ、囑託で出向扱いなんで階級がどのくらい分からない
んすよ。

という訳で、それを利用して頂き、年齢の壁を越えてもらおう
という作戦です。

折角、ご縁があつて一緒に働く訳っすから、和気あいあい、仲良
くいきたいじゃないですか。

「うーん…。いいのかなあ、ティア？」

「千歳さんさえ構わなければ、本人もああ言ってる事だし、いい
んじゃない？」

「そっか。うん！じゃあ、驚ちゃんです！」

これで、第一関門突破。スバルさんは素直でいい子っすね。

「私は、千歳さんで。呼び方は御希望のティアナさんでかまわないです。」

「こちらは対照的、かつ鉄壁つすねえ…まあ、いいんですけどね。あの程度は予想できてましたし。」

呼び方が通っただけでもよしとおきますか。

「千歳さんの方が年上ですし、僕は、エリオって呼び捨てにしてもらっていいんですけど。」

「私もエリオ君と同じでキャラって呼んでくれれば。」

この年で、遠慮する事を覚えていて、かつ実践しているなんて素晴らしい！

でも、そんないい子達だからこそ、ワタクシも仲良くやっていきたい訳です。

「そうっすか…やっぱり、年上とは仲良くして頂けないんすかね？」

なので、こういう、素直な子達には、こんな手段で攻めちゃいます。

「いえ！そういう訳じゃ…ないんですけど。」

「うんと…そういう訳じゃ…。」

「ううう反応が返ってくるあたり、可愛くていいっすね。

そりゃ、そんな事言われたら、困まっちゃいますよね。

あつ、決してお二人を困らせて楽しんではいませんから、誤解なき様にお願ひしますよ。

「それなら、『チイ兄さん』ってのはどうでしょう?」

「『チイ』…。」

「『兄さん』…。」

これなら、お二人も呼びやすいんじゃないですかね。

年上の人をお兄さんって呼んだりしますし、それにまだ、ワタクシ、おじさん扱いには抵抗もあるので。

「本当にいいんでしょうか?『チイ兄さん』って呼んでも?」

「是非是非。もう、バンバン呼んじゃて下さい、エリオさん。もちろん、キャロさんもね。」

「分かりました。それじゃあ、よろしくお願ひします、チイ兄さん。」

「チイ兄さん、よろしくお願ひします。」

「はい。こちらこそ。」

これで一段落。時間は後、十分くらいすすかね。

それじゃあ、次に聞きたいことを聞いちゃうと…

「あの一…？」

「どーしました、スバルさん？」

「わたしも、チイ兄って呼んでいいですか？」

「？ええ、スバルさんが気に入った呼び方でかまいませんよ。」

「やった」

なんだかよく分かりませんが、お気に召したようですねによりです。

では、改めて二つ目のお話にまいりましょうか。

時間は限られてますから、有意義に使わないといけませんしね。

「呼び方も決まったついでに、もうひとつ聞きたいんですけど、
いいですか、ティアナさん？」

なんでティアナさんに確認を取るのかって？

初めての会話で気が付いたんですけど、どうやらこのチーム、ティアナさんが、指揮を取ってるみたいなんすよ。

そんなわけで、指揮官さんにお伺い立てたという所です。

「はい。なんですか？」

「なのはさん相手の模擬戦ってどんなもんなんですか？そつっすね、例えば、勝率とか？」

「「「「……。「「「」

あれ？なーんかマズイ事聞いちゃったみたいっすね。

渾身のフリにリアクションしてくれない、アナタみたいにシーンとなっちゃいました。

「……まだ、一度も勝った事はないです。」

なーんか、重い答え方っすね。

「そつすか。」

だからこそ、敢えてワタクシはかるーく、答えさせて頂きますよ。

「そんな事を聞いて何になるんですか？」

おっと、どうやら気に障ってしまったみたいです。

しかし、それぐらいでは、ワタクシ、千歳鷺介はへこたれませぬよ。

「それじゃあ、今日は勝ちにいきましょう。そして皆でお祝いしましょう。」

「……はあ。」

ティアナさんのコイツ何言ってるの？的な視線がかなりキツイです。

「チイ兄は知らないかも知れないけど、なのはさん、かなり強いんだよ。」

ありがとうスバルさん、フォローしてくれてるんですね。

でも、管理局のエース・オブ・エースくらいは、ワタクシも、ちやーんと知ってますよ。

「それに、僕たち四人がかりでも、簡単にあしらわれてしまうんです。」

Bランク並を四人相手してそれは、確にスゴいっすね。

「だから、勝つなんてとてもじゃないけど考えられないんです、チイ兄さん。」

キャラ口さんもなんかシヨンボリな感じですよ。

「うーん。なのはさんがスッゴイ強いつていうのは分かりました。」

「だったら、千歳さん。そんな現実身のない無い話は…」

「でも、勝ちたくないですか？」

ティアナさんの話を遮ってしまいましたけど仕方ありません。

後はこれで伝わるかどうかですけど。

「……策がある。そういう事ですか、千歳さん？」

「マーベラス！その通りです、ティアナさん。どうです、一口乗ってみませんか？」

アナタ、気付いています？

さつきから、なのはさんとフェイトさんの熱のこもった視線がバシバシ飛んできてるんですよ。

これは、期待に応えないわけにはいかないじゃないっすか。

「……おもしろそうですね。聞かせてもらえますか、千歳さん？」

「ようがす、承知しました。それじゃあ、お話します。」

フォワード＋鷲介の作戦会議が始まった。

模擬戦開始まで後、8分。

第12話「有意義なミーティング？」（後書き）

お疲れ様です。

ご満足頂けたでしょうか？

期待に答えられる様に頑張りますので、これからも宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございました。

第13話「戦術と変態的デバイス（マーベラス・タクティクス）」（前書き）

米寿です。

皆様、如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ、幸いです。

第13話「戦術と変態的デバイス（マーベラス・タクティクス）」

フォワードメンバーと千歳くんとの模擬戦に臨む、私とフェイトちゃん。

千歳くんの力は未知数だから、どんな結果になるかは、分からない。

でも、私たちは、この時には考えもしなかった。

私たちの予想を遥かに越える強烈な、『仲間』に出会うことになるなんて。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、『りりつば』『始まります』。

フィールドの設置はこれで大丈夫っと。

もうすぐ時間かな。

今回の模擬戦は、千歳くんの見極め。

なので、フェイトちゃんにも協力してもらおう事にした。

どんな魔導士で六課ではどのポジションに置くのがいいのか。

今日は、いろいろな事を模擬戦しながら、考えていきたいなと思う。

じゃあ、そろそろ始めよっかな。

「皆、そろそろ、いいかな？」

「「「「「はい!」「」「」「」

「じゃあ、今回の模擬戦について説明するね。」

聞いたら、皆ビックリするかも知れないけど、でも、きっと大丈夫だよな？

「新メンバーの千歳くんを含めたフォワード五人を、私独りで相手するのはちょっと大変だと思うんだ。」

「だから、今回はフェイト隊長にも手伝ってもらおう事にしました。」

「うん。そういう事だから、皆、ヨロシクね。」

「「「「「宜しくお願いします。」」「」「」

あれ？全然驚いてない。

もしかしたら、ティアナあたりが想定はしてたのかな？

「じゃあ、次にミッションの内容を説明するね。」

「私のシューターを十分間避け続けるか、一撃を入れれば勝ち。」

「ただし。」

「ここからが、この模擬戦のポイント。」

「開始から三分後にフェイト隊長がこっちの味方として参加します。」

今回の模擬戦はもちろん見極めが優先だけど、フォワードの皆には、いろんな状況に対応できる様になって欲しいからね。

「シューティングにさらに条件を付け加える形だね。」

「皆、大丈夫だよな？」

「「「「はい！」「」「」「」」

「うん、いい返事だ。じゃあ準備はいいかな？」

「いよいよだね。なんかちょっとワクワクしてきちゃった。」

なのはの周りに無数のシューターが現れ、無秩序な軌道を描き出す。

「レディ…スタート！」

それじゃあ、千歳くん。

そのお手並み拝見させてもらおうかな？

なのはの体が宙に浮き上がり、合図共にシューターが放たれた。

シューターが放たれたると同時に、ティアナが皆に指示を飛ばす。

「フォーメンションN・M・P！作戦は、『オムドリアフエア』
！フェイトさんが出てくる前に終わらせるわよ！」

「……了解！」

え？

え？え！？

えええー?!？

何？

一体、何が起こってるのー！？

ティアナの指示、私には意味がサッパリ分からないよ！

しかも、なんで皆、イイ笑顔で、『了解！』とか言ってるのー！？

思わぬ事態になのはのシューターのコントロールが乱れる。

その際にフォワードメンバーと鷲介はなのはの視界から消えていた。

【落ち着いて下さい、マスター。】

レイジングハートの声で我に返る。

そつだ、落ち着かなきゃ。取り乱しちゃ駄目だ。

「ありがとう、レイジングハート。」

【お気になさらず。】

レイジングハートのおかげで落ち着けたけど、皆の姿を見失っちゃった。

…きつと、これは千歳くんの作戦だ。

予想外の事態を演出して、私の対応を遅らせるのが目的だったってところかな。

「そういう戦術……。やるね、千歳くん。」

【面白い方ですね。】

「ねえ、レイジングハート、次はどんな手をつつてくるかな？」

【すみません。予想がつきません。】

「いいよ、謝らなくて。」

さっきのは奇襲だから成功したんだし、同じ手を使ってくるとは考え難い。

なら、サーチャーをばら蒔いて場所を特定するのが先決かな。

「よし！それじゃあ、レイジングハート、お願い……」

【！プロテクション。】

バリアが展開され魔力による衝撃が走る。

攻撃はバリアを破るには至らず、魔力は拡散していった。

「ありがとう、レイジングハート。助かったよ。」

【どういたしまして。】

「でも、どこから攻撃してきたんだろう？」

目視できる範囲にスフィアは確認できなかったはず。

でも、実際には攻撃を受けたし、レイジングハートが防いでくれなかったら直撃していたと思う。

【マスター。】

「レイジングハート、何か分かった？」

【分析した結果から推測したのですが、よろしいでしょうか？】

「うん、お願い。」

【先程の攻撃は、直進型の魔力スフィアによるものです。】

【マスターがそれを目視できなかったのは、魔力スフィアが無色透明の為だと推測します。】

「魔力が無色透明？なら、完全に見えないって事？」

【いえ、そうではありません。】

【確かに、スフィア事態は極めて目視しづらいです。】

【ですが、微弱な魔力光と魔力の流れで判別可能です。】

【ですから、周囲に完全に溶けこんでいるとはいえません。】

「千歳くん、だね。」

【間違いなく。】

無色の魔力光なんて聞いた事ない。

多分、レアスキルなんだろうけど、かなり厄介だな。

これは、時間を稼いで、フェイトちゃんを待った方が賢明かも。

【魔力反応！マスター、来ます！】

空にいるのはを見上げるような場所に、音もなく鷺介が現れた。

「っ、転送魔法！」

「ご明察です。さすが、なのはさんっすね。」

へらへら笑っている鷺介にデバイスを起動している様子はない。

それが、なのはを警戒させ、シューターを放つ判断を遅らせた。

その隙を鷺介は見逃さなかった。

「アレキサンダー、セット・アップ。」

「くっ、アクセル！」

【スナイプショット。】

シューターの着弾点に土煙が立ち登る。

煙が晴れたその場所に鷺介の姿は無い。

「かわされたっ！千歳くんは？」

【……オレンジ、か。】

「えっ？」

その『声』は、なのはのちょうど真下になる位置から聞こえてきた。

そこには、バーのマスターのようなバリアジャケットを纏った鷺介がいた。

【ほほう…オレンジとは…なるほど。】

【活発な高町くんに似合う、いいスキャンティーだ。】

オレンジ？

スキャンティー？

あっ！！！

「~~~~っ！千歳くん！！」

あわててなのは、スカートを押さえシューターを鷲介目がけ殺到させる。

【駄目です！マスター！！！！】

「どうしたのレイジングハート？って、えっ！？スバル！？」

そこには、カートリッジをロードし終わり、既に攻撃姿勢のスバルが。

どうして、目の前にいきなりスバルが！？

っっ！しまった、千歳くんの転送魔法だ！

「リボルバァァー…。」

「シューーート！！！！！！」

「くっ…。」

危ない。なんとか、防御が間に合ったみたい。

「っおおおおおー！！！！」

「んっ…っっ。」

万全の体勢ならともかく、このままじゃ押しきられる。

シューターの半分をスバルへ放って一旦体勢を立て直す！

【アクセルシューター。】

スバルに向けてシューターが放たれる。

しかし、それはオレンジの鋭い魔力弾に相殺されて、スバルまで届かない。

「クロスファイア！くっ…やるね、ティアナ。」

追い詰められたこのタイミング。

エリオとキャラロが仕掛けてくるならここしかない。

やっぱり！

少し離れたビルの上上に二人の姿がある。

エリオの体は、キャラロの支援魔法を受け、淡く光を放っている。

「ストラーダ！カートリッジロード！」

【エクスプロージョン！】

「気を付けてね、エリオくん。」

「大丈夫。任せて！」

エリオは真っ直ぐこっちを目がけて飛んでくるつもりだね。

ここが、正念場かな。

シールドでスバルを弾き飛ばして、エリオを迎え討つよ！

「レイジングハート！」

【オールライト！マスター！】

なのはのシールドが輝きを増し、スバルを押し返し、ついに、弾き飛ばした。

「きゃあー！」

弾き飛ばされたスバルを、鷲介が空中でキャッチしたのを見て、なのはは、追撃にシューターを放って二人を牽制する。

【スピーアアングリフ！】

来たね、エリオ。

これを迎え討って終わりにするよ。

なのはに向かってエリオが突進してくる。そして、突如、エリオの姿が視界から消える。

しかし、なのはに慌てた様子はなく、むしろ落ち着いている。

ここで、転送魔法がくるって思ってたよ。

そして、このタイミングなら死角を狙ってくる。

つまり、後ろ！！

【転送きます。】

「これで、おしまいだ…ね…？」

杖を向けた先には、白い鉢巻き。

その瞬間、なのはの脇を一陣の風が通り抜けた。

バリアジャケットの端がひらひらと空に舞い散った。

「ミッションコンプリート。所要時間は、二分三十六秒。マーベラス！素晴らしい！」

地面に降り立ち、スバルを降ろした鷲介が模擬戦の終了を高らかに宣言した。

第13話「戦術と変態的デバイス（マーベラス・タクティクス）」（後書き）

お疲れ様でした。

ご満足頂けましたでしょうか？

初のバトルシーンはなかなか難しかったので、出来が心配です。

これからも頑張りますので宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございました。

第14話「アレキサンダーってどんなデバイス？」（前書き）

米寿です。

皆様如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第14話「アレキサンダーってどんなデバイス？」

あの人の立てた作戦は、ハッキリいってセコかった。

スバルもエリオもキャラも終始微妙な顔だったし、乗り気じゃなかったのは間違いない。

けど、私たちはあの人の作戦を実行した。

作戦を一通り話終え、微妙な表情をした私たちに、ヘラヘラしながら言った言葉。

あの人を認めたくはない。

けど。

その言葉は、私の首を、そして、スバル・エリオ・キャラの首も縦に振らせるには充分だったから。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』『始まります。』

「皆、集合ー！」

「「「はい！」「」」

「了解つす。」

「とりあえず、皆、お疲れ様。」

「それから、ミッション・コンプリートだね。凄かったよ。」

なのはは、嬉しそうに笑顔で皆の顔を眺めて、そう口にした。

「あ、ありがとうございますっ！！やったー！やったね、ティア
！」

「スバルうるさい！…まあでも、やったわね。」

「やったね、キャロ！」

「うん！エリオくん！」

スバルの歓声を皮切りに、フォワード陣は各々にその喜びを実感し始めたようだった。

歓声から少し離れたところでは、フェイトと鷲介が向かいあっていた。

「すみませんね、フェイトさん。見せ場を無くしてしまつて。」

「それは、別にいいよ。皆が凄く成長してくれてるのが分かつたし。それに、千歳くんの魔法も見せてもらえたから。」

「そつすか。そんな風に言つて頂けるなんて光栄です。」

ただだかCランク程度の大した事ないワタクシの魔法が見たかつたなんて。

フェイトさんつたら、なーんてお優しい方なんでしょう。

「それで、フェイトさんの千歳鷺介はどうつすかね?」

「合格。」

「早つ!?!」

【早すぎる男は嫌われるぞ、気を付けなきゃ駄目じゃないか鷺介。】

…ああ、このお方の事を忘れていました。

いえ、出来れば忘れていたかつた、と訂正しておきましょう。

【しかし、女性が早すぎるのは一向にかまわない。テストロッサ君もそう思つたろう?】

「…えっと、その…あの…、じ、こんにちは？」

ああ…フェイトさんが変なリアクションに。

こうなる前にどうにかしなきゃいけなかったんですけどね。

恥ずかしながらワタクシも模擬戦の勝利に浮かれていたみたいで
す。

「マスター、一旦その辺で。皆さんにマスターの事を紹介しなきゃ
いけませんから。」

【む。そうか。確かに美しい女性を待たせてしまっっては、愛の狩
人失格になってしまふからな。】

おや、珍しいっすね。こんな簡単に引き下がるなんて。

【それにいくら俺が生粋のMでも、この場にいるのがジラされて
喜ぶ女性だけとは限らんしな。】

やっぱりかあ。

おじ様、姉さん達。

残念ながら、約束は守れそうにないみたいです。

「フェイトちゃん、どうしたの？顔が真っ赤だよ？」

なのはさん、いつの間にかこちらへ！

この流れは危険ですね。強いていうなら、展開が予想できます。

【おや、真つ赤ではなく、見事な黄昏色の高町くんではないか。】

「……レイジングハート、モードリリース……。」

【オールライト。】

「ひっ！」

優しかったあの日々はもう、戻らないんですかね？

だから、人はこう願うんでしょうね。

世界が平和でありますように。

あの後、なんとか謝り倒して事なきを得ました。

さすがにワタクシも命の危険を感じましたよ。

なのはさん目が、完全に本気でしたからね。

くわばら。くわばら。

「模擬戦中だったんで紹介できなかつたすけど、ちょうどいい機会なんで、皆さんにワタクシの相棒を紹介しますね。」

ワタクシも男です。此処まで来たら腹をくくるとしましょう。

「それじゃマスター、ヨロシクお願いします。」

【只今、紹介に預かった、鷺介のデバイス、アレキサンダーだ。】

……。

【この度、鷺介共々、この機動六課で世話になることになった。】

……。

【至らぬ点もあり、迷惑をかける事もあるかもしれんが、性一杯やっていくつもりだ。】

……ん？

なーんか違和感が。

【鷺介は俺の事を『マスター』と呼んでいる。】

気のせいっすかね。

【皆も、俺の事は『自家発電』と呼んでくれてかまわない。鷺介共々、宜しく頼む。】

完全にダウト!!

これは、大幅に宜しくできるレベルをフライングしています!

「『自家発電』で『マスター』って言うんだって、変わってるよね、ティア。」

「スバル、ちょっと黙ってて。……千歳さん。」

ひいひい。ティアナさんの目が、死んだ魚を見る様な目になっています。

【なんだ、その目は。誘ってるのか?】

やーめーてー!ティアナさんの目、今で光が消えちゃってますから!

「『自家発電』さんって呼んだらいけないんでしょうか、フェイトさん?」

「ダメ!絶対ダメだよ!!エリオ!」

「でも、フェイトさん、どうしてなんですか?」

「それは……ううっ……キャロには……まだ……とにかくダメ!お願い約束して!」

あちらでは、大人が子どもから受けたら答えづらい質問、ベストスリーが絶賛開催中です。

他にはどんな質問がランクインしてるのかって？

それは、子どもはどこからやってくるのかと青年向け雑誌がなんでも十八歳にならないと買ってはいけないかですかね。

って、アナタもこんな時にいちいちボケないで下さいよ！

「千歳くん。」

「は、はいいー！」

「さっき、私に言ってた事、嘘だったのかな。」

「そ、そ、そんな訳ないじゃないっすか…。」

なのはさんの背後が揺らめいて見えます。

目の錯覚だと思いたいんすけど…。

これは、もう謝っても許して頂けそうにないっすね。

【すまん、鷺介。放置プレイが長すぎて、荒らぶる男の魂が…。】

この状況は流石にマズイと思ったらしく、アレキサンダーは真面目とはいいい難いが謝罪の言葉を口にした。

そんな、アレキサンダーを見て、鷺介は笑いながら首を横に振った。

「らしくないっすね。今更じゃないっすか、マスター。」

【し、しかしだな、鷲介。この状況は…。】

「おやあ？オカシイっすね。この前、『俺はデバイスM奴隷界のカリスマだ。どんな、責めも受けきってみせる』って高らかに宣言してたじゃないっすか。」

【……………。】

アレキサンダーは挑発するような鷲介の言葉を黙って聞いていた。

【鷲介も言う様になったもんだな。確かに、俺らしくなかった様ダッチワイフ。】

アレキサンダーの語尾が力強く響き渡る。

そこには、先程の迷いや戸惑いは一切なく威風堂々たる存在が、そこにはある。

「当たり前じゃないっすか。マスターはド変態でDMでセクハラ大好きのどうしようもないデバイスですけど。」

想いは言葉にすれば、ハッキリ伝えられる。

その思いが、困難な状況を乗り越える為の力になる。

「ワタクシの最高のパートナーっすよ。」

【……鷲介……。】

「お話は終わった？」

「うそおーん。感動的なやり取りで誤魔化す作戦失敗!？」

成功すると思ってたのだったか？

可能性がゼロじゃないなら、賭ける主義なんすよってそんなこと言ってる場合じゃないんすけど！

「それじゃ、少し、頭、冷やそうか？」

「キュクルー。」

「あ、フリード。」

「へ？」

なのはが、レイジングハートの先を鷲介に向けると同時に、フリードが鷲介の頭の上に降り立った。

「キュクルー!!!」

「え？え？何？」

小さな羽を広げて、なのはを威嚇している。

それを見て、あわててキャラコが駆け寄って来た。

「すみません、なのはさん。フリード、突然どうしたの？」

「キユク！キユクルー！」

「…うん…うん。え？」

キャラコとフリードはお互い心を通わせたパートナー同士。ハッキリとは無いが、その意思を読み取る事はできる。

「ね、キャラコ？フリードがどうして、私を威嚇してるのか、分かった？」

「え、あ、はい。なんとなくなんですけど…。」

「それでいいよ。聞かせてもらってもいいかな？」

「…はい。フリードは、『傷付いてるから、これ以上は傷付けな
いで』って言ってるみたい…なんです。」

「…。」

「？」

それを聞いて、鷺介は驚いた顔をし、なのはは首を捻った。

鷺介はフツと前髪を息でかきわけた。

「見破られてしまいましたか。流石はフリードさん！マーベラス！」

「どういう事…あっ！もしかして…ロツテさんとアリアさんのダメージが、まだ…」

ま、そんな顔させちゃうと嫌だから黙ってたんすけど。

仕方がないですね。

「そこまで深刻なもんじゃないっすよ。一晩ゆるくりお休みを頂ければ、充分なくらいですから。」

「…分かった。でも、シャマルさんが戻ってきたらちゃんと診てもらっよ、いい？」

「了解致しました。」

「うん。必ずだからね。」

なのは心配そうな様子ではあったが、笑顔を見せた。

「それじゃ、フォワードの皆は訓練の続き。」

「あの、なのはさん？」

「スバル、どうしたの？」

「チイ兄は大丈夫なんですか？」

スバルは心配そうな顔で鷺介を見ている。

他のフォワードたちも大なり小なり同じことが聞きたいと顔に書いてある様だ。

そんな様子を見て、鷺介はヘラヘラした笑いを顔に浮かべ、言った。

「ワタクシなら心配ないっすよ。なので、訓練してどんどん強くなっちゃって下さい。」

「でも…。」

「ワタクシに、また、『届いてる事』を証明して下さいよ。」

「」「」「！」「」「」

その言葉を聞いて、皆の顔付きが変わる。

それを見てなのは満足そうに頷いた。

「…皆、まだいけるよね？」

「……はい！」「」「」

「うん、いい返事だ。それじゃ、いってみよう！」

「千歳くんは私が見てるから、頑張つてね、なのは。」

「うん。ありがとう、フェイトちゃん。」

なのはとフォワードたちは、再び演習場に向かって行った。

「皆、凄いやる気だね。」

「そうっすね。」

「千歳くんの言葉で火がついたみたいだった。一体、どんなお話をしたの？」

「恥ずかしいんで、内緒って事にさせて頂きます。」

「…どうしても？」

「うっ！フェイトさんがとっても悲しそうな顔してらっしゃいます。」

そんな顔されたら、ある程度、折れない訳にはまいりません。

「で、では、機会があれば……。」

「ふふっ。冗談だよ。今は、さっきのマスターさんへの仕返しかな。」

「それなら仕方ないっすね。甘んじてお受け致します。」

フェイトさん、意外といつては失礼ですが、オチャメな一面も持ちなんですネ。素晴らしい！

「それからもう一つ聞きたいんだけど、いいかな？」

「はい。なんでしょう？」

「フリードが頭の上ののったままなんだけど……。」

「あつ。」

あまりに静かだったんで、頭の上の命の恩人の事をすっかり、忘れていました。

静かなはずです。なんたって寝てますからね、命の恩人。

ま、救って頂たんで野暮は言いませんけどね。

「格好よく皆を送りだせたと思ったのに、なーんか最後が締まな
いんすね、ワタクシ。」

「そうだね、締まらなかったね。」

【今、フェイトくんが男の肛門活躍筋の話をしていなかったか、
鷲介？】

ワタクシ疲れたので、リアクションはアナタにお任せします。

今日も、世界が平和でありますように。

第14話「アレキサンダーってどんなデバイス？」（後書き）

お疲れ様でした。

ご満足頂けましたでしょうか？

これからも頑張りますので宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第15話「夜の自己紹介（サタデーナイト・フィーバー）（前書き）

米寿です。

皆様、如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂けたら幸いです。

第15話「夜の自己紹介（サタデーナイト・フィーバー）」

なのはとフォワードの皆、それから千歳くんの模擬戦が終わった。

私に出番が無くて、少し残念だったけど、見たいものは見れたし、良かったと思う。

そして、ちょっと？個人的な新しい仲間も増えて、慌ただしくも、あっという間に時間が過ぎていく。

そして、夜には千歳くんの紹介があるんだけど……。正直、ちょっと心配。

どうか、何もトラブルが起きませんように。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』 始まります。

隊舎へと向かう影が五つ。

フォワードメンバーと鷲介の五人。

なのはとフェイトは二人で少し話があるので、先に戻っていてとの事なので、今はこの五人で隊舎へ戻る所だ。

訓練が終了した頃には、すっかり暗くなっていた。

「皆さん、訓練お疲れ様でした。」

「ありがとう、チイ兄もお疲れ様。」

「どういたしまして。ってスバルさん、そもそもワタクシ、皆さんの訓練を見てただけなんで、疲れてないっすよ。」

「ううん。いいんだよ、お疲れ様で。」

何やらスバルさんは自己発信 自己完結してしまってますね。

そうはいつても、『お疲れ様』って言って頂けるほど、何かしたって訳でもないんすよね。

「でも、チイ兄さん、体の具合があんまり良くないって、なのはさんが言っていましたし…。」

「それでも、ずっとわたしたちの訓練を見ててくれました。それに、フリードもチイ兄さんから離れようとしなかったから…。」

「エリオさん…キャロさん…。」

なんでしょう。胸に温かいものが込み上げて、視界が滲んで…。

ああ…これが『思いやり』なんですね。

「ね、チイ兄言ったでしょ？やっぱりお疲れ様でいいんだよ。」

いやー、歳を取ると涙腺が緩んでいけませんね。

仮にも年上なんだから、ワタクシもしっかりしなきゃいけませんね。

あまり、心配をかけすぎるのも悪いんで、ちゃっちゃと話題を変えちゃいましょう。

「それにしてもハードな訓練すね。いつもあんな感じなんすか？」

「そうですね。朝から夜まで、毎日あんな感じですよ。ところで、今日の訓練をずっと見ていたなら、聞きたい事があるんです。」

「なんすか、ティアナさん？」

「千歳さんから見て、私たちってどうですか？」

「はあ…。」

どうと言われましても、皆さん、とっても優秀っすよね。

なーんて答えをティアナさんは期待してないようです。

そんな顔してますからね。

「模擬戦の時も言ったと思うんで繰り返しになっちゃくんすけど、それでも良ければ。」

「はい。でも、訓練を実際に見た上で改めて聞いてみたかったです。お願いします。」

ワタクシとしてもお話するのはやぶさかではないんすけど…。

なーんか、引っ掛かるんすよね。

ま、考えても、仕方がないという事にしておきましょうか。

「ようがす。それでは、お話させて頂きます。」

ティアナさんがこれで納得して頂けるかは、別の問題すけど。

「皆さん、その若さであれだけ動けるんだから、間違いなく優秀すよ。」

これはハッキリしてる事ですけど、隊長の皆様は力が飛び抜けちゃってますからね。

忘れがちになりやすいんと思うんで念の為に。

「……………」

やっぱり納得できないすよね、分かっちゃいましたけど。

なら。

「ちゃん」と根拠がありますよ。それに、ワタクシも一緒に証明したじゃないっすか？」

「…なのはさんとの模擬戦ですか？」

「そつすよ。」

実際に協力して、見事に勝った訳ですから、かなり説得力があると思うんすよね。

「あれで、ちゃんと『届いてる』って事が分かったんじゃないっすか？」

「それは…確かに、そう…なんですけど…。」

あれ？

これでもダメなんすか？おかしいすね、これならイケルと思ったんすけど。

「あれは、千歳さんの作戦が上手くいっただけで、私は何も…。」

ああ、なるほど、なるほど。そついう事すか。

「ティアナさん。」

「何ですか？」

「確認したいんですけど、ティアナさんが聞きたかったのは『私たちがどうか』って事ですよね？」

「？はい。そうですね…。それが今、何か関係あるんですか？」

自分では気付けない事ってありますもんね。

でもそれを教えてあげるのが大人の役目っすから。

どうっすか？今の発言なかなか渋くないっすか？

シーン。はい、リアクション無しっつと。

シリアスも鉄壁の防御で防ぎきりますか。

マーベラス！流石ですね！カッコいいですね！素晴らしいですね！

おおっつと。

カッコいい大人像をこれ以上崩してもしょうがないんで、シリアスモードに戻らないと。

「モチロンすよ。ワタクシがお話してるのは、『ティアナさん個人』の事じゃなく、『ティアナさんを含めた皆さん』の事ですから。」

「！」

「スバルさんのクロスレンジ、ティアナさんの鋭い射撃と幻術、エリオさんのスピード、キャロさんの支援魔法。」

皆さん本当に素晴らしい力をお持ちです。

「このどれか一つでも欠けていたら、きつとなのはさんに勝てなかった訳です。」

それで、最初の結論に戻ってくる訳ですよ。

「ですから、皆さんは優秀です、とワタクシはお話したんすよ。納得して頂けました？」

それを聞いたティアナは何かを考えているようだったが、頭を軽く振って、鷺介に答えを返した。

「……はい。ありがとうございます。体の具合もあるのに変な事聞いてすみませんでした。」

「いえいえ、全然かまわないっすよ。それに、心配してくれたんすか？嬉しいっすね。」

「まあ…、それは…。気にはなっていましたから。」

おやおや。ティアナさん、照れちゃって。可愛い所もあるじゃないっすか。

「もう！ティアは素直じゃないな。訓練中も千歳さんの話ばかり……」

「スウ〜バア〜ルウ〜!!!」

「うわあ！ティア、ごめん！ごめんって!!」

「スバル！逃げるんじゃないっ！待ちなさいっ!」

身の危険を感じて、逃げ出したスバルを、鬼の様な形相でティアナが追い掛ける。

エリオとキャロは、割とお馴染の事なのか、あはは…と苦笑いを漏らしてその光景を眺めている。

鷲介の頭の上でフリードが体を起こした。どうやら、さっきのやり取りで目が覚めてしまった様だ。

「おや？命の恩人、もとい、恩竜がお目覚めみたいっすね。」

「チイ兄さん、長い間すみません。フリード、おいで。」

「キユクウ…。」

名残惜しそうに一鳴きして、鷲介の頭からフリードが飛び立つ。

そして鷲介の頭にあった、重みと温もりが無くなる。

「フリード、本当、チイ兄さんに懐いてますね。」

「そうなんすよ、エリオさん。初対面で、特に好かれる事もしてないはずなんすけどねえ。」

「エリオくんの事も好きみたいなんだけど、フリード、チイ兄さんの事、すごく気に入っているみたい。」

「キユクル〜」

クルクルとご機嫌な様子でフリードは三人の周りを飛び回っている。

「細かい事は抜きにして、ワタクシも仲良くなれて嬉しい限りですよ。」

「そう言ってもらえて、わたしも嬉しいです。」

「ごっちゃって素直にお礼ができるなんて、キャラさんは本当にいい子ですね。」

「ティアナさんももう少し、そうなってくればいいんすけどね…。」

「チイ兄さん？何か言いました？」

「いえ、なんでもないっすよ、エリオさん。」

声に出してしまったみたいっすね。これは、気を付けないといけません。

「そんな事より、お腹がすきましたね。隊舎に戻って早くディナーを楽しみましょう。」

「そうですね。ボクもお腹がすきました。それに、チイ兄さんの紹介もあるから楽しみです。ね、キャロ？」

「うん！楽しみだね、エリオくん。」

そういえば、八神隊長がそんな事をおしゃっていた様な気が致します。

すっかり忘れていましたけどね。

でも、お二人を含め、皆様にここまで期待されて応えない様では、ワタクシ、千歳鷺介の名が泣きます。

「そつすね。では、行きましようか。あまり皆様を待たせるわけにはいきませんからね。」

「はい！」「」

細々とした心配はありますが、とりあえずは保留にしておきます。

ワタクシにとっては先の事より、今の事が大切っすからね。

それでは、千歳鷺介が、皆様に笑顔をお届けに参ります！

なんちゃって。

失礼、間違えました。

なーんてね。と訂正させていただきます。

おつかしいなー、なんか変な電波でも受信しましたかね。

「そういえば。」

「何っすか、エリオさん？」

「チイ兄さんのデバイス…、ええっと…マスターさんがさっきから、全然お話してないですね。」

「ああ、その事でしたら、今、マスターを待機状態にしてあるからっすよ。」

いい方なんすけど、あのお方がいると話がややこしくなりますからね。

それに、清らかな少年少女にどんな影響があるか分かったものじやありません。

「待機状態ってなんですか？」

キャロさんの質問も「もっともです。」

普通はデバイスにそんなモードはいりませんしね。

良くも悪くも特別なんすよね、マスターは。

「簡単に言えば、ワタクシの承認無しに起動出来ない状態、という感じですかね。」

「なるほど。そうなんですか。」

「それだと、今は呼んでも返事はしないってことですか？」

「ええ、エリオさんの仰る通りです。」

「マスターさんとお話したかったんですけど、それなら仕方ないですね。」

【呼んだ？】

「呼んでないっすよ。」

【あ、そう。】

「……………」

「デイナーの時の自己紹介が済んだら、マスターの待機状態も解除しますから、それまでは我慢して下さい。」

そんな話をしてるうちに着いたみたいですね。

「さて。それじゃ、入りましようかって、どうしたんすか？お二人ともポカーンとして？」

「あ、いえ…。」

「えっと、その…。」

エリオさんにキャロさんの様子が少しおかしいですね。

大した事じゃないでしょうし、お腹も空いたんでスルーしちゃいましょう。

「ほらほら、もうワタクシお腹ペコペコっすよ。細かい事は置いて、行きましょ、行きましょ。」

急かす鷺介に押される形になってエリオとキャロは食堂に入っく。

その小さな胸に大きな疑問を抱えたまま。

【今、誰かオツパイの話をしなかったか？】

「気のせいっすよ。」

【あ、そっ。】

「「……………」」

どうやら、世界は二人の知らない不思議な事に満ち溢れている様だ。

食堂には、なのはとフェイトを除く皆が既に揃っていた。

駆けてくる音が聞こえ、二人の姿が食堂の入り口に覗く。

「ごめん、はやてちゃん。遅くなっちゃて。」

「ごめんね、はやて。」

「そんなん、ええから、ええから。皆、お腹空いてるやろし、私も、もうお腹ペコペコや。」

はやては舌をだして笑った。

はやてに笑い返して二人は席に着いた。

そして二人が席に着いた所で、はやてが立ち上がり、皆を見た。

「今日、皆さんにこの時間に集まってもらったのは、六課に新しい仲間が増えることになったからです。これから、紹介しますので、皆さん温かく迎えてあげてください。」

「只今、ご紹介に預かりました、千歳鷺介です。皆様のお役に立てるよう、精一杯頑張りますので、宜しくお願い致します。」

「だ、そうや。皆もヨロシクしてあげてな。ちなみに、お昼頃の警戒体制のアラートは千歳くんのせいやから、気にせんといてな。」

「ちょっとお、八神隊長！せつかくの『好青年風挨拶』が台無しじゃないっすか！」

「遠慮はナシって言うたのは、千歳くんやで。」

「いや、まあ、そうなんすけど……。」

「見ての通り面白い人やから、緊張せんで、どんどん話かけたってな。ほんなら、皆も、お腹も空いてるやろし、ご飯にしょか。」

ガツクリと肩を落とす鷺介こと等お構い無しに、はやては挨拶を閉めくくった。

流石、八神隊長っすね。

おかげで皆さんの空気もかなり砕けた感じになりましたよ。

「チイ兄。ちょっといい？」

「はいはい、只今参りますから、お待ちを。」

スバルさんがお呼びですか。何の用ですかね。

「シャーリーにマスターの事を話したら、是非見たいから呼んで欲しい！って言われたんだ。」

「初めてまして、シャリオ・フィニーノ一等陸士です。六課ではメカニックデザイナー兼通信主任をやっています。よろしくお願ひします。」

「これは、どうもご丁寧に。千歳鷲介です。」

「それで、千歳さん！」

「は、はい。なんでしょう？フィニーノさん。」

なんか、ものすごい身を乗り出して迫ってきてるんすけが…。

「スバルとティアナに聞いたんですけど、とても個性的なデバイスをお持ちだとか！」

これは、確実にワタクシにとって望まない事態が引き起こされる前兆っすね。

しかし、いつまでもやられっぱなしという訳には参りません。

ここは、魔法の言葉を使って回避させて頂きましょう。

「ええ、まあ。機会が…」

「見せてもらってもいいですか!?!?」

機会があればを遮られましたよ!

これが、噂のA・M・Fアンチ・マキリング・フィールドってやつすか!

「では、どうぞ。」

鷲介は着ていた服に差していた、ペンをシャーリーに手渡した。

「変わった形状のデバイスですね?これは、ペンですか?」

「そうっす。」

「私たちも、直接見たのは初めてだよね、ティア?」

「そうね。セット・アップした時も離れてたから、デバイス自体は見てなかったし。」

簡単にヤツを渡して良かったのかって?

「ご安心下さい。まだ、最後の砦、待機状態があります。

諦めるのには、まだ早いってことですよ。

「二人も初めて見たんだ。じゃあスバル、マスターさんだっけ？
一体何が個性的なの？」

「とにかくお喋りなデバイスなんだ！そういえばチイ兄、さっきからマスターが静かだけど、なんで？」

なるほど。

これが世に言う、『綺麗な薔薇には棘があるのさ』ってやつすね。

アナタも美しい女性と知り合ったら、気を付けて下さい。

浮かれてばかりいると、とんでもない悲劇に見舞われますよ。

「それは、待機状態にしてあるからなんすよ。それじゃ、解除しちゃいますね。」

諦めたのかつて？

違いますよ。

一緒に働くんですから、遅かれ早かれ、マスターには慣れて頂かなければどうしようもないっすからね。

それに、エリオさんとキャロさんとの約束を破る訳にはいかないじゃないっすか。

「アレキサンダー、モード・リリース。」

【呼んだ？】

「呼びましたよ。マスターとお話したいって方がいらっしやるので。」

【そうか。なら、早速メガネ属性+ブルマの…】

「お昼の事、忘れてないっすよね？」

【ごめんなさい。】

命は尊いものです、最低限、釘は差しておかないといけません。

「とまあ、少々変わってますけど、いい方なんで仲良くしてあげてください。」

「スゴイですね！ほとんど人と変わらない反応をするデバイスなんて、初めて見ました！」

喜んで頂けたようで何よりっす。

「そうだ、エリオさん、キャラさん！」

「「はい！」」

「マスターの待機状態を解除したんで、存分にお話しちゃって下さい。」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「チイ兄さん、ありがとうございます。」

約束も果たせましたし、これで一段落っすかね。

「それじゃ、お腹が空いたんで、隊長陣に挨拶がてら、ディナーを頂いてきます。マスター、くれぐれもヨロシクお願いしますよ。」

【分かっているさ、鷺介。俺も大人だ。】

「そっすか。それじゃ、皆さんもマスターを宜しくお願いします。」

「

そう言っつて、鷺介は席を立ち、隊長陣の所へと歩いて言った。

去り際に、アレキサンダーから鷺介に念話が届く。

（【気を付けるよ、鷺介。】）

（「大丈夫っすよ。」）

さて、あまり主賓をお待たせするのも、悪いですから行きましょ
うか。

いろいろ、聞きたい事や言いたい事がおありのようですね。

鷲介の瞳、そこには夕食を取っているはやてとその守護騎士達の姿が映っていた。

第15話「夜の自己紹介（サタデーナイト・フィーバー）（後書き）」

お疲れ様でした。

ご満足頂けたましたでしょうか？

これからも頑張りますので、宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第16話「えっちなのはいけないとおもいます?」(前書き)

お知らせがあります。

携帯の調子が悪く、機種変更を考えています。

その為、次回より更新が遅れるかもしれません。

大変申し訳ないのですが、ご理解頂けると幸いです。

第16話「えっちなのはいけないとおもいます?」

過去は過去。現在は現在。

我ら守護騎士が、その言葉を使う事が、果たして許されるのだろうか?

ただ、例え、どんな侮蔑や悪意を向けられようとも、許しと温かい居場所を与えてくれた主だけはこの手で守ると誓った。

故に私は自らの罪を柵に上げてでも、試し、見極める。

主に害を為そうとした者が、何の為に、この男を此処へ寄越してきたのかを。

魔法少女りりりかるなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』 始まります。

職場に上司がいらっしやるなら、ご挨拶に行かないといけません。

そのご挨拶で、これからの上司との関係が決まってくると思うん

すよ。

なので、これは極めて重要なイベント、という事になります。

ただでさえ、自己紹介の時に、誠実なイメージを八神隊長に粉碎・玉砕・大喝采されていますからね。

部隊のトップであり、美しい八神隊長が、ワタクシを一番バカキャラ扱いしてますし。

あれ？

これって、もはや挽回不可能なのでは？

というかワタクシ、バカキャラだったの？

「ご、御注文の、お、オムドリア、でですっ！」

「おっと、すみません。ありがとうございます。」

料理が来てたなんて、全然気が付きませんでした。

自分がバカキャラだという驚愕の事実には、思考が停止していた様です。

「もしかして、結構前に出来上がってました？」

だとしたら、悪い事をしてしまいました。

呼ぶのを躊躇った上に、呼んだら呼んだで、カミカミになってし

まっただみたいですから。

証拠に、彼女はうつ向いていて、恥ずかしさに顔が真っ赤になっ
てますし。

「い…え…そのう…出来た…ばかり…で…すから…。」

「そ、そうすつか。」

なんかスゴイ声が消え入りそうなんすけど、大丈夫すつかね。

え？

カミカミなのを見られた人がいつまでも目の前にいたら恥ずかし
いに決まってるって？

あ…、正論すね。

これは、完全にワタクシの彼女に対する配慮が足りませんでした。

「ほーんとおいしそうすね！お腹が空いたんで、早速頂いてき
ます！」

「…!!…はい…、ありが…とうござ…いました…。」

褒めて誤魔化すのも失敗すか。

これは、なーんか埋め合わせを考えなきゃいけませんかね。

ん？

明日、食堂の手伝いでもしたらどうかって？

グッド・アイディア！

料理でしたら、ワタクシもお役に立てるでしょうし、そうしまし
ようか。

さて、出鼻をくじかれてしまいました。ディナーもきた事だす
し、行きましょう。

ワタクシは覚悟出来てますか、アナタはどうなんすか？

大丈夫だつて？

いやでも、表情がなーんか堅いんすよね。

ようがす。ここは、小粋な千歳ジョークで、アナタの緊張をほぐ
して差し上げましょう！

昼間の作戦名で嘘だったものが、夜に本当に出てくれなんて…こ
れが、本当の『嘘から出た真』ってやつですね！

.....。

お後が、よろしいようで。

「八神隊長、相席してもよろしいですか？」

「ええよ。それより千歳くん？」

「な、なんすか？」

このお顔は、確実に良からぬ事を企んでる顔ですね。

「副隊長達への挨拶もまだやのに、いきなり、食堂の娘をナンパはないんじゃないかな？」

八神隊長、メツチャ、イイ笑顔してますね。

絶妙のタイミングで、的確に地雷へとワタクシをナビゲートしてくれます。

「いいじゃないっすか、それに、もう少しで落とせそう……」

「千歳くん、そういうのは余所でやってくれへんかな。」

あれっ!？

「なんや、私の部隊をバカにされてるみたいで、正直、不愉快やわ。」

八神隊長の絶体零度の視線が突き刺さります。

「すみません、正直浮わ付いていた事は認めます。」

ようがす。見せてみるってことっすね。

ワタクシの譲れない覚悟ってやつをつ……！！

「でも……。」

鷲介は一旦そこで言葉を区切って、下を向いた。

そして、再度顔を上げた時の顔は、泣きそうで、でも、精一杯の笑顔を浮かべて言う。

「あなたの役に立ちたいって、その想いは決して、嘘なんかじゃないから。」

二人の視線が交錯する。

流れる時間は遅く、そして重さを伴うものの様に感じられた。

「「ぶっ……」」

「あっはっはっは！やるなあ、千歳くん。その顔とあの台詞は反則やわ。」

「ふっ！ははっ！八神隊長こそ、素晴らしい切り返しっすよ。振り切られるかと思っちゃんいました。」

ガシツ！と握手して互いの健闘を称えあう。

その姿は、ずっと昔から連れ添った悪友の様だった。

「はやてちゃん！お話があるんだけど、いいかなー？」

「ええよー！」

なのはさんとフェイトさんが八神隊長をお呼びみたいっすね。

「なのはちゃんが呼んでるから行くな。千歳くん、今度はちゃん副隊長達に挨拶するんやで？」

「了解っす。精神誠意、ご挨拶させて頂きますので、安心して下さい。」

「そうか。…ほんなら、皆も仲良くな。」

守護騎士達ははやてに頷き返して、その姿を見送った。

残されたのは守護騎士達と鷲介、それから沈黙だった。

シーン。場を和ませようとした漫才も効果無しっつと。

「「「「……。「「「」

守護騎士の方々も『シーン。』ですし、ここは一肌脱ぐしかなさそうっすね。

「朝でも、昼でも、コンバンワ！職場の皆様の潤滑油ごと、千歳又ル又ル鷺介と申します。」

「ここで終りじゃございませぬ。一気に畳みかけますよ！」

「料理、洗濯、掃除に買い出し何でもこなしますので宜しくお願い致します。」

「主婦かよっー!!」

「いいツッコミです。流石は鉄槌の騎士っすね。」

「すまねえ、シグナム…つい…。」

「気にするな。私も気負っていたのだが、今のやり取りで馬鹿馬鹿しいと思ってしまうたからな。」

「はあ…と息を吐いてシグナムは脱力した様に肩を落とした。」

「改めてになるが、ライティング分隊副隊長のシグナムだ、宜しく頼む。」

「スターズ分隊副隊長、ヴィータだ、よろしくな。」

「六課、主任医務官のシャマルです、よろしくね。」

「……ザフィーラだ。」

やっと、ちゃんとご挨拶する事が、出来ました。

やっぱり、誠意を込めた行いは相手に届くって事なんすね。

良かった。良かった。

はい？

スベってたらどうしてたのかって？

やだなあ、そんなの決まってるじゃないっすか。

ワタクシがいたたまれない気持になるだけっすよ。

いやいや、そんな恐い顔しないで下さいよ……だから、さっき言っ
たじゃないですか。

『良かった。良かった。』ってね。

「千歳、聞いておきたい事があるのだが、かまわんか？」

「モチロンす、シグナムさん。なーんでも聞いて頂いて、結構っすよ。」

ま、検討はついていますけどね。

「何故、あの人は六課にお前を寄越したのだ？」

「そうっすねえ…。それは、知らないと答えるしかありませんね。」

「……知らないって………どういう事だよ？」

怖っ！ヴィータさん、マジで怖いんすけど。

これは、誤解は早々解いておかないといけませんね。

「六課にお世話になる事になったのは、ワタクシがおじ様をお願いしたからなんすよ。」

「そうなのか？」

「ええ、ヴィータさん。ですので、おじ様がワタクシを寄越したんじゃないんで、さっきの質問には、知らないとお答えした、という訳です。」

「じゃあ、なんで千歳くんは六課に来たかったのかしら？」

鋭いですね、シャマルさん。

「分かりました。皆さんを納得させる為にも、お話させて頂きま
す。」

ついに、ワタクシの目的が白日のもとに晒される事になりますね。

「……これから、お話する事は、他言無用でお願いします。特に、
八神隊長には……。」

「……どういう事だ？」

シグナムから剣呑な空気が発せられる。

他の守護騎士達も鷺介を警戒し、厳しい視線を向けた。

鷺介は、フツと息で前髪をかきあげた。

「結婚相手選びの為です。」

「……は？」

「ワタクシも、もういい歳ですから、いい相手と巡り逢いたいな
と思っ……て……います……。」

「……。」

「そんな時、おじ様から娘の様に可愛がっている方が、人材集め

をしているという話が出たんです。」

「「「……………」」」」

「聞けば、見た目良し・器量良しのお方揃いの部隊という事で、是非ワタクシの推薦をと頼んだんです。」

「「「……………」」」」

「説得という名の聖戦を一週間寝ずに行い、晴れて六課へ出向となったという訳です。」

「…この先を聞きたくはないのだが、聞かない訳にもいかないから…、何故、主はやてには秘密なのだ？」

「イジられるに決まってるからじゃないっすか！こう見えて、ワタクシ真剣なんすよ！」

「…分かった、これ以上は頭が痛くなりそうだから遠慮しておこう…。」

「ああ…そうだな…。」

「……………ええ、そうね……………」

「納得して頂けた様で何よりです。」

シグナムを始めとした守護騎士達は呆れた様な、哀れむ様な視線を鷲介に送った。

当の本人は、その視線に全く気が付いていない様だったが。

【なんだ、なんだ。盛り上がっているじゃないか、鷺介？】

「ああ、マスター向こうはいいんすか？」

【うむ。副隊長達にも挨拶したいと言ったら、名残惜しい様だったが、快く送り出してくれたぞ。】

向こうも耐えきれなくなったんすね、分かりますよ、そのお気持は痛い程に。

その証拠にあちらのテーブルで数名、頭を抱えていらっしやいますしね。

「ちょうどいいので皆さんに紹介します。ワタクシのデバイス、アレキサンダーです。」

【……………。】

「どうしたんすか、マスター？急に黙りこんじゃって。」

【………… バカなっ！フェイトちゃんと互角！…いや、それ以上だとっ！】

室温は高くななく快適なのに、何故でしょう？嫌な汗が止まりません。

「一体なんの話なのだ、千歳？」

「な、なんでもありませんよっ！全然、これっぽっちも、全く、シグナムさんには関係ございません。」

【何を言っているんだ、鷲介。この話はビツク・パイズ・シグナムくん無くして、進められんだろうが！】

「ほう……。」

きゃー！シグナムさんの目がガチです！

「なあ、千歳。」

「ひい！はいっ！」

「我らは同じ部隊で働く仲間だが、会ったばかりで、お互いの事をまだよく知らん。」

「お、おっしゃる、通りです……けど。それが……？」

「そこでだ、互いを良く知るために心ゆくまで語り合おうではないか、……模擬戦でな。」

「……アタシも付き合っぜ、シグナム。」

「……久々に私も頑張っちゃおうかしら？」

【フツ……お前たちに、俺を満足させられるか、お手並み拝見といこうじゃないか！】

「上等じゃねえかああー！！！！」

【オッパアアアーイ！！！！】

二つの叫びが木霊する中で、鷺介はある事を考え、ある結論に達した。

男は黙って、背中語るものなのだ。

そして、この喧騒の中にあっても、成り行きを静かに見守るザフィーラさんを心の底からカツコイイと思ったのだ。

第16話「えっちなのはいけないとおもいます?」(後書き)

お疲れ様でした。

ご満足頂けたでしょうか?

頑張りますので、これからも、宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第17話「ファースト・アライト×under the innocent

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

お金がなくて、機種変できず、更新も遅れてしまい、申し訳ございません。

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

騒がしいけど、楽しい仲間が増え、私の、私たちの部隊は新たに走り出した。

新人の皆も、なのはちゃんに毎日毎日鍛えられて、確実に力をつけてきていると思う。

まだ、本格的な出動はないけど、いつ、どんな状況で出動になっても、今の皆ならきつと大丈夫なはずや。

魔法少女リリカルなのはStrikerSx俺たちに翼はない、
『りりつば』 始まります。

六課フォワード陣の朝は早い。

日が昇って少ししたら、すぐに早朝の訓練が始まるといった感じだ。それに合わせる形で、訓練が終わったフォワード陣に食事を用意する食堂の朝も当然早い。そんな朝も早い時間の食堂からは、朝の静けさとは対照的に、ノリノリな歌声が響いている。

「Ah ガイアからの sympathyいゝ Ah 移りゆく星へ」

「罪を追いかけたゝ この燃えゆく ホ・ン・ノ・ウ」

「逃げる君を背にゝ 溶けはじめるシ・ン・ジ・ツウ」

「罰を背に浴びて 古傷が痛むからゝ」

「心 傷深く 自縄自縛うカ・ク・ジ・ツ」

「つとお！いつの間にいらしてたんすか？」

「どうです？ワタクシも中々のもんでしょう？」

「折角なんで、感想の一つでも頂きたいんですけど、いいすかね？」

「え？」

「気が進まないって？」

「まあまあ、そう堅いこと仰らずに。たまにはいいじゃないっすか」。

「おっ？」

「やってくれるんすか？流石っすね、ありがとございます。」

それじゃ、ヨロシクお願いします。

音程も取れてるし、ビブラートもかかっているので中々、ただ、若干しゃくれる感じがあるのでそこはマイナスかなって？

……………。

あ、いえ。決して今のはあなたの『リアクション無し』のお株を奪う為の反応じゃないっすよ。

さらに言わせて頂けば、カラオケの採点みたいな、専門家ぶった評価の仕方に若干引いた、なーんて事も、モチロンございませんでご安心を。

……………。

……………ないっすわ〜。

今、何か言わなかったかって？

いえ、何も。気のせいじゃないんすか？

そんな事より、ワタクシが聞きたいのは歌の出来じゃなく、朝食の出来の事っすよ。

フォワードの皆さんは、まさに育ち盛り。

さらに、朝の訓練を終えてくるので栄養バランスの取れたメニューを用意してあげたいんすよ。

スープは豆類をふんだんに使ったミネステローネをチョイス。

前菜は海草を主体としたサラダにサーモンのマリネを和えたものを用意。

主菜は、ソーセージにスクランブルエッグっすね。

主食には、ナッツブレッドにクロワッサン、ガーリックトーストを予定しております。

軽すぎず、重すぎずでちょうどいいかと思うんですけど、どうすかね？

え？

折角だから、今、来たスタッフに聞いてみたらどうかって？

あっ！昨日の子じゃないっすか。

確かにそうすね。

今回の準備は、昨日の埋め合わせの為にやった事っすから、あの子に聞くのが筋ちゃー筋っすね。

「どーも、どーも厨房お借りしてます。あ、モチロン許可は頂いてますから、ご安心下さい。」

「ほういっ！」

「このお嬢さん朝から元気ですね。挨拶はちょっと変ですけど。」

「今朝の朝食を用意させて頂いたんですけど、どうですかね？」

「え、え、えつととと…あの…その…あうう…。」

あれー？この慌て様はオカシイっすね。

もしかして、ワタクシ何かマズイことしちゃったんですかね？

「すみません。もしかしてお邪魔でした？」

「いえ…あのう…そうじゃない…です…。ただ、今日の当番はわたしだったから…。その…ごめんなさい。」

「えっ！？そうなんすか!？」

おつかしいなー。昨日、スタッフさんにお伺いした時はこちらのお嬢さんじゃない方の筈だったんですけど…。

来てみたらお仕事が終わってたなんて、ワタクシなら、きゃっほーうー！って感じなんですけど。

「こちらのお嬢さんは、そのことに罪悪感を感じていらっしやる様です。」

うつむいて、心無しか小さくなってしまってる様に見えます。

「お仕事を取ってしまったてすみませんでした。」

「……………」
「こちらこそ、すいま…せん…でした。」

「厚かましいついでに、お願いがあるんですけど、いいですか？」

「……なん…でしょうか？」

「実は、今朝仕込んだスープなんですけど、もうひとつ何か足りない感じなんです。なので、プロの方に味をみて頂きたいんです。」

「はい…。…いいです…けど…。」

鷺介は子皿にスープをよそって、女性へと手渡した。女性はおずおずとした動作でそれを受取り、口をつけた。

「あ…おいしい…。」

「本当ですか！いやー、プロの方にそう言って頂けると嬉しいな」。

「でも…確かに、何かひとつ…足りない…気がする…。」

「ですよー。その何か分からないんですよ。そのせいで、朝食の準備完了！っとはいえないんですよ。」

食べて頂くからには最高のものをご用意してあげたいですね。

女性は再度スープを口にして目を瞑り、少し思案した。口でころがし、飲み込んだ所で、ゆっくりと閉じていた目を開けた。

「……クレイジーソルト…かな。」

「クレイジーソルトっていうと、いくつかの乾燥ハーブと塩を混ぜたものですね?」

「はい、そうです。豆類・トマトがベースなのでまろやかさ、酸味は足りていると思うので、塩気と香り付けでさらに味が締まると思います。って、あ…。」

そこで、彼女は自分が先程と違い、突然、饒舌になっていた事に気が付いて、また、身を小さくした。

「う…ごめんなさい。突然、でも、わたし…お料理が好きで…それで…」

「マーベラス!それっすよ!いやー、かなりスッキリしました。ありがとうございます!ようやくこれで完成っすね!」

鷺介はご機嫌な様子でスープに件の塩を入れ、ゆっくりかきまわしていく。

彼女はそんな鷺介を呆気に取られた顔で見ている。

「自分の好きな事って誰かと共有したくなりませんか?少なくともワタクシはそーなんすけど。」

スープをかき混ぜながら、背を向けた状態で鷺介は言葉を続ける。

「だから、いいじゃないっすか、喋りすぎちゃっても。だって、好きなんすから。」

「!…ありがとうございます。」

「いやいや、お礼を言うのはこっちのほうなんですよ。おかげで無事に朝食の準備が完了しました。」

「?…わたし、クレイジーソルトの事だけで…全然用意してないですけど…。」

「さっき言ったじゃないっすか?」スープに何かが足りないせいで、朝食の準備完了とは言えない』って。あなたのおかげで、無事朝食を皆さんにお出し出来る訳っすから。」

そう言っつて、鷺介は首だけで振り替えて女性に悪戯っぽい笑顔を向けた。

「優しいんですね…千歳さんは。」

ここまでの固かった表情が解け、女性は初めて柔らかい笑顔を顔に浮かべた。

そうそう。やっぱり女性は笑顔が一番っすよ。そのためなら、ワタクシ千歳鷺介、いかなる労力も惜しみません。

「ラブコメしてるとこ、大変恐縮なんやけど、ウチらに朝食もらえるかなあ？千・歳・く・ん」

「「え…？」」

きゃー！八神隊長とフェイトさんじゃないっすか！

「あの、八神隊長…。つかぬことをお伺いいたしますが、いつからご覧に？」

「うーんと、『自分の好きな事って誰かと共有したくなりませんか？』って所やね。」

「それって殆ど最初っからっすよねっ！？」

おお、神よ。あなたは何故この様な羞恥プレイをワタクシに課したのですか！？

「あはは……。なんかごめんね、千歳くん。でも、出るに出不れなくて、つい。」

痛い！フェイトさんの苦笑いで誤魔化した感がさらに痛い！

「す、すみませんでした！し、失礼しますっ！…！」

女性は恥ずかしさに耐えきれなくなり、顔を真っ赤にしながらそれだけ言って走り去っていった。

そのスピードは、某RPGの銀色の魔物を彷彿とさせるものだった。

「あかなあ、千歳くん。女性に恥かかせるんは、最低やで。」

「誰のせいっすか、誰の。」

そんな事言いながら、スゴクいい笑顔じゃないっすか、八神隊長。

それにしても、あまりに見事な撤退でしたので、彼女の名前を、お聞きするのを忘れていました。

次にお会いした時に伺うとしましょう、機会があれば。

「それで、千歳くん、どこまでいったん？言ってみ、私に言ってみ？」

「近所のおばちゃんかっ！」

さつきは酷い目に遭いました。疲れがどっと押し寄せてきましたよ。

八神隊長のイジリは、半端な覚悟じゃ乗りきれないってのが、よーやく分かりました。

朝食をお出した時に、八神隊長が、『今日は用があるからあかんけど、これは、料理対決で決着つけなあかな』とか仰ってましたけど。

ご満足頂けたって事でよしとしておきましょう。

フェイトさんもおいしいって言ってくれましたし、男冥利につきますね。

今更なんすけど、ワタクシってどこの配置になるんでしょう？

八神隊長からその辺を聞くのを忘れてました。というより、絡むとお互い走り過ぎてしまふんですよ。

これは、気を付けないといけませんね。

そんな取り留めの無い事を考えながら、鷲介は一旦、寮へ戻ろうとロビーの前を通りかかった。

そこに、エリオとフリードが手持ちぶたさを全開にして階段に腰かけていた。

「これはこれは、エリオさんとフリードさんじゃないですか。」

「あつ！チイ兄さん。おはようございます！」

「キユクル〜！」

「はい、おはようございますと。お二方とも朝からの訓練、苦勞様です。」

「ありがとうございます。あつ！そういうえば今日も僕たちのはさんから一本取れたんです！」

「流石つすねー。良かったじゃないですか。ところで、お二方はこんな所でなーにやってたんすか？」

「えっと、なのはさんから訓練も一段落したので、実戦用の新デバイスに切り替えるって言われたんです。」

「ほうほう。新デバイスですか。」

「はい。それで、シャワーを使ってからロビーに改めて集合する事になったんですけど…」

【何い！フォワードの子たちが、俺の為に体を清めているだと。】

「なるほど、そういうことっすか。エリオさんは女性のシャワーの時間が長いので、待ち惚けしていたと。」

「チイ兄さんの言う通りです。なんで、僕と違って時間がかかる

んでしょうか？」

これは中々、答え難い質問すね。どうしたもんでしょうかね。

【エリオ、その質問には俺が答えよう。】

「マスターさんがですか？」

【ああ、任せておけ。こう見えて常に思春期の少年の様な妄想をしているからな。】

なーんか妙な事になってますが、危なくなったら止めれば大丈夫でしょう。

マスターも子ども相手ならある程度は自重してくれると思いますしね。

「ありがとうございます、マスターさん。」

【それでは、エリオ、早速シャワールームを覗きにいくとしようか。】

前言撤回す。

「マスター、なーんでそんな結論になるんすか。」

【まあ、待て鷺介。話は最後まで聞いてもバチはあたらんだらう。

果てしなく嫌な予感しかشませんが、聞くだけ聞いてみる事にし

ましよう。

「ようがす。マスターがそこまで言うなら、お聞きいたしましよう。」

「僕からもお願いします。」

【よし！任せておけ。つまり、俺が言いたいののは、百聞は一見にしかずという事だ。】

「ひゃくぶんはいっけんにしかず？どついう意味なんですか？」

【自分の分からない事は、百回聞いて理解するよりも、一度実際に見て理解する方が早い。だいたいはそんな意味だ。】

「あ、なるほど。つまり、時間がなんでかかるのかを聞くんじやなくて、それを見にいけば、分かるって事なんですね。」

【おい、鷺介。】

「なんすか？」

【エリオがいきなり肛門の話をしだしたんだが俺はどうすればいい？】

「きつとそれは、勘違いっすよ、マスター。」

言葉って難しいっすね。相手にちゃんと届かない時もありますから。

【…そうか、気のせいか。まあ、そういう事だから、一度覗いてみる必要があるんだ、分かるな、エリオ。】

「でも、そんな事したら怒られるんじゃないですか？」

【それがいいんじゃないか！『覗くなんて、最低っ！』とか『キヤー！変態！』と罵られるというご褒美を貰えて、知りたい事も知る事ができるんだぞ！何を恐れているんだ！】

「分かりました。今度機会があれば、お願いします、マスターさん。」

【うむ。よろしい。ん？今度？今じゃなくて？】

「はい。もうみんな来ましたから。」

影を揺らめかせ立つ、高潔な乙女達がそこにはいた。

「…千歳さん。」

「なんでございましょう、ティアナさん？」

「少しマスターを『狩りたい』んですけどいいですか？」

「かまいませんよ。『お貸し』いたします。」

「チイ兄、私もちよつとマスターを『狩りたい』んだけどいいかな？」

「スバルさんもですか？かまいませんよ、『お貸し』いたします。」

「エリオ、キャロ。少しスバルと一緒にマスターに話があるから、待っていてくれる？」

「はい、分かりました。」

「大丈夫です。」

【レデイのご指名とあらば仕方がない。すまん、鷺介。ちよつと『行って』くる。】

「いえいえ、かまいませんよ。それじゃ、マスター『逝って』らっしゃい。」

鷺介はアレキサンダーをティアナに手渡した。その顔はこれまで見たことのない、とても晴れやかな笑顔だった。

「じゃあ、ワタクシ達はお二人が戻ってくるまでお話でもしてましようか？」

「はい……」

「キユク〜！」

やっぱり言葉って難しいっすね。文字にしてみないと正しく意味

が伝わらなかったりします。

いやー、本当、いい勉強になりましたよ。

【いやっ……！……！……！】

ね？言った通りでしょう？

ボロボロのマスターを返却された鷲介は寮へ戻っている最中だった。

昨日着いたばかりの上に、夜にはゴタゴタがあって荷物の整理がで
きなかつたので、それをしようと思ったからだ。

「しかし、マスターもホント懲りないっすよね。」

【男は、いつになっても永遠の思春期だからな。】

「いや、そのセリフ別にカッコよくもなんともないっすから。」

【ふん。男に死んだ魚のような目で見られても気持ちよくもなん
ともないわ。】

そんなバカな会話をしていた矢先にアラートが館内になり響いた。

「警戒体勢つか。何があつたんすかね？」

【！覗きの先を越されたのかもしれん。こうしちゃいられん！行くぞ、鷲介！！】

そんなわけないじゃないっすか。しかし、一級警戒体勢すから、それなりになんかが起こつてそうですね。

「千歳くん！ここにいたんか！」

「どうしたんです、八神隊長？」

目の前にモニターが現れ、そこには、はやての姿が映しだされている。

幾分急いでいる様子だ。

「いきなりで悪いんやけど出動や。フォワードの皆と合流してもらえるか。」

「それはかまいませんけど。何があつたんです？」

「申し訳ないんやけど説明してる時間が無いから、フォワードと

合流して高町隊長に子細聞いてもらえるか。」

「理解しました、八神隊長。」

「ごめんな。宜しく頼むわ。後、勝手なお願いなんやけど皆も守ってあげてな。」

そう言っただけで通信が途絶えた。

「…ようやく出番だね。」

【…そうだな。】

「八神隊長に、お願いされちゃった以上は頑張らないといけませんね。」

ワタクシ、美人の期待に応える男で有名なシュウちゃんですからね。

【お前がそう言うなら、俺はかまわんが。だがな…。】

「ま、そっちは追々でいいですよ。まずは、皆さんをお守りする事を考えないといけませんよ。」

【…余計な事を言っただけで済まなかった。】

「いいんですよ。それじゃ、機動六課初出動、ぬるっと思えばマスター？」

【おい、鷺介。誰にもものを向かっていつてるんだそれは？】

軽口をたたきあいながら二人は、なのはとフォワード陣との集合場所に転移魔法を使って、転移した。

鷺介が部屋の荷物を整理する日は当分先になりそうだ。

第17話「ファースト・アラート×under the innocent

お疲れ様でした。

ご満足頂けたでしょうか？

頑張りますので、これからも宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

お久しぶりです。

米寿です。

皆さ如何お過ごしでしょうか？

大分ご無沙汰してしまい申し訳ないです。

詳しくは活動報告にてお伝えしますので、興味あるかたはご覧になって頂ければと思います。

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

わたしはどこに行ってもひとりぼっちだった。

どこに行ってもわたしの居場所はなかった。

わたしのいい場所はどこにも無いし、いちゃいけない場所が、ただ目の前にあるだけ。

『竜召喚は危険な力』そう言われて、やっぱりその通りで、自分ではどうにもできなくて。

わたしの力はみんなに迷惑をかけるだけのもの、怖いものだってことだけが、わたしの中に残るだけ。

けど、本当は違った。

本当は、ただ自分の力を認めるのが怖かっただけなんだ。

でも、きっと大丈夫。

それを教えてくれた大切な人たちと、わたしが居る場所がここにはあるから。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』『始まります。』

「任務の内容は、ロストロギア、レリックの回収。ガジエットの殲滅。それと列車の停止ってところすか。」

「うん、そうだね。」

「です。」

八神隊長から状況確認はなのはさんからする様に言われていたので、ワタクシ、今ヘリの中にて状況の確認中でございます。

「任務の内容は分かりました。それで現場はどんな感じなんすかね？」

「列車はコントロールをガジエットに奪われてる状態で制御は不能。幸いにしてレリックのあるフロアにガジエットは到達してないけど…。」

「けど、このままだとそれも時間の問題です。」

中々、厳しいっすね。三つの違った任務を同時に全て遂行しなければいけない訳ですから。

ロストロギアなんて危なかつしい代物の確保、そして列車は移動中、中では大量のガジェットによる待ち伏せのオマケつきです。

「プランはどんなものをご用意してるんすか？」

「スターズ・ライトニングでフォワードを分けて列車の両側から突入、目標のレリックへ。私とラインでそれをフォローする形かな。」

初出動のフォワードの皆さんに経験を積ませるのと同時に、任務を達成するという感じですかね。」

ワタクシのポジションが未だに不明な事を除けば、実に安定感のあるプランだと思います。」

「フェイト隊長がここに向かっているから、それまでの現場上空の警戒を千歳くんにもらう事になるかな。」

「了解致しました、なのはさん。」

「いやー、楽そうな役回りで安心しました。ガジェットと正面きつてやりあうなんでゾツとしますからね。」

「それと、千歳くんには転送魔法での現場全体のフォローをお願い。私とラインが駆けつけられないピンチがあったら、皆を守って欲しいんだ。」

不測の事態を想定した上でのワタクシの配置という訳っすか。流石は、なのはさん抜かりないすね。」

「ようがす。改めて了解致しました。まあ、皆さんなら、自分のピンチは自分で跳ね返せると思うんで、ワタクシの出番はなさそう

すけどね。」

「うん、そうだね。私も千歳くんの言う通りだと思う。皆、いけるよね?」

「「「はい!」「」」

「は、はい!」

【おい鷲介、高町くんが『イク』っていうとなんか興奮してこないか?】

……………。

うーん。

へりに乗った時から気になってたんすけど、キャロさんの様子がおかしいんすよね。

最初は初出勤に緊張してるだけかと思っただんですけど、なーんか違う感じなんすよ。

「よし。それじゃあ皆いってみよう…」

「なのはさん!」

なのはの言葉を遮り、ロングアーチから通信が入る。

「現場周辺に航空型ガゼットの反応多数です！現地観測隊を捕
捉！準備が整い次第フェイト隊長が迎撃に向ってまいります！」

なーんか雲行きが怪しくなってきましたよ。

「なのはさん、どうしますですか？」

リンの言葉になのは少し考えを巡らせた。そして、操縦している
ヴァイスへと声をかけた。

「ヴァイスくん、私も出るよ。フェイト隊長・千歳くんの三人で
空を抑える。」

【出る？出るだどっ！イクの後にその発言は、とても気になって
しまうじゃないか。そう思わんか、鷲介？】

……………。

ワタクシもっすか！？

「了解です、なのはさん。千歳さんもヨロシク頼みますよー！」
できれば慎んで辞退申し上げたい状況なんすけど。

【メインハッチオープン。】

へりのハッチが開き、空へと入り口が繋がった。

そしてそれは、紛れもない戦場への入り口だ。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、皆も頑張つて、ズバツとやつつけちゃおう!」

「」「はい!」「」

「はい!」

いやいやいや。ちょっと出てくるって。

そんな近所にお買い物に行つてきますみたいなノリで言われて、ワタクシ、ビックリなんすけど。

フォワードの皆さんも表情が強張ってますし。

「フォワードの皆の指揮は任せるね、リイン。」

「はいです。任せて下さいなのはさん!」

いきなり想定外の事態す、しかも、制空権の確保ってことはガジエットと正面对決じゃないすか…。

「キャラ、大丈夫。そんなに緊張しなくても。」

【その通りだ、ルシエくん。初めては誰しも緊張するものだが、しかし、安心したまえ。愛の狩人ことマスターが優しく導いてあげ

るからな。】

.....。

なのはは、ゆっくりとキャラロに歩みより、両手を優しくその頬に添えた。

「離れてても通信で繋がってる。」

【離れていても繋がるだっ……!!高町くんは既にキャラロくんに大人のアレを仕込んでいたと言うのかっ!!?】

.....。

キャラロの目をなのは優しく見詰める。

「独りじゃないからピンチの時は助け合えるし、キャラロの魔法は皆を守ってあげられる、優しくして強い力なんだから、ね?。」

なのは一つ一つ優しく諭し、安心させる様にキャラロに語りかける。

絶妙のタイミングすね。なのはさんはフォワードの皆さんの事をホントよく見てらっしゃいますね。

そつと離れていくのはから、キャラの視線が外れる。そして、その視線が鷲介へと向けられる。

キャラさんが待ってるって？

分かってますよ。任せて下さい。

なんてたって今、ワタクシはキャラさんの『お兄ちゃん』ですから。

【義妹プレイか？俺も混ぜて、混ぜて】

.....。

「キャラさん、なんにも心配いりませんよ。」

【いたいけな少女をその手にかけるペド野郎の見本のようなセリフだな。】

.....。

なら、ワタクシはキャラさんの不安を少しでも取り除く力にならなければなりませんよね。

「なのはさんのおしっやる通りキャラさんは独りじゃありません。それに……、」

鷲介は一旦言葉を区切りキャラ口から視線を外し、触れられる距離に

歩み寄った。
そして、キヤロに抱えられるフリードを撫でながら、キヤロに視線を合わせた。

「なのはさんからワタクシを守って下さった、『優しい』フリードさんがいつでも傍にいるじゃないですか。」

【ば、馬鹿な……。フリードも交えて……。と……。】

「……」

キヤロは驚いた様子に目を見開いた。

何か言いたげな視線が鷺介を捉えたが、それに鷺介が気付く前になのはが動き出した。

「千歳くん、そろそろいくよ。遅れないで着いてきてね。」

【これが噂の『一緒にい……。一緒にがいいのお……。』というやつか。まさか、実際聞く日が来るとは思わなかったが。】

……………。

なのはさんはいつもかわいい笑顔で、ワタクシにとんでもない事をおしやいます。

「了解致しました。どこまでもお供させて頂きます。」

【しかし、凄まじい放置プレイだ。興奮するじゃないか。】

そして、二人と変態デバイスは、開いたハッチから空に身を投げ出した。

鷲介最初の任務は、波乱の幕開けで始まった。

お疲れ様でした。

ご満足頂けたでしょうか？

また、頑張っていきますのでよろしくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

お久しぶりです。

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

ワタクシ、千歳鷺介は只今、へりから紐無しバンジーの最中です。

ワタクシの上官、なのはさんは『壮大な変身』の後、バリアジャケットを纏ってガジェットの群れへ颯爽と飛び込んで行かれました。

なのはさんからは付いて来るように言われているんですが、ワタクシ絶賛自由落下中にして、このままいけば地面と劇的な再開の後に他界する、そんな感じですよ。

「マスター、いい加減機嫌直して頂けないすかね？」

【ツーン。ワタシ、ソナナ、ヤスイオンナ、ジャンナイノヨ。】

さっきまでのやり取りが、『放置プレイ』ではなく、単なる無視だったのが大分ご立腹の様で、起動を渋ってるんすよね。

というより、あの場面でのマスターの絡みは無視一択以外ありえない、そうワタクシは思うんですが…。

【愛の無い放置プレイはただのシカトと変わらん。流れた時間はもう戻らないんだぞっ！】

「そつすね…。そつすね…。その通りすよね…。」
無視はダメで、放置プレイならいって…。

流石はマスター、イジケ方が予想の遥かに斜め上をいってらっしゃいます。

】俺は、お前には期待していたのだが……。正直失望したよ鷺介。
マスターのヘソの曲がりっぷりは、かなりのもんですね。

まあ、いつまでもこのままにしておく訳にも参りませんので、張り切って交渉すると致しましょう。

「それについては、ワタクシ大変反省してますんで、できれば勘弁して頂きたいんすよね。」

先ずは、下手にでます。ま、交渉の基本ですね。

「話は変わるんですけど、ワタクシからちょーと聞いておきたい事があるんすよ。…なのはさんの事で。」

【高町くんの事だと？一体、俺に何を聞くつもりだ、鷺介？】

「いえ、なんてことはございません。先程の『壮大な変身』についてなんすけど。」

【……あ、ああ、あれか！そ、そ、それがどうかしたか？】

「紳士のマスターにこんな事を聞くのは大変心苦しいですし、あり得ない事だとは思うんすけど、まさか、映像に記録したりしてませんよね？」

【そ、そ、そ、そんなわけないでせう！いくら、鷺介でも言うって良いことと、悪いことがあるのでゲスよ！】

「そつすよね。ワタクシの思い違いっすよね。人の魔力を勝手に引き出して、複数のサーチャーを配置して、死角が無いように万全の布陣を敷いてたなんてあり得ないっすよね。」

【…何が望みだ。お前の望むものを俺が、全身全霊で叶えてみせようっ！…！さあ！さあ！さあ！遠慮はいらんど、鷲介！】

「流石はマスター。男前な発言にワタクシ、体の芯から痺れましたよ！それじゃ、なのはさんもボチボチやり始めたみたいなんですさと合流しちゃいましょうか。」

【うむ。セットアップ！！】

アレキサンダーの声と共に鷲介の体がバーテンダーの様なバリアジヤケットに包まれる。

「それじゃ遅れた分、巻きでいきましょう、巻きで。」

【高町くんの魔力を補足した。転送いつでもいけるぞ、鷲介。】

「さつすがマスター、仕事が早い！それじゃ、行きましょうか！」

おっと、忘れるところでした。なのはさんの所に行く前にマスターに言っておかなければならないことがあったんです。

「なのはさんの『壮大な変身』についてなんすけど、マスターのメモリーから削除し終わりましたんで報告しておきますね。」

なのはの展開したシューターが近くのカジエツトを射ぬき、無力化していく。

射ぬかれたカジエツトは、爆散して塵と化していく。

周辺のカジエツトをある程度撃墜したなのはは、こちらに向かっているフェイトに連絡を入れようとしていた。

「すみません、なのはさん遅くなりました。」

「あ、千歳くん。セツトアップせずに落下していったからどうしたのかと思ってたんだけど、無事みたいだね。」

えっ？

なのさん、分かったのにスルーしてたんすか？

手厳しいっすね。

「ええ、なんとか。状況はって、なんかあらかた片付いちゃってる感じじゃないすか？」

ワタクシとマスターが不毛な戦いをしてる間にはほぼ制圧すか…。

エース・オブ・エースは伊達じゃないっすね。ワタクシの出る幕が全くありません。マーベラス！

「後は最後の詰めだね。フェイト隊長の到着前には制圧できそう

な感じかな。ごめんね千歳くん、見せ場取っちゃって。」

なのは悪戯っぽい笑顔で鷲介に軽口をたたいた。

「いえいえ、お気になさらず。。それに、ワタクシの見せ場は戦闘以外の所に全力で発揮されますんで、これからっすよ。」

鷲介もなのはの軽口に応える様に不敵な笑みを浮かべて返した。

「よし！このままフェイト隊長のお仕事をなくしちゃおっか！」

「そっすね。フェイトさんにはゆっくり休んでもらっちゃいませよ！」

残存してるガジェットも少ないですし、なのはさんが一緒にいるのでこれくらいなら楽にいけそっすね。

うーん。よきかな、よきかな。

【鷲介、高町くん。どうやらそう簡単にはいかない様だぞ。団体さんのご登場だ。】

遠目の空に小さな黒い点が無数に浮かび上がってくる。

黒い点は空の半分程の割合で徐々にこちらへ迫ってきている。

いやいやいやいや。あれはいくらなんでも多すぎでしょう！

六課のエース二人＋ で抑える物量を越えていますって！

驚介が驚いている間にフェイトからなのはへ念話が届く。

（「なのは！もうすぐ着きそうなんだけど、ガジェットがそつちのポイントに大量に向かつてる見えてる!？」）

（「うん、フェイトちゃん。すごい数だね、今まで見たこともないくらいだよ。」）

（「なんでこんなに…。なのはは独り？」）

（「ううん。千歳くんが一緒にいるよ。」）

（「…そっか。千歳くん？」）

（「はい、感度良好。聞こえていますよ、フェイトさん。」）

（「この空域を抑えるには、あれをなんとかしないといけない。そして、今、それができるのは、私たち三人しかいないんだ。」）

なるほど。増援は見込めないって事っすね。

（「うん。そうだね、フェイトちゃん。それに私たちの後ろには

フォワードの子たちもいる。一機たりとも通す訳にはいかない。」

そうなんすよね。フォワードの皆さんが安全に、かつ確実に任務を遂行する為には、制空権をチャーソンと確保しなくちゃいけません。

（「フェイトちゃん、千歳くん。厳しい状況だけど、いけるよね？」）

（「うん、もちろん。」）

普段のワタクシなら即答で、『無理でございます。』とお答えするところなんですけど…。

（「ようがす。どこまでできるか分かりませんが、頑張らせて頂きますよ。」）

『仲間』の為ですからね、引くという選択肢は今のワタクシにはいじりません。

（「そろそろ接敵する。私の方を制圧次第そっちに合流するから！」）

それでフェイトからの念話が終わる。

「それじゃ、私たちも頑張ろうか、レイジングハート。」

【イエス、マスター。】

なのはレイジングハートをガジェットの群れる空へ向けた。

レイジングハートを人払いし足元に術式が展開される。巨大な魔力がなのはを中心に練られていく。

「この距離なら、先制攻撃でっ！」

数多の敵をその魔法で打ち破ってきた、なのはの代名詞ともいえる砲撃魔法『デイバインバスター』。

いくつもの想いを貫き通してきた力が、今、ガジェットへと向けられる。

「デイバイイン…。」

「なのはさーん！ストップ、ストップ！ちょっと待って下さい！」

なのはがデイバインバスターを放つその直前に鷲介がなのはを呼び止めた。

「どうしたの千歳くん？」

「先制攻撃、実に素晴らしい考えだと思います。でも、どうせな

ら、もっと派手にやちやいません？」【そうだぞ、派手にいこうか高町くん。それに鷺介は初仕事だから、少しはコイツにも華を持たせてやってくれ。】

「ははは…。それは、別にいいんだけど。千歳くん、マスターさん。派手について、どういうこと？」

「それは、やってからの楽しみみて事でもいいすかね？それじゃ！マスターいきましようか！」

【これをやるのは久々だ！抜かるなよ、鷺介！】

分かってますよ。それじゃ、ワタクシの必殺技、ご披露すると致しましょうか！

「アレキサンダー、モードリリース。シフトファースト。」

【シフトファースト、了解。フレンドコネクトシステム起動！】

鷺介独特の透明な魔力が回りなのはとレイジングハートを包みこんだ。

「なんだろう、あたっかい…。そして、優しい感じがする…。それに、力が…。」

鷺介の魔力に包まれたのは、思わずそう漏らした。

【マスター、アレキサンダーからフレンドコネクトシステムの承認許可がきています。】

「よく分からないけど承認でいいんだよね、千歳くん？」

「よろしくお願いします、なのはさん！」

「レイジングハート！」

【承認します。コネクト。】

承認と同時になのはを包んでいた鷲介の魔力が薄い桃色へと、その色を変えた。

【きたきたきた！きたぞ鷲介！】

「マーベラス！やっぱりなのはさんはすごい魔力をお持ちっすね！それでは、仕上げと参りましょう。アレキサンダー、カートリッジロード！」

【溢れ出す！！進むぞー！！！】

アレキサンダーを二度ノックすると、ペン先から勢いよく煙が吹き出した。

「なのはさんは、ディバインバスターの術式をそのまま維持お願

いします。」

「分かったよ！」

それでは、なのはさんと初めての共同作業といきましょう！

【It's show time!】

アレキサンダーの声と共に鷺介となのはの周りに、無数の魔力で作られた、人ぐらいの大きさのクラッカーが現れる。

「準備完了つす、なのはさん。それじゃ、合わせてぶっばなしちやいましょう！」

「よく分かんないけどいちゃうよ！」

レイジングハートに力を込め、力を解放する。

「「ダイバイイン…。」」

そして、その詠唱に鷺介の声が重なる。

「「バスタアアー……！」」

【「デイバインバスターパーティー!!!」】

アレキサンダーとレイジングハートの声も重なり合う。

同時に、レイジングハートとクラッカーから無数のバスターがガジエットへ向けて放たれる。

桃色の線が空を駆け抜け、その残滓が残る中、空は巨大な爆発に包み込まれた。

「これが…千歳くんの本当の力…。」

呆然としたなのはに、鷲介は首を振り、いつものヘラヘラした笑いを浮かべていた。

「違いますよ、なのはさん。ワタクシの力じゃなくて、ワタクシとなのはさんとマスターとレイジングハートさん、『皆の力』すよ。」

【流石は、鷲介。自分の立場がよく分かっているな。】

爆発が収まり鷲介となのはの視界の先にある空は、青空と読んで差し支えない平和な空に変わっていた。

お疲れ様でした。

ご満足いただけましたでしょうか？

頑張りますのでこれからも宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第20話「星と雷×under the innocent sky & It.

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

今回の話で、『物語』のキーパーソンは全て出揃いました。

前半の節目になります、楽しんで頂ければ幸いです。

なのはがガジェットと交戦を開始した頃、フォワード陣とリインは目的の列車に無事降下を終えていた。

わたしは不安だった。

なのはさんもフェイトさんもいない。

そしてこれは、訓練じゃなくて実戦。

…でも、そのどっちも、わたしが感じている不安とは本当は関係ない事。

出勤前になのはさんとチイ兄さんが励ましてくれたけど、やっぱりわたしは、わたしの力が怖いままだった。

「大丈夫？」

「うん。大丈夫。」

同じ隊のエリオくんも心配してくれている。

まだ、そんなに長い間一緒にいたわけじゃないけど、エリオくんはとても優しい子だった。

そんなエリオくんだから、フリードもすぐに仲良くなれたんだと思う。

「スバルさんとティアさんがガジェットと交戦し始めたみたいだ。僕たちも気を付けていこう。」

そう言つて、エリオくんはさつきヘリコプターから降りた時の様に、私に手を差し出してくれる。

「ありがとう、エリオくん。」

エリオくんの手を握つて、前へと歩きだす。

不安が少し薄らぐのが分かる。

でも、どうしても考えてしまう。

わたしが力を使つたら、エリオくんは、わたしが怖くなって、わたしから離れていってしまうんじゃないか？

今みたいにわたしの手を握つてくれなくなるんじゃないかって。

「っ！エリオくん！」

「…うん。新型…ガジェット！やあああー！！」

キャラの不安がそれを呼び込んだのか、二人の前には巨大な球体が二本の腕を伸ばし、悠然と立ちはだかつていた。

エリオがガジェットに向かって飛び出していくのを、キャラは自分の心を整理できないまま、見送る事しかできなかった。

「この車両もクリア。」

新しく相棒になったこの子、『クロスミラージュ』はかなり優秀だ。

今まで苦勞していた、多重弾殻射撃も難なくこなせるし、敵の補足から照準もかなり早く行える。

でも、こんなに優秀なデバイスに頼りすぎたら、私自信が強くなれるのが掴めなくなってしまうそうだけど。

「スバルも順調みたいね。ま、もとからあんまり、心配してないけど。」

スバルが聞いたたら、きつと頬を膨らませて『ティア、ひどいよ〜。』とか言ってきそつだ。

…よし。

今みたいに他愛の無い事を考えられるくらい、私は落ち着いてい

る。

そして、決して緊張感が無いわけじゃない。

いい状態だと自分でも思う。

初めての任務だからきつと、もっと緊張するかと思っていたんだけど。

「行くわよ、クロスミラージユ。」

【はい、行きましょう。】

答えを返してくれるデバイスがいるのは何か頼もしい気がする。

もう少し行った所がライン曹長が指定した、スバルとの合流地点だ。

アイツより先に着いて、到着を待っているとしましょうか。

ティアナは合流地点へ相棒より早く到着すべく、オレンジ色のツインテールをなびかせて駆け出した。

白い鉢巻きが宙を舞い、ガジェットに拳が突き刺さる。

【ウイングロード。】

足元に青い道が現れ、次のガジェットへスバルは一直線に突き進む。

「はぁぁー！！！！」

宙で体を捻り回し蹴りを放ち、その反動を利用して隣にいたガジェットの拳で撃ち抜いた。

「よしっ！いいサポート。流石、マツハキャリバー！」

【ありがとうございます。】

受け答えはまだまだ堅いけど、私の『相棒』はとってもいい子だ。

これから時間をかけて、チイ兄とマスターみたいな感じになっ
ていけばいいなと思う。

ティアにそう話したら『万が一でもあんな性格にならないとは思
うけど、止めときなさい。』って言われた。

チイ兄も苦笑いしてたし、なんでだろ？

私は羨ましかつただけだな。

なんか、二人は信頼し合える、本当の『相棒』って感じがしてき。

「ねえ、マツハキャリバー。」

【なんでしょうか？】

「さつきも言ったけど、私とおまえ、これから長い間一緒に走り続けて行くと思う。」

これは、宣誓だ。

私とマツハキャリバーが本当の意味で『相棒』と呼べる関係になっ
ていく為の。

「だから、お互いがどんな時も諦めないで走り続けられるように、
支え合っていこう！」

【はい。私もそうしたいです。いつまでもあなたの傍で走れる様
に。】

「うん！」

私の想いはちゃんと伝えられたみたいだ。

後は、無事にこの任務を成功させて、なのはさんとの訓練でどん
どん強くなっ
ていっ
ただけだ！

決意を新たに走り出したスバルの視界の先には、『相棒』の姿があった。

「遅かったじゃない。」

余裕たっぷりの表情で悪態をつくのは、私の大切なコンビだ。

「そんなことないよ。ティアが早すぎるだけだよ、流石だね。」

「さ、合流したなら、さっさと行くわよ。エリオやキャロにみっともない所、見せらんないからね。」

誉めれるのが恥ずかしくて、照れたように捲し立てるティアはかわいいな。

「うん！」

「何笑ってんのよ！置いてくわよ！」

「ああ！待ってよ、ティア〜！」

最初は緊張したけど初めての任務は順調だ。

コンビと相棒。

この二人がいれば、私はどこまでだって走っていける。

ティアナの背中を追いかけながら、スバルは心の底からそう思った。

二人は車両の外へ出て次のポイントを目指す。

外へでた瞬間、巨大な魔力反応を感じて、空を見上げた。

空には無数の桃色の線が描かれ、その先には無数の黒い点が空を覆っていた。

「なに…？あれ…？」

ティアナがそう呟いた刹那、二つが接触。

それと同時におびただしい規模の爆発と激しい車両への揺れが起こり、空は光に包まれた。

エリオは焦っていた。

ガジェットのアーマーが堅いのに加えて高濃度のAMFで魔力攻撃がま
まならない。

キャロとフリードも援護してくれてはいるが、AMFのせいで効果は薄い。

「エリオくんっ!」

「だい、じょうぶっ!」

キャロが心配そうに声をかけてくるのに、僕はそう答えた。

出勤の時からずっと、キャロは不安そうにしていた。

初めてだから、凄く緊張していたんだと思う。

それに、キャロはとても優しい子だから戦う事が、苦手なのかもしれない。

僕も緊張してたし不安だったけど、そんなキャロを見て守ってあげなきゃって思ったんだ!

「っ!ふっ!!!」

掛け声と同時に、ストラダーで鏢迫り合っていた、ガジェットの腕を弾いて、バックステップで距離を取る。

「はあ…。はあ…。」

「これなら！…！」

背後から渾身の一撃を放とうとしていたその時、巨大な爆発で車内が揺れた。

「ぐっ！！！！」

バランスを崩されたのを立て直そうとした隙に、エリオの体はガジェットットの腕に吹き飛ばされた。

壁に叩きつけられ、為すすべもなくズルズルと崩れ落ちる。

「エリオくんっ！！」

聞こえてくるキャロの声が遠い気がする。

立たなきや。

分かっているのに体に全然力が入らない。

視界が黒に染まって、今、何かに持ち上げられている事しか分からない。

エリオを抱えたガジェットの腕が振るわれ、エリオの体は外へと投げ出された。

落ちていく感覚、そして、そこで僕の意識は途絶えた。

意識が途絶える瞬間、キャロの悲痛な叫び声が聞こえた気がした。

「エリオクーン!!!!!!!!!!」

わたしは無我夢中で空へ飛び出していた。

…守りたい。

『何かを相手に伝えたいなら言葉とか行動しなきゃ、相手には伝わらないもんなすよ。』

チイ兄さんが教えてくれた。

『届けたい想いとその相手がいるなら、迷っちゃいけません。』

迷ってちゃ駄目なんだ。

『それじゃ、それをちゃちゃーっと証明しちゃうとしましょうか』

「！」

そつだ、証明するんだ。

落ちるエリオの手を追い付いたキャロの手が掴む。

わたしは…わたしに優しくしてくれる人と、大切な場所を守りたい…！！

【ドライブイグニッション！】

キャロとエリオを淡いピンクの魔力が包みこみ、二人の落下が止まる。

「…フリード。」

フリードにも伝えなくちゃいけない。

怖がって、不自由な思いをさせてても、ずっと、ずっと寄り添ってくれた大切な存在。

「私と一緒に乗り越えてくれる？」

「キョクルー…！！」

「…ありがとう。いくよ、フリード！竜魂召喚…！！」

眩い閃光が走り、魔力の中心から白銀の竜が姿を現す。

その背には、エリオを優しく抱き止めるキャロの姿があった。

なのはは、曇りない空を見詰めたまま、しばらくぼーっとしてしまっていた。

あの魔法はなんだったんだろう？

枷が外れたみたいで、急に力が溢れ出た感じ。

「柄にもなく張り切りすぎちゃいましたかね。」

【やりすぎだ、馬鹿者！】

「まあまあ、そう怒らないで下さいよ。」

千歳くんはいつもと変わらず、マスターとお話している。

千歳くんの魔法は、いつも分からない事だらけな気がするな、な

んてぼんやり思った。

いろいろ聞きたいけど、今は早く新人の皆のフォローに回っても
られないと。

「千歳くん。ここはもう大丈夫だから、他の子のフォローにまわ
ってもらっていいかな？」

初めての任務だから緊張してると思うし、それに、キャラは特に
様子がおかしかったから。

「ようがす。ちょーとキツイっすけど、お任せ下さい。」

あれ？

よく見ると千歳くんの顔色があんまり良くない気がする。

「大丈夫？無理ならフェイト隊長もいるから休んでてもいいよ？」

「いえいえ、そんな職務放棄をする様なことは……」

【すまないな、高町くん。お言葉に甘えさせてもらおう。…いい
な、鷺介。】

鷺介の言葉を遮って、アレキサンダーが提案を了承する。

鷺介は何か言いたげだったが、アレキサンダーが有無を言わせぬ迫
力だった為、渋々といった様子で頷いた。

「…すみません、なのはさん。大変申し訳ないんですけど、お言葉に甘えさせて頂きます。」

本当に申し訳なさそうなんだけど、ここで無理をさせるわけにはいかない。

それだけは…もう絶対に…。

『ライトニング4！飛び降り！？』

デバイスに送られてくるフォワード陣の様子と、管制の慌てた、声が二人のもとに届く。

エリオがガジェットによって空へ投げ出され、それを追ってキャラとフリードが飛び降りっていった。

AMFから離れれば、キャラはフルパフォーマンスで魔法が使える。

大丈夫。

私はあの子たちを信じて…

「エリオさんっ！！キャラさんっ！！」

そんな私の思考を千歳くんの叫び声が吹き飛ばした。

「マスター！転送行きますよっ！！」

【駄目だ、鷲介！あの子たちなら大丈夫だ！これ以上はお前が…】

「そんな場合じゃないでしょ！！苦しんでる弟と妹を守れない兄なんて、何の役に立っつていうんですかっ！！！！」

こんなに真剣な千歳さんの顔は初めて見る。

「絶対大丈夫なんて、保証はどこにもないんすよ！！！！」

そうだ。

千歳さんの言う通りで、『絶対大丈夫』なんてことは無いんだって、私が一番良く分かっていたじゃないか！

「千歳くん！…エリオとキャロをお願い！！」

【！高町くん！】

「ようがす！任せましたよ！！！！」

鷲介の足元に魔力が集まっていき、目には見えない陣が形成される。

「行きます！！！！」

声と同時に鷲介の体がなのはの前から消える。

「……ごめんね。」

なのはは、鷺介が消えた所に目を移して謝罪の言葉を口にした。

すぐに駆け付けられるのが千歳くんしかいなかったから、お願いするしかなかった。

でも、すごい無理させてしまったと思う。

隠してみたいただけ、千歳くんの顔は真っ青で、凄く汗が出たから。

罪悪感を感じて、俯くなのはの視界に不思議なものが映り込んだ。

「これは…黄金の…粉…？」

フリードの背中ではリオを抱き止めるキャロを見て、転送してきた
鷲介は安堵の息をついた。

「良かった…本当に良かった。」

安堵した所で、グラリと鷲介の体が傾く。

やっぱり無理しすぎたみたいですね。

でもね、ワタクシ後悔はしてないっすよ。

そんなこと言わなくても分かかってるって？

そっすよね。

アナタならきつとそう言ってくれると思って…ました…。

意識、視界が歪み、鷲介の体がゆっくりと下へ落ちていく。

それを白銀の背中がやんわりと受け止めた。

「「チイ兄さん!!」「」

二人の声に鷲介の意識が再び覚醒する。

「すみません。カッコよく助けにこようと思ったんですけど…」。

「いいんです。」

「来てくれただけで、嬉しいですから。」

エリオとキャラロは労る様に鷺介を寝かせ、安心させるように笑った。

「後は、僕と。」

「わたしに。」

「任させて下さい…！」

お二人は本当にいい子すね。

お兄ちゃん冥利に尽きるとは、まさにこの事でしょう。

「それじゃ、お言葉に甘えさせて頂きますか。最高にカッコいい勝ち方を期待してますよ。」

「はい…！」

そんな二人を見届けて、フリードの背中で鷺介はゆっくりと意識を手放した。

意識を手放す前、鷺介が見たのは、エリオとキャロが二人で生み出したマーベラスコンビネーションだった。

「刻印N09のレリックが移送されます。追撃を出しますか？」

「いや、かまわんよ。レリックは惜しいが、代わりにもつといいものが見られたからね。」

くくつと喉をならして、白衣を来た男は愉快そうに笑った。

彼の名ははジュエル・スカリエッティ。

広域次元犯罪者で、指名手配中の科学者だ。

「やはり、この案件は素晴らしいよ、そう思わないかい、ウーノ？」

ウーノと呼び掛けられた女性の返答を待たずに、スカリエッティは言葉を続けた。

「蘇ったエース・オブ・エースにプロジェクトFの残滓！これだけでも、好奇心が疼くというのに、さらに『彼』まで現れたのだからね！という訳でウーノ？」

「はい。」

「『ドラ』に通信をまわしてもらいたいのだがかまわないかな？」

「かしこまりました。」

ウーノの映っていたモニターが消え、代わりに真っ暗な部屋を映したモニターが現れた。

通信に気付いた人影がのそのそモニターの前までやってきた。

「……はい。こちら成田公務店夜勤明け支店です……。」

声の主は寝起きなのかひどく気だるげだ。

「やあ！ドラ！気分はどうか？僕は最高の気分だよ。」

「…あんさ。人に質問したんなら、まずはちゃんところちの答えを聞けよ、ブツ殺すぞ、このヤロウ。」

「相変わらず過激な愛情表現だね！まあ、それが君のいい所なのだがね。」

「…あっそ。そりやどーも。で、何か用？」

「聞いてくれるかな？今、僕の好奇心と欲望はこれまでになく高まっていてね、この感動を是非とも君と分かち合いたいと…」

「ストップ、ちょーっとストップ。あんさ、見て分かると思うけど、オレ、今、オヤスミ中だったワケ。…だから、メンドクセー話ならソツコー通信切るから。ハイ、そんじゃ続きをどうぞ。」

有無を言わせぬ勢いで、『ドラ』と呼ばれているモニターの男は言い切った。

「仕方ない。残念だがすぐに本題に入るとしよう。切られてしまつてはたまらないからね。」

「…んだよ。最初からそーすりゃいいんだよ。オメエは、いちいちまどろっこし…」

「『彼』が現れたよ。」

「……………ハン。」

男は鼻を鳴らした。

「映像データをそちらに転送しておくよ。存分に鑑賞してくれたまえ。」

「うるせえ、うるせーダレが存分鑑賞なんかするか。ブツ殺すぞ、このヤロウ。」

不機嫌そうにモニターの男は、早口で捲し立てた。

「それから、ゼストとルーテシアのレリック搜索の協力を再開してくれたまえ。」

「あん?…まあ、別にいいけど。」

「ルーテシアは君に会いたがっていた様だから、なるべく早めに行ってあげて欲しいね。」

「……用件はそんだけ?んじゃ、切るぞ。」

そう言っつて男はモニターを遮断した。

続けて別のモニターが浮かび上がった。

「ドラには、私が後で言っつて聞かせます。」

「かまわないよ、ウーノ。あれがドラのいい所さ。」

「ドクターがそうおっしゃるなら。」

しかし、『息子』は本当に変わっていて、見ていて、話していて飽きないものだ。

「さあ、運命の歯車は揃いつつある。ここまでは予定調和だ！ くっ！楽しませてくれよ！」

スカリエッティは、モニターに映し出されている六課の面々を楽しそうに見つめた。

お疲れ様でした。

多少長めでしたが、楽しんで頂けたでしょうか？

これからも頑張りますので、宜しくお願い致します。
御一読ありがとうございました。

第21話「繋ぐ力（フレンドコネクトシステム）」（前書き）

お久しぶりです、米寿です。

皆さま如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第21話「繋ぐ力（フレンドコネクトシステム）」

初めての任務で僕とキャラの所に急いで駆け付けてくれたチイ兄さんが倒れた。

あの時は、目の前のガジェットを倒すこととチイ兄さんが来てくれた嬉しさで頭が一杯で、僕とキャラの頑張る姿を見せる事しか考えていなかった。

目を覚ましたチイ兄さんは、『大丈夫すよ。ヨユーっすよ』と言ってくれたけど、それでも僕は、やっぱり心配だった。

だから、僕は決めた。

大切な人たちを守る力が欲しい。

そして、チイ兄さんやフェイトさんに心配をかけない為にも、もっと、もっと強くなる。

きっと、キャラもそう思っているはずだから。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、『りりつば』『始まります。』

ロングアーチに、無事にレリックの確保と車両のコントロールを取り戻した事が伝えられてから二十分程が経過した。

その間、確保したレリックの護送をスターズ分隊、現場引き継ぎをライトニング分隊に指示しようやく任務が一段落を迎えた所だ。

「ふう…。」

ようやく一息つけたわ。

自分で思ってたより、結構緊張してたんやな。

「お疲れ様です、八神部隊長。」

「ありがとうな。皆が頑張ってくれたおかげで、初出勤を無事、乗り越える事ができたわ。」

現場のフォワードと隊長たち、オペレーターの皆も期待通りの働きやったし上々といってもええはずや。

「そんなら皆も一旦解散や。各自、事後処理よろしくな。」

「……はい……」

それを合図に司令室から皆が出ていく。

その場に残ったはやてはおもむろに、先程の戦闘記録映像を再生した。

さつき、私宛になのはちゃんから直接連絡があった。

『千歳くんが倒れた。』って。

一瞬やったし、もう意識は戻つとるみたいで、今はなのはちゃんたちと一緒にレリックの護送をしとる。

皆には余計な心配をかけたくないし、『初出勤は犠牲も無く達成』ってしたほうがいいから、皆には悟られんようにつて釘を刺された。

確かにその通りや。

私たちの部隊はただでさえ、敵が多い部隊や。

弱味はできるだけみせんほうがええし、結果は最善に越したことはない。

「けど、今回千歳くんが倒れたんは、私に責任があるからな。」

思わずはやては呟いた。

千歳くんがベストのコンディションやったら、今日みたいにはならなかったはずや。

前日、千歳くんは私の家族との不和を無くす為、体をはってくれた。

本当なら今回の出勤は見送るべきやったんやと思う。

けど、彼は初めての実戦になるフォワードの皆の精神的な支えになってもらう為、行ってもらわざるをえんかった。

そして、突然の事態に彼は力を使って、そして倒れた。

大事には至らんかったけど、それはあくまで結果や。

「分かつたつもりで、なーんにも分かつたらんかったんやな。」

組織の長として、状況によっては最善の結果を得るため、部下に負担を強いる決断を下さなければならぬ事。

当たり前の、その事実が、今のはやてにプレッシャーとして重くのし掛かっていた。

「こりゃ、クロノくんに会ったら謝まらなアカンかな。」

当時、下で働いていた頃に散々迷惑をかけていたんだと今さらながらに思い、息を吐き、はやては苦笑いを浮かべた。

「チイ兄、本当に大丈夫？」

「ご心配をおかけしてすみません、スバルさん。ちょーっと魔力を使いすぎちゃっただけですから。」

「倒れたって聞いた時には驚きましたけど、その様子なら、今は問題無いみたいですね。安心しました。」

「ええ。ティアナさんの仰るとおり今は問題ありません。お二人が頑張っていたのに、お恥ずかしい限りです。」

レリックを護送中のへりの中で、鷲介は頭を後ろを掻きながら二人へ言葉を返した。

「まだ、チイ兄からすれば頼りないかもしれないけど、今度ピンチの時は私たちを頼って欲しいな！」

「なんで、私まで…って言いたいところだけど、どうせ、アンタは言い出したら聞かないし…。そういうわけなので、千歳さん、遠慮なく頼って下さい。」

スバルは生き生き、ティアナはやれやれといった具合だ。

「頼りないなんてとんでもない！是非ヨロシク御願います！」

いやー、仲間って感じですねー、青春ですねー。

「そうだね。二人の言う様に、千歳くんにはもっと周りを頼って欲しいな。」

「そんな！今回の戦闘では、ワタクシ、なのはさんに頼りっぱなしだったじゃないか。これ以上はとてとても。」

ははーっと低姿勢で頭を下げる鷲介をスバルは、あははと笑い、ティアナは相変わらずこの人は…という眼で見ていた。

だから、気付かなかった。

鷲介を見るなのはの顔に、不安の色が浮かんでいた事に。

レリックの護送を無事に終え、へりは六課へと向かっている。

「スバルとティアナは、初めての任務だったけど、ちゃんと動けてたと思う。よく頑張ったね。」

「ありがとうございます!」「」

なのはさんの言う通り、お二人ともご活躍だったみたいで。

「この調子でこれから先も頑張って欲しいかな。」

「はい!」「」

人に褒められたり、認められるって事はそれだけで自身の力にな

りますからね。

それがなのはさんの様に魔導士の憧れとなれば、効果は絶大です。

マーベラス！流石はエース・オブ・エース、素晴らしい！

「それにしても、なのはさんの魔法は凄かったよね、ティア？」

「そうね。流石に驚いたわ。」

驚介がなのはさんべた褒めタイムを堪能している間に、話題は次へと移っていた様だ。

「お二人とも何の話をしてるんすか？」

「チイ兄も見たんでしょ？なのはさんのバスター。凄かったよね！？」

「はあ…あのね、スバル。千歳さんは、なのはさんと一緒にいたんだから見てないわけないでしょ？」

「あれは、私だけじゃなくて千歳くんも一緒に撃つたんだよ。」

「「は？」」

あきれた様子のティアナとそうだったと言って照れるスバルの二人は、なのは一言に呆気にとられた。

二人は鷺介を見る。

鷺介は気まずそうに苦笑いを二人へ返す。

そして、お約束。

「「えっ……！！！！！！！！！！」」

二人の絶叫がへり内に響き渡った。

「スバルとティアナは戻ってくるまで時間がかかりそうだから、その間に千歳くんに聞いた事があるんだけど、いいかな？」

放心する二人を見てなのは鷺介にそう切り出した。

「そつすね。分かりました。ワタクシに答えられる事であれば、なんなりと。」

「ありがとうございます。まずは『フレンドコネクトシステム』についてなんですけど、あれは、どういうものなの？」

『まずは』ってのが気になりますが、これにはキチンとお答えしなくてはいけませんね。

「そつすね。フレンドコネクトシステムっていうのは繋ぐ力なんすよ。」

「繋ぐ力？」

「ええ、繋ぐ力です。デバイスと魔導士は魔力で繋がっている状態で魔法を使用するじゃないですか。」

「うん、そうだね。」

「それを応用したのがフレンドコネクトシステムなんすよ。」

「つまり、どういう事なの？」

「簡単に言えば、ワタクシとなのはさん二人の魔力を繋いで、レイジングハートさんとマスターを通して魔法を使用したといった感じっすかね。」

「ちよつと待って。確かに、魔力自体は受け渡しできるけど、魔法を使うのは無理なんじゃないかな？」

魔力の受け渡しについては、なのはは幼い頃にフェイトに対して行っている為、理解できた。

しかし、その魔力を一つの魔法として同時に使用すると話が変わってくる。

個人によって魔力は、通称『魔力光』と呼ばれる光を放ち、デバイスを通して自身の魔力として放つ。

それはパスの様なもので、インテリジェントデバイスは、主の魔力以外には反応しない。

早い話が、自分の魔力以外はインテリジェントデバイスを通して魔法を使う事ができないはずなのだ。

【鷲介の魔力は少々特殊だな。】

ここまで沈黙していた、アレキサンダーが口を開いた。

【無色の魔力光を放つ鷲介の魔力は、他の魔力と混じり合って同化する。そして、俺がレイジングハートさんとリンクする事で、高町くん本来の魔力を鷲介の魔力として引き出して使う事ができるというカラクリだ。】

「じゃあ、あの時力が溢れてきた様に感じたのは…。」

【高町くんの予想通りだ。言ったたろう、高町くん本来の魔力だと。鷲介には魔力リミッターなんぞかかってはいないからな。】

「おや、マスター。ご機嫌はもう直ったんですか？」

【勘違いするなよ、鷲介。どこかの早漏がこれ以上早くならん様にキチンと説明しなければならんから、渋々でてきただけだ。】

「こりゃ、手厳しいっすね。」

「まあまあ。」

なのはアレキサンダーをなだめながら、ふと、疑問に思った事を口にした。

「でも、そうすると少しおかしいと思うんです。マスターさんは私の魔力を千歳くんの魔力として引き出してあの魔法を使っただけですよね？」

【うむ。】

「けど、私、ほとんど魔力を使った感じがしなかったんですけど。」

それを聞いた鷲介は冷や汗を流し始めた。

…気付いてしまわれましたか。

この流れは不味いですね。

しかし、ワタクシならこの流れを断ち切れるはずですよ！

「そんな事より、なのはさん！今日も一段とお美しい！」

「ありがとう、千歳くん。お世辞でも嬉しいよ。」

よし、ノってきましたよ。ここで一気に畳み掛けるとしましょう！

「お世辞だなんてとんでもございません。どうです、六課に戻ったら一緒にお食事しながらお話でも…。」

「すごく嬉しい申し出んだけど、今、マスターさんに聞きたい事があるから少し待ってくれる？」

なのはは、有無を言わず笑顔で鷺介の言葉を断ち切った。

…ああ。今日もなのはさんの笑顔はとってもお綺麗です。

「それで、どうしてなんですか？」

【フレンドコネクトシステムでは、魔力を引き出すのが俺の役目で魔力を使うのは鷺介の役目だ。このブルマニアンは使う魔力の比率を自分が9、高町くんを1にして魔法を使ったのさ。その結果は高町くんも良く分かっているだろう？】

「そういう事だったんだ…。ねえ、千歳くん？」

「…なんでございましょう？」

「さっきのお誘いありがとう。そして帰ったら、食事しながら二人でお話しようね。」

鷺介の手を取るなのはの笑顔は、鷺介が六課に来て、見てきた笑顔

の中で最高に輝いていた。

六課の訓練上に四つの影。

二つの影が交錯して離れる。その瞬間、片方へ向け炎が放たれる。影は炎を切り裂き間合いを取った。

「いい連携だよ。」

「まだですっ！ーキャロ！」

「はいっ！ツインブースト、スラッシュアンドストライクー！」

【承諾】

キャラの魔法がエリオに力を与え、ストラダが輝き始める。

【エクスペロージョン！】

「行きますっ！一閃必中！！」

エリオの足元に魔方陣が現れ、周りから電気が迸る。それと同時に、フェイトへ向けて閃光の如く駆け出した。

「うん。すごくいい攻撃。でもっ！」

フェイトはバルディッシュを縦に構え、突進してきたストラダの軌道を僅かに変え、受け流す。

その勢いを利用して振り向き様に、背後からエリオにカウンターを入れた。

「うわあっ！」

【ソニックムーヴ。】

吹き飛ばされたのと同時にバルディッシュの声。

立ち上がるうとしたエリオに、フェイトのバルディッシュが突きつけられていた。

「ここまで、だね。二人とも、凄く良くなってるからびっくりしちゃった。」

「ありがとうございます。」

「うん。でも、急に模擬戦して下さいっていうのには驚いたかな。」

「わがまま言ってますみません、フェイトさん。」

「すみません。」

「ううん。いいよ。けど、二人の口から理由は聞かせてもらいたいな。」

ある程度見当はついてるんだけどね。

二人がどんな想いを見つけたのか。それを、私は二人の口から直接聞きたい。

「えっと…ボクは、大切な人を守るために強くなりたいと思って。」

「ワタシも、大切な人とその場所を守りたいと思って。」

「じゃあ、どうしてそう思った？」

二人は今、とても大事な想いを私に伝えようとしているのが分かる。

「キャラやチイ兄さんみたいに、不安でも辛くてもボクを心配して助けに来てくれる人がいる。そんな優しい人たちを、今度はボクが強くなって、守りたいと思ったんです。」

「そっか……。キャラはどうして？」

「なのはさんやチイ兄さんは、ずっと恐いと思っていたワタシの力を優しい力だと言って認めてくれました。そして、そんなワタシを守ってくれたエリオくんやフェイトさんたちを守りたいと思っただんです。」

「そうなんだ。」

二人とも私が知らないだけで、どんどん強くなってるんだね。

「二人とも、聞かせてくれて、ありがとう。」

そして、私からも二人に伝えたい事があるんだ。

「力はね、使う人の思いによって人を助けたり、時には傷つけたりする。でも、今の二人なら、『傷つけても守れる魔導士』になれると思う。私は二人にそうなって欲しいかな。」

「傷つけても……。」

「守れる魔導士……。」

「あの、フェイトさん？傷つけるのと守るのは逆ですよ？一体どういう意味なんですか？」

キャラもうんうん頷いていており、エリオと同じ疑問を持った様子だ。

「その答えは宿題にしておこうかな。答えが分かったら聞かせてね？」

悪戯っぽく笑うフェイトに少し驚いた二人だったが、迷わず二人はこう返した。

「はい！」

「うん。」

その返事を聞いてフェイトは満足そうに頷いた。

幼い頃に、なのはは私を傷つけながら守ってくれた。

本気と本気のぶつかり合いをして、お互いに傷つけ合ったけど、なのははずっと私の事を大切な人として守りたいと思って戦ってくれていた。

だから、今、私はこうしてここにいられる。

エリオとキヤロは、今日千歳くんが倒れた事で、好きな人を守りたいと思っただろう。

二人にはこれからも今の気持ちを忘れないでいて欲しい。

「よし！じゃあ、模擬戦もう一本やろうか？強くなって戻ってきた千歳くんを驚かせてあげよ！」

「よろしくお願いします！」

こうして、模擬戦が始まった。

余談だが、模擬戦はなのはたちが帰ってくるまで続けられ、ボロボロの二人と一匹を見て、苦笑いする一同の姿があったそう。

第21話「繋ぐ力（フレンドコネクトシステム）」（後書き）

お疲れ様でした。

今回はフレンドコネクトシステムの説明だったのですが、大丈夫だったでしょうか？

ご意見、ご感想お待ちしております。

御一読ありがとうございました。

第22話「お仕事は？はい、MCをやっております。」（前書き）

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんでいただければ幸いです。

第22話「お仕事は？はい、MCをやっております。」

ミッドチルダには、一体幾つのインテリジェントデバイスがあるのか。

統計を取ったわけではないが、AIを積む以上は高価なものになるだろうし、そこまでの数はないだろう。

そこからさらに、デバイス本来の役目以外をしているものはどれくらいいるだろうか？

これも推測なのだが、恐らく、ほとんどいまい。

これは、そんな特別とっていい、とあるインテリジェントデバイスのお仕事にまつわるお話だ。

今宵も迷える子羊と仔猫ちゃんたちをお招きするでしょう。

では、肩の力を抜いて、リラックスして聞いて欲しい。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない『りりつば』『始まります。』

「外出許可が欲しい？」

怪訝な様子で、はやては鷲介に訪ねた。

「ええ。どうしても外せないお仕事がありまして。お願いできませんかね、八神部隊長。」

「仕事の内容を聞いてもええかな。それによって判断させてもらうわ。」

「いいですよ。ただし、出来ればオフレコでお願いしたいんですけど。」

はやてはさらに怪訝な顔をした。

「ヤバイ仕事やないやろね？」

「いえいえ！合法的で至極真つ当なお仕事ですよ。」

鷲介のうさんくさい上に物騒な単語を並べ立てる様子に、はやては一抹の不安を感じた。

「それで、仕事というのはなんなん？」

「ラジオのMCなんすけど。」

「…は？千歳くんが？」

「いえ、マスターが。」

「なるほどな。そんなら納得…ってできるかい！！！！」

はやては渾身のノリツッコミをみせた。

「そこをなんとか！多くのリスナーさんを抱える人気番組で穴を開けるわけにはいかないんですよ。」

「納得いかんのはそこちゃうわっ！！なんで、デバイスが働いとんねん！！！！」

「なんでと言われましても。ねえ、マスター？」

【まあ、成り行きとしか言えんな、はっはっは。】

「はあ…。なんか、もうええわ…。」

ツッコミ疲れたのか、はやては肩を落として嘆息した。

その瞳は既に、諦め色に染まっていた。

「許可出す以上はある程度事情を聞いとかなあかな。一体何て番組なん？」

「八神部隊長。くれぐれもオフレコでお願いしますよ。」

「分かった分かった。引つ張らんでええから、はような。」

念を押す鷺介を適当にあしらいながら、はやては先を促した。

「番組名は、『メッセンジャー・フロム・ザ・ミッド』です。」

周りを確認し、鷺介は若干声を潜めてそう告げた。

「！！！！あ、ああ…私も名前くらいは、聞いた事くらいはあるかな…ははっ…。」

【ほう…。八神くんも聞いた事があるとは驚きだな。】

「いやいや！ラジオ自体は聴いたことないよ！ただ、名前は聞いた事があるような気がするってだけやでっ！」

【ふむ。そうだったか。これは、早漏とちりさんやな。】

「ま、まったくや。マスターは早漏とちりさんやな。」

「八神部隊長っ！？マスターの卑猥発言スルーな上にマズイ単語口走ってますけどっ！？」

混沌とする部隊長室に新たな来訪者が現れた。

「はやてちゃん。頼まれてた資料持ってきたです。」

「流石は祝福の風やっ！グッドタイミングやでリン！」

「？よく分からないですけど、お役に立てたのなら良かったです。」

「
そう言ってリンははやての隣にあるデスクへ腰を下ろし鷺介に向き直った。」

「こんにちはです、鷺介、マスター。」

「
どうもどうも。お邪魔してます、リン曹長。」

【つむ。】「きげんよう、リンくん。」

「はやてちゃんにご用事ですか？」

「ええ、マスターの仕事のお話を少しさせて頂いていた所なんです。」

「マスターがお仕事してるんですか？」

【ああ、ラジオのMCなんだが。リンくんは聞いたことがあるか？メッセンジャー・フロム……】

「まあまあまあ！ええやないのそないな事は。ほんで外出許可やったな。かまへんかまへん、全くもってオールオツケーや！せやからもうこの話はおしまいやな。解散、かいさーん！！」

はやては凄いい勢いでまくし立てて、会話を打ち切ろうとした。

「あー。どこかで聞き覚えがあると思ってたですが、それ、はやてちゃんが聴いてるラジオですー。」

しかし、現実是非情だった。

「「……………」。」

鷺介とはやての前に気まずい沈黙が降りる。

「そうやつ！ああ！そうや。私はリスナーや。でもそんじゃこちらの甘つちよろいリスナーちゃうで！数えきれんほどお便りも書いたし、採用率もダントツやつ！ラジオネーム『こだぬき・セクシヨン6』とは私のことやつ！！それだけやない！私は番組を本当に愛してる！MC・ALKを心底リスpektしてるんやつ！どうや？なんか文句あるんかつ！！！」

「話が長いうえに、逆ギレ！？」

【まさか、はやてくんがこだぬき・セクシヨン6だったとはな…。

】

事実が露見したはやては、黒いオーラを纏い、『笑えばいいやんと下を向きながら呪詛の様に言葉を繰り返している。

人には誰しも隠したい秘密がある。

それをまさに目の前にした鷺介は、いたたまれない気持ちになった。

今のはやてには、鷺介のどんな慰めも、ひどく薄っぺらく感じてしまうだろう。

ならば、彼女に声を届けられる存在はヤツ以外ありえない。

【はやてくん。】

「……………なんや。」

【俺は、今日の放送で、女性特有の夢が詰まった二つの存在のお便りが届く。なぜだか、そんな気がするのだ。】

「っ！……！」

ガバツとはやては顔を上げた。

目の前に、光を放つアレキサンダーが降臨していた。

【行くぞ、鷲介。急がねばならん。…おっぱいが、俺を呼んでい
る。】

「……………あ、はい。じゃあ、八神部隊長失礼します。」

アレキサンダーは鷲介の胸ポケットに収まり、部隊長室から去って
いった。

数秒の沈黙。

「なあ、リイン？」

「なんですか、はやてちゃん？」

「あそこまで言われたらやらなあかんよな？」

「はいです！リンもお便り書きますよー！」

「せやな！二人で頑張ろうな！」

顔を見合わせ、二人は笑う。

この日、部隊長室からは、穏やかな笑い声が途切れることなく続いた。

ミッドチルダのオフィス街。

その一角、一際高いビル。

そこが彼の仕事場だ。

「おはようございます。」

「」「おはようございます。」

【おはよう、皆。今日も宜しく頼むぞ。】

「任せて下さい。」

「いつでもいけますよ。」

「それじゃあ、早速始めちゃいましょうか。」

挨拶もそこそこに、スタッフが一斉に動き出す。

鷲介はブースに入り、マイクの前の専用台にアレキサンダーをセットした。

【すまん、鷲介。】

「いえいえ、お気になさらず。」

「それじゃあ、本番入りまーす。」

セットを確認したスタッフから声がかかる。

ブースから出た鷺介はいつもの様に、外のスタッフたちの元へ合流した。

「ALKさんなんか今日、すげー気合い入ってますね。」

「ええ…まあ…。」

理由が理由だけになりにかなり説明しにくいんで、お茶を濁しておきましよう。

世の中知らないほうがいいことってのは、案外身近な秘密なのかもしれない。

「カウント！5…4…。」

3からは指でスタッフが合図を送る。

そして、最後のカウントと同時にアレキサンダーへ、勢いよく人差し指が突き付けられた。

【ピッ、ピッ、ピッ。じほん】

【タッタラッタッタ〜 タッタッタラッタ〜】

【アレキサンダーの、メッセージャー・フロム・ザ・ミィーッド
ウー…！】

【今夜も始まりました。お相手はもちろん私、眠れぬ子猫ちゃんたちのお世話係でお馴染みのアレキサンダーことMC・ALKです。】

【早速、お便りが届いているので紹介させて頂きまーす。まず、最初のお便りは、RM・ヘリパイもおっぱいさんからだ、いつもありがとっつー！】

ん？

よく考えてみると…ヘリパイもおっぱいさんは、番組の常連なんすけどなーんか知ってる人な気がするんすよね。

【『ALKさんこんばんわ！』】

【はい。こんばんわー！】

【『最近、とある部隊に所属になったんですが、そこに少し気になる女性がいます。彼女はそういう事に興味がないらしい上にかなり硬派な性格です。俺はどうしたらいいでしょうか？』】

ヴァ スさん…だ…と。

驚きのあまり伏せ字になってしまいました。

【なるほど…。では、硬派な彼女をおとす殺し文句が必要だな。】

【しかし、彼女の性格を考えるなら回りくどいセリフはかえって逆効果だ。】

【そこで俺から迷える君へ、彼女へ送る殺し文句を進呈したい。】

【『結合しよう！』。】

ええ…確かに潔いいいつすね。

【何かに迷った時はこの言葉をためして欲しい。きっと、何か
ひらけるはずだ。】

ワタクシも確かにひらけると思います。

ただし、ヴァ スさんの体が真つ二つに、ですけど。

【それでは、続itingのお便りは…む…こちら常連の方からだな。

RM・こだぬき・セクシヨン6さんからだ！】

ホントにきちやたよ！

【『ALKさんこんばんわ』】

【はい。こんばんわ】

語尾に とか、八 部隊長めっちゃノリノリじゃないっすかつ！！

【『私には悩みがあります。最近家族や友人と一緒に風呂に入ろうと誘うと、遠回しに断られてしまっんです。原因に心当たりはあります。それは、おっぱいです。私はオツパニストとして、彼女たちのおっぱいを確かめたいだけなんです！一体どうしたらいいでしょうか？』】

十人十色、人それぞれ。

ワタクシ、今日ほどその言葉の重みを実感した日はないでしょう。

【ふむ。これは相当深刻な相談だ。だが、俺からこだぬきさんに
言えることは一つしかない。】

【『自業―！自得―！』。】

全くその通りっす。

【ばっさり解決したところで、次にイカせてもらおうとしよう。】

【三通目のお便りは、R M・欲望 あんりみてっどさんからだ。
いつもありがとう―！】

この方も常連さんすね。

この方にはワタクシ心当たりがないので、少しホッとしてしま
います。

【『ALKさん、こんばんわ。』】

【はい。こんばんわ―！】

【『私にはたくさん娘と息子がひとりいます。娘はよく私の話
を聞いてくれるのですが、息子は私の話をあまり聞いてくれません。
愛情をかけてきたつもりですが、なかなか上手くいきません。どう
したらいいでしょうか？』】

どつやらこのお父様、苦勞なされてる様です。

【ふむ。確かに息子さんのことは気になる。だが、それ以上に、俺には気になってる事がある。】

【それは娘さん方が美しいかどうかだ。美しいなら是非一人ぐらい紹介して欲しい。遠慮はいらない…俺の隣は、いつでも空いているからな。】

【む。話が逸れてしまった。ま、あれだ。男は強く生きられるから気にするだけ時間の無駄だ、以上！】

投げやりな上に、自分の欲望最優先な言動は、流石はマスターと言つべきでしょうか。

いいんすかね、これで。

【おっと。そろそろお別れの時が近いようだ。】

【最後に、時間の都合上紹介できなかったお便りを送ってくれたリスナーの名前を呼びながらお別れしたいと思います。】

【RM・魔王じゃないもんさん、金色夜叉さん、呪ウサさん、レバさん、美人女医の怪しい誘惑さん、主語獣兼座敷犬さん、天国に吹く祝福の風さん、マツハ&amp;ガールさん、ツイン ツインさん、誓ってボクは『揉んでやる』ではありませんさん、ドラゴンといっしょさん、メガネ属性は必要ですっ！さん、トゲ提督さん、白スーツジャスティスさん、聖王教会所属若作り否定委員会名誉会長さん、時空管理局所属若作り否定委員会名誉会長さん、隠居・ダンディさん、ぬこ姉妹さん、ハードボイルド・ファルコンさん、ま

だまだきているが今回読み上げられるのはここまでだ。】

なんか、かなり気になるお名前が聞こえてきたきがしますが、気のせいです。

ええ、きつと気のせいですとも。

【この番組は、あなたの心のメッセージャー、アレキサンダーとMC・ALKがお送り致しました。】

【今夜も、迷える人々に安らかな眠りが訪れますように……。】

第22話「お仕事は？はい、MCをやっております。」（後書き）

お疲れ様です。

ご満足頂けたでしょうか？

ご意見、ご感想もお待ちしておりますので、お気軽にどうぞ。

頑張りますのでこれからも宜しくお願い致します。

それでは、御一読ありがとうございます。

第23話「進展×under the innocent sky」morning

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

六課としてのワタクシの初仕事はなんとも締まらない感じになってしまいました。

盛大に倒れちゃいましたしね。

ま、見せ場は作れたんで及第点でしょう。

そう思わせて下さい。

フォワードの皆さんも無事に任務をこなせましたし、戻ってきてからも訓練を志願するぐらい元気が有り余っているみたいです。

というより、任務がいい刺激になって皆さんの頑張りを加速させてる感じですか。

いやあ、若いつていいなあ。

さて、ワタクシはそんな皆さんを応援しながら、安全なお仕事に従事して日々を過ごしてければなーんにも文句はありません。

あれ？

このセリフ、何かフラグっぽくないですか？

気のせいでしょう、そうに決まっています。

それでは本日もヌルツといきましょう！

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない』
りりつば』 始まります。

朝の日差しが、木々から柔らかな緑を引き出している。

吹く風も優しく、散策にはもってこいの、そんな陽気を感じられる、
そんな朝。

「どうして、ワタクシの目の前にデバイスを構えたヴィータ副隊長がいらっしやるのでしょうか？」

「んなの、複数のバリアの使い方を、スバルに実戦形式で見せて教える為に決まってるんだろ。」

「チイ兄、ガンバレ」
あれ？

確かワタクシ、六課の訓練スパーズ近くにある森があったので、朝の散策をしようとしたはずなんすけど…。

しかし、今の状況はといえば、千歳（鷲）vs ヴィータ（21）です。

記憶が飛んでいる気がするんですが…。

「それに、そっちから売ったケンカだからな。買ってやるのが副隊長の務めってもんだ。」

そう言っつて、グラーフアイゼンを肩に担いで不敵に笑う。

「そういえばそうでしたね…っつて、えっ？ワタクシが、ヴィータ副隊長に喧嘩を売った!？」

「だから、さっきからそう言ってるじゃねーか。」

ワタクシ政治家ではありませんが、今の状況にこう思わざるを得ません。

記憶にございません。

【意気がるなよ、小娘。 not 貧乳派の俺にとっては、貴様は路

傍の石と変わらんだ。】

「犯人は相棒っ!?!」

ああ…どろしてこんなこと…。

ここから、少し時は遡る。

「いや〜。早起きは三文の得とかいいますが、ホントだったんすね。」

うーんと伸びをしながら朝日が差す木々の間を歩く。

【うむ。六課というのはすごいな。こんな場所も所有していると

は。】

「ホントすね。」

「天気の良い日に自然と戯れる、なかなか乙なものです。」

「考えてみれば、六課にくるまでと六課に来てからも結構バタバタしてましたから、こうやってゆっくり散歩できるのはいいもんですよ。」

【全くだ。どこも人使いが荒くてかなわん。】

「まあまあ。こうしてゆっくりできてるんすから、いいじゃないすか。」

まあ、六課に来る前もいろいろ大変でしたから、マスターの言い分も分かるんですけどね。

ぶつぶつ不満をこぼすアレキサンダーに苦笑いした。

「てえりゃあおおあー！……！！」

穏やかな静寂を破るような叫び声。

「……朝の陽気にそぐわない気合いのこもった声っすね。」

副隊長も……。」

「……………何やってんだ、お前？」

吹っ飛ばされ体の上下が逆になった鷺介を、ヴィータは呆れた様子で見下ろした。

「なるほどなるほど。つまり、ここは例の空間シミュレーションで再現された森で、今は訓練の最中というわけっすね？」

「ま、そういつつた。」

激突から立ち直った鷲介は、状況の説明をヴィータから受けていた。

「突然スバルさんが突っ込んできたんで、何かと思いましたよ。」

「ごめんね、チイ兄。踏ん張り切れなくて吹き飛ばされちゃたんだ。」

申し訳なさそうに頂垂れるスバル。

「訓練なら仕方ないっすよ。それで、何の訓練をしてたんすか？」

そんなスバルを見て、鷲介はすぐに話題を変えた。

空気の読める男、千歳鷲介。

「防御スキルの特訓だ。今日から個別スキルの訓練だからな。防御は、フロントアタッカーには必須のスキル。まずは、そこから覚えさせる。」

「ほうほう。それはごもつともですね。」

「つーわけだから、訓練再開するぞ、スバル。」

「はい！」

「後、千歳。」

「なんでしょう？」

「見学するのはかまわねーけど、邪魔になんなよ。」

【上から視線か……。いいご身分だな。】

ヴィータの言葉に答えようとした鷺介をそんな呟きが遮る。

「……………んだと。アタシはそんなつもりで言ったんじゃ」

【『そんなつもりで言ったんじゃねえ！』とでも言うつもりか？
はっ。笑わせる。】

「ちよつと！マスター！？一体どうしちゃたんすか！？」

慌てる鷺介と目を白黒させながらオロオロするスバル。

そんな二人を意に介す事なく、アレキサンダーは高らかに宣言する。

「絶壁の分際で、鷺介と俺に指図するんじゃねえ！！」

瞬間、時間が止まる。

空気が読めないデバイス、アレキサンダー。

ヴィータの肩が小さく震えている。

ええ、このお二人が顔を会わせた以上、こうなることは薄々分か
っていましたよ。

「……………上等じゃねえかあ。」

そんなヴィータの言葉を聞いて、鷺介は考える事を止めた。

そして、冒頭のやり取りへ戻る。

そうでした。

ワタクシ、受け止めたくない現実に目をそらし続けていたんです。

「時間が勿体ねえ。さっさと始めるぞ。」

あれ？

グイータ副隊長、さっきまでバリアジャケットじゃなかったのに、今は絶賛装備中です。

それに、心無しかこの状況を楽しんでるような…。

【鷲介、ヤツに目にものみせてやれ!!】

ああ、こつちも楽しそうすね。

はあ…これは諦めるしかなさそうです。

ため息を一つついて、バリアジャケットを纏う。

「お手柔らかにお願いしますよ。」

「これでやっとあん時の借りが返せんな。」

そう言って、ヴィータは口の端をつりあげて笑う。

あの時借り？

まさか、あの模擬戦という名の虐待の事すか！

これはお手柔らかになんていつてられないかもしれませんね。

「いくぜ！千歳え！スバル！よく見とけよっ！！」

「はい！！」

ヴィータは鷲介目掛けて一直線に駆け出す。

それと同時に鷲介の指示がマスターへ飛ぶ。

「マスター、ガイアスファイア。」

【スファイアセット、完了だ。】

透明な魔力のうねりが、周りに複数展開される気配。

「出やがったな！けど、関係、ねえ！！」

【【プロテクション。】】

降り下ろされたグラーフアイゼンを、アレキサンダーと違う声で発動させたバリアが受け止める。

「ちっ！やっぱ…カテエ！大人しく吹っ飛ばされてるよっ！！」

「その発言、すごい理不尽なんすけど！」

攻撃とバリアは完全に拮抗していた。

受け止める側の、鷲介が発動したバリアが徐々にヴィータの魔力光である赤色に染まっていく。

「ちっ！」

それを察知して、舌打ちを残しヴィータは、バックテップで距離を開けた。

「あれ？退散すか？」

「うるせえ。また、『アレ』にやられちゃたまんねーからな。」

「ワタクシとしては、それで終わりがよかつたんすけどねえ。」

あんなのに殴られたら何メートル吹っ飛ばされるかわかったもんじゃありません。

「言ってる！いくぞ、アイゼン！！」

【シュワルベフリーゲン。】

ヴィータの前に二つの鉄球が浮かぶ。

「ちよつと！ちよつとー！射撃魔法までっ！？」

「ぶち抜けええー！！！！」

「聞く耳持たずっ！？」

勢いよく降りきられたグラーフアイゼンから、鉄球が打ち出される。

【プロテクション。】

見えない壁が鉄球を阻もうとする。

鉄球とバリアは拮抗するが、乾いた音と共にバリアが突破される。

これは、バリア貫通系すかね。

なら！

【プロテクション。】

即座にバリアが展開される。

しかし、幾分勢いが落ちるだけで、バリアは破られる。

【プロテクション。】

繰り返して変わらない結果にヴィータが吠える。

「そんなんじゃあ防げねえよ！」

「ま、そうなんすけどね。」

【プロテクション。】

「バカの一つ覚えかよっ！！」

四度目のバリア。

打ち出された時より速度は落ちているものの、防ぎきるには至らない。

バリアを破った鉄球が、鷲介へ吸い込まれる様に向かっていく。

「頃合いつすね。」

「あん？」

【ラウンドシールド。】

勢いが弱まった鉄球をシールドが弾き、軌道が変わる。

【ラウンドシールド。】

同時に二つのシールドが展開され、軌道の変えられた鉄球同士が弾かれ、ぶつかり合う。

一つは鷲介の真上へ、もう一つはヴィータ方へ。

「マスター、ブーストを。」

【加速！行けよやあー！！】

弾かれた鉄球、ヴィータへ向かっていたものが、支援魔法を受けて急激に加速する。

「な！？くそっ！！！」

咄嗟の事にシールドの展開が間に合わない。

ヴィータの体が赤い魔力光に包まれ、それがグラーファイゼンにも伝わっていく。

「だああああー！！！！！」

魔力を帯びたグラーファイゼンで受け止めた鉄球を、叫びと共に真上に弾き飛ばした。

それを見届けた鷲介が声をかける。

「終了でいいっすかね、ヴィータ副隊長。」

「ああ…。しょうがねーけど、そうすっか。」

その様子をスバルはポカーンと口を開けて眺めていた。

「どうだ、スバル？今ので一通りの防御スキルを使った…って、おい！聞いてんのか！？」

「へ？あ、は、はい！すいません！聞いてます…けど…」

「けどなんだよ？」

「いえ、ただ、チイ兄がヴィータ副隊長と普通に渡り合ってるのに驚いちゃって。」

「ああ…そういう事か。なんだよ千歳、『あの事』フォワードたちに言っただけだったのか？」

「ええ、まあ。」

驚介は、バツが悪そうに目を反らしながら答えた。

「スバル。なんで最初の任務にCランクのコイツがはやてにお前らのフォローを任されたか分かるか？」

「えっと…」

「簡単なこつた。千歳にはそれができるからだよ。」

まごつくスバルにヴィータは当たり前だと言わんばかりに告げる。

「千歳は、防御と支援のスキルに関しちやずば抜けてる。アタシとシグナムにシャルの三人相手に一発もまともに被弾しなかった」

くらいだしな。」

「ええっー！！！！」

「まあその分、攻撃系は全然だけどな。そんなじゃ、さっきの模擬戦で使った防御スキルの解説すつから、間抜けな顔引き締めて、しつかり聞けよ。」

驚くスバルに関係なく、ヴィータの教導が始まった。

「驚かせちゃいましたね…。」

【そう、辛気臭い面するな。そんなんであの子たちは離れていかんよ。】

「そうだといんすけどね…。」

人と違う強い力は、時に相手が壁を作る原因になってしまいますから。

せつかく仲良くして頂いてるのに、そうなったら悲しいじゃないっすか。

【お前も大丈夫だと思ったからヴィータくんとこの模擬戦を受けたんだろっ？】

いえ、誰かさんのせいで避けざるを得なくなっただんで、仕方なく受けたんですけどね。

「そうかもしれないっすね〜。」

【なら、いいじゃないか。それより、訓練なら、高町さんとテストロツサくんもいるのだろう?】

「そりゃあ、まあ、そうなんじゃないっすか。」

【なら、急ぐぞ！揺れる彼女たちの胸を見逃すなど、俺の沽券に関わる!-!】

「はいはい。」

ワタクシの相棒は、本当にお節介焼です。

いいことを言った後、必ず下ネタで誤魔化すのが玉に傷っすけどね。

そんなことを考えながら、今度マスターの悪ノリに付き合っただけよーと思っただけだ。

お疲れ様でした。

如何でしたでしょうか？

ご意見、ご感想お待ちしております。

頑張りますので、今後も応援宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございます。

第24話「進展×under the innocent sky」after

米寿です。

皆さん如何お過ごしでしょうか？

御無沙汰しておりました。

お待ち頂いていた読者の皆様がいらしゃたのであれば大変申し訳ございません。

今回も楽しんで頂ければ、幸いです。

最初の任務の時と、朝のヴィータ副隊長との模擬戦。

チイ兄には驚くことばかりだ。

思えば、なのはさんとの模擬戦で一本とったのも、チイ兄の作戦だったっけ。

チイ兄は皆が凄かったから、なんて言ってたけど、私は、チイ兄も凄いなってそう思う。

ティアにもこの事を話してみたんだけど、聞いてる途中、なんか様子が変わった気がする。

難しいことはよく分からないけど、ティアはチイ兄に聞きたい事がありそうだった。

あの時の模擬戦の帰りみたいに、二人ならきつと話してまた、仲良くなれると思う。

だから、何にも心配いらないよね。

そうだよね、ティア、チイ兄？

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない『りりつば』 始まります。

マスターとフェイトさんの、揺れる、男のロマン（マスター命名）を堪能して、午前の訓練は終了致しました。

どうやら、ポジションごとの個別スキルの訓練をする段階に、皆さん、移行したようです。

そんなわけで、指導する側も熱が入っているのがよく解ります。

フォワードの皆さん、ボロボロですし。

いえ、今までの訓練に熱が入ってなかったとか、そういう事を言いたかったんじゃないんですよ。

「千歳君、お疲れ様。」

なのはさんいい笑顔ですね。

「だらしねえな、千歳。あたしらとの模擬戦に比べりゃ随分楽だったじゃねえか、今日は。」

ヴィータさん。そりゃ地獄と比べれば、そうですねと言わざるを得ないじゃないすか。

ま、死んでも言いませんけどね。

「それにしても、シグナムが突然来るとは思わなかった。」

「そう邪険にするな、テストロッサ。」

「べ、別にそういつつもりで言ったんじゃない…。」

「冗談だ。」

「もう。」

フェイトさんとシグナムさんが和気あいあいです。

普段のワタクシなら美人同士の絡みはおかわりしても眺めていた所なんすけど、今回は一言、物申させて頂きたい。

「あので【まさか、六課男たちおける夢が詰まった双丘の共演をこの目で見られるとはな。たまらんぜ、なあ、鷲介！】

どうやら、ワタクシには味方はいない上に、神様に見捨てられていたのでしょね。

ええ、そうです。そくに違いありません。

「流石、千歳とその相棒だな。あれぐらいの訓練では、まだ、足

りなかったようだ。」

「あつ…。」

絶対零度の視線と口を吊り上げ、愛機に手をかけるシグナムと、恥ずかしいそうに胸を腕で隠すフェイト。

それを、絶望と愛情が入り交じった複雑な表情で見る鷺介と、『たまらん、その目がたまらん』と嬉々として明滅を繰り返すアレキサンダー。

「まあまあ、シグナムさんもその辺で。マスターさんのそれは、病気みたいなものだから。」

そんな、收拾がつかなくなりそうな事態を治めたのは、なのはだった。

【恋、という名の甘く切ない病ということかな、高町くん？】

「はいはい。そうですそうです。」

【そっけない、高町くん…。アリ、だな。】

アレキサンダーからの不穏当な発言は続いているが、最悪の事態を回避した鷺介は、ホッと胸を撫で下ろした。

「にしても、シグナム。」

「なんだ、ヴィータ。」

「フェイトの言う通り、なんで突然来たんだ？」

ええ、それはワタクシも疑問に思っております。

シグナムさんが来てくれたおかげで、ワタクシ朝からボロ雑巾の
様になることができたわけですから。

謝々。

「なに、お前と千歳がやりあったのを見てな。」

ええー。

感謝の気持ちが木っ端微塵ですよ。

「完全に戦闘狂の発言じゃないすか！」

「…ほう。」

ジーザス。

あまりの理不尽発言に本音が漏れちゃいました。

【すいませーん。目線こっちにも下さーい。】

「燃料投下っ！！」

あの空気再び。

しかし、神は鷺介を見捨てなかった。

「チイ兄ー。ちょっと来てー。」

「おおっと。シグナム副隊長のご期待に応えられないのはとっても残念なんですけど、お呼びがかかってしまっっては、不祥、スバルさんの兄的存在であるワタクシ、行かないわけには参りません。というわけで、失礼しまーす。」

苦笑いを背に、砂塵を巻き上げる勢いで、隊長陣の所からフォワード陣の所へ。

鷺介は風のように駆け抜けて行った。

「いやあ、助かりましたよ、スバルさん。こんな妹分を持って、兄貴分冥利に尽きます。ありがとうございます。」

「？」

「はあ…。また、どうせ何かやらかしたんでしょ。気にすることないわよ、スバル。」

「そうなんですか、チイ兄さん？」

「まさか。六課最大の常識人たるワタクシがそんな問題起こすなんてあるわけないじゃないですか。」

「そうなんですか？」

ワタクシが悪いわけじゃないのにエリオさんとキャロさんの無垢な視線が痛いです。

「千歳さんの言うことは話半分でいいわよ。『あのですね、マスターが』って言うだろうしね。」

「うっ。。。」

まさに凶星でした。

「これから、そうやって弁解しようと思ってましたし。」

「それに、『マスターはド変態でドMでセクハラ大好きのどうしようもないデバイスですけど。ワタクシの最高のパートナーっすから。』って言うてましたよね？」

「ええ、まあ…。」

あの恥ずかしい件を覚えていた事に、ワタクシ、衝撃を隠せません。

「まさか、最高のパートナーの言った事を相棒である千歳さんには、関係ないっていうんですかつ！？」

「ちょっと！ティア！どうしたの！？」

会話に違う熱が入り始めたのが分かったのだろう。

二人の様子を見て、スバルが止めに入る。

「……………すみません。訓練で疲れてたみたいです。…失礼します。」

そう言うてティアナは足早に隊舎へと歩いていく。

「ティアア！」

「スバルさん、行ってあげて下さい。」

「うん。…ごめんね、チイ兄。」

いいんすよ、と言いながら、手をヒラヒラさせて鷺介はスバルを送り出した。

「ティアさん、どうしちゃったんでしょう？」

「今日から訓練も本格的になってお疲れだったんでしょう。誰だってそんな日がありますよ。だから、キャロさんが心配することなんてなーんにもありません。」

「……………キユクルー。」

安心させる様に笑い飛ばして告げた鷺介の笑顔は弱々しい。

フリードの鳴き声がそれを肯定している様だった。

妙な空気のままに隊舎に着いた一行は、はやてとリインが外回りに行くことを聞いた後、午後の訓練の合間にシャワーと昼食を済ませる流れになった。

シャワーへと向かう女性陣を見送り、残されたのは、鷲介、アレキサンダー、エリオ、フリード。

【これより、オペレーション、ステップ・オブ・エリオの作戦会議を行う。】

「マスターさん。一体どんな作戦なんですか？」

【うむ。よくぞ聞いてくれた！これは、前回失敗に終わった、覗きの尊さを実体験するという作戦だ！！】

「なるほど、分かりました。それで、作戦名にはどんな意味があるんですか？」

【うむ。今日のエリオは冴えているな。なかなか目の付け所がいー！】

「そうですね。ありがとうございます！」

【では、説明しよう。これは、エリオが女性というこの世の奇跡を知り、大人への階段を昇るという意味が込められている。】

「なるほど。」

【しかも、今回はナカジマくんやランスターくんに加えて、高町くんとテストロツサクン、シグナムくんまでいるのだ！これは、作戦を決行する為だと言わんばかりではないか！？】

マスターの熱弁にエリオさんがよく付き合ってくれています。

ホント、いい子っすね。

「それで、マスター。具体的にはどうやるんすか？」

【お、感心ない風を装いながらも、自らの進むエロスを隠しきれなくなっただか、鷲介？】

さっき、フォローして頂いたご恩もあることですし、ここはノってあげるとしましょうか。

「ええ！おっしゃるとおりです！そんなマーベラス空間に突入できるならなんでも協力しますよー！」

「キョクル〜」

【フリードもノってきた所で、いよいよ作戦の説明に…むー！】

アレキサンダーが何かに気が付き作戦発表を中断した。

【ヴァイス！いい所に来た！】

呼び掛けた先には、ヘリの整備を終えたであろう、ヴァイスだ。

「どうしたんすか、旦那？それに皆さんお揃いで。」

【そんな前置きはいい。それより、お前も参加しないか？】

「参加って…。一体何をやるおつもりで？」

【覗きだ。】

アレキサンダーのあまりに男らしい断言に、若干呆れた様な表情をヴァイスは浮かべた。

「鷲介さん。なんか大変なことになってるみたいですね。」

「ま、そんなとこです。」

ご苦労様ですと肩をすくめながら、鷲介に同情するヴァイスだったが、次にアレキサンダーが告げた言葉に固まった。

【シグナムくんもいるぞ。】

「しょうがないっすね。俺も男です。参加させて頂きましょう。」

ヴァイス、陥落。

リスナーの弱味につけこんだ見事な作戦ですね。

【では、勇姿が揃ったところで作戦内容を説明する。皆心して聞く様に。】

「はい！」

「了解っす。」

【この作戦は、前回の失敗を踏まえて、相手の警戒心を解く事から始める。】

「警戒心ですか？」

【そうだ、エリオ。そして、その役目はお前とフリードにしかできない。】

「どついついことですか？」

【まず、先行するエリオは皆に、『背中を流しにきました』と言

うんだ。子どもだから警戒されずにターゲットに近付けるし、万一失敗しても、年齢的に許されるはずだ。」

これは、ワタクシの感ですが、この作戦、果てしなく浅い気がします。

【同時に、フリードも突入して、場を混乱させる。これも、万一失敗しても、動物だから許される。そして緩んだ警戒心と混乱に乗じて、『人数が多くてエリオ独りでは大変だ。俺たちも手伝いに来ました！。』と乗り込むわけだ。】

浅い！果てしなく浅いです！

さらにいえばこの作戦、エリオさんとフリードさんの安全は確保できてますが、ワタクシとヴァイスさんの安全がまるでありません。

あ、マスターは除外ですよ、モチロン。

「お言葉ですが、旦那。それじゃあ、どうやって、俺と鷺介さんと旦那はアウトじゃないっすか？」

流石に気付きますよね、そこは。

【何を言う！彼女たちの神聖な姿を見た上で、蔑んだ視線を頂けるんだぞっ！！これをご褒美と言わずして何と言う！！！！】

これが、マスターを除外するって意味です。

お分かり頂けたでしょうか？

「あの…。」

【すまん、興奮しすぎた様だ。ん？どうした、エリオ？】

「マスターさん、すみません。僕にはその作戦はできません。」

本当にすまなそうにエリオ深くは頭を下げて、アレキサンダーに謝った。

【な、何故…なんだ…？】

いやいや、そこまで驚愕した、みたいな感じで言われても…。

ごくごく普通の反応だと思っすけど。

「僕、フェイトさんと約束したんです。」

顔を上げたエリオの目は伏せられていて、その時の事を思いだしている様だ。

「フェイトさん言ってたんです。『もし、エリオが覗きに来たら私もキヤロも皆も凄く恥ずかしい思いをするんだよ。エリオは私たちにそんな思いをして欲しい？』って。」

エリオの独白は続く。

「僕はそんなことはありませんって言いました。そしたらフェイトさん、『じゃあ、約束。もし、また誰かがそんな事を言い出したら、エリオだけでもちゃんと断って欲しいんだ。できる?』って。」

誰も。

エリオ以外の誰もが口を開く事ができない。

「だから、フェイトさんやキャロ、皆さんにそんな思いをさせるわけにはいかないんです。…マスターさん、本当にすみません。」

エリオは、伏せていた目を開けて、また、深く頭を下げた。

………なんでしょう、この空気。

マスターが、土下座するとかじゃ、もはや済みそうにない勢いで
す。

一瞬でもノってあげようと思ったワタクシ自身を粉々に砕いてや
りたい気分です。

「旦那……。今回は、やめときましようや。」

どうやらヴァイスさんもワタクシと同じ心境の様ですね。

【そうだな。エリオの気持ちに気付いてやれなかった、俺は浅はかだった。すまないな、エリオ。】

いろいろ、浅はかすぎる気がしますけど、言わないで置いてあげましょう。

「いえ、いいんです。こちらこそ、すみません。じゃあ、遅れるといけないのでそろそろ行きます。フリード、行こう!」

元気よく駆けていくエリオの背とフリードを見送る。

「それじゃあ、俺もこの辺で、昼飯を食いぱぐれるわけにはいかないっすから。」

背を向け、手を振りながらヴァイスも食堂へ向かって行く。

残ったのは、二人。

「残念でしたね、マスター?」

【まあな。だが、あんな事を聞かされてしまっては、な。】

「違うないっすね。」

僅な沈黙。

【エリオは心配していたぞ。】

「分かってます。」

ノータイムでの返答。

まるでそう言われるのが分かっていたみたいだった。

【エリオだけじゃない。スバルくんもキャロくんもだ。】

「そうっすね。きちんと時間を作ってお話してみますよ。」

【そうしろ。俺がその時間を作ってやる。…二人が愛を語らい、まぐわう時間をな。】

「…せっかくカッコいいのに、最後に台無しにするところは、相変わらずっすね。」

と、いいながら鷺介はゆっくり息を吐いた。

自分より、ランクが下の人間が認められてるし、何かしらの才能を持つてる、そうティアナさんは思っているんでしょう。

最初の模擬戦でのワタクシへの問いかけも、今なら、その意味が見えてきます。

それが、決定的になったのが、今日の朝の訓練ってわけですかね。

「なかなか、ままなりませんねえ…。ま、なんとかしてみますか。

」

そんな、鷺介の眩きが空気に溶けて消えた。

第24話「進展×under the innocent sky」after

お疲れ様でした。

楽しんで頂けたでしょうか？

頑張りますので、見捨てずに応援して頂けると有難いです。

御一読、本当にありがとうございました。

第25話「進展×under the innocent sky」night

米寿です。

皆様如何お過ごしでしょうか？

今回も楽しんで頂ければ幸いです。

違和感はあった。

なのはさんから初めて一本を取ったのがその始まり。

それが決定的になったのは、最初の出勤の後に千歳さんの力を聞いた時。

そして、今日の朝の訓練でスバルの話聞いて、シグナム副隊長と互角にやり合う所を見て、この人もそっち側なんだと思った。

天才。

そう思ったら、千歳さんが私たちに向けて言っていた事、全てが白々しく感じる。

醜い感情だつてことはわかっているけど、そう思わずにはいられなかった。

少なくとも、日々の訓練でも強くなっている実感ができない私にとつては。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない『りりつば』『始まります。』

「はい。じゃあ、今日の訓練はここまでにしよっか。」

「……はい。」

なのはの声に応えるフォワード陣は疲れきっている。それも、食事や休憩の時間はあるにせよ、朝から夜までずっと訓練漬けだからに他ならない。

「しつかり休めよー。」

「……はい。」

なので、ヴィータのかける声にも同じ様な反応が帰ってくるのはある種、仕方がない事だ。

そんなフォワード陣を見送ったヴィータは大の字になって倒れている男に目を向けた。

「まあ、アイツらが疲れてんのはわかるんだけどよ。実際、今日一番ハードだったのは間違いなくコイツらだな。」

「あはは…そうだね。千歳くんもマスターもお疲れ様。」

「……ありがとうございますなのはさんヴィータさん。」

【……高町くんの優しさが身に染みる様だ。】

「おい。アタシも労ってんだぞ？」

【……ツーン。】

「…追加訓練やつかあ？アタシはまだまだいけるぜえ？」

ギヤアギヤアといつもものやり取りをする二人を、やれやれといった様子で鷺介は眺めた。

「……………いやあ、こういうのもなんなんすけど、シグナムさんスパルタ過ぎつすよ。」

昼食を挟んでぶっ続けて訓練。

タフガイの呼び声高いワタクシでも根を上げてしまっ程のハードワーク。

さらには、『久々にいい訓練が出来た、礼を言うぞ千歳。』とか言っって満足げに帰っていかれました。

……………化物つすか。

「あはは…。シグナムさん模擬戦好きだからね。」

「好きという範囲を大きく逸脱している様な気がしたのはワタクシだけつすかねえ、なのはさん?」

「ノーコメントにさせてもらおうかな。」

ああ、そんな笑顔で言われたら許しちゃうじゃないっすか！
ようがす。

なのはさんのお顔を立てて今回、助けに入ってくれなかったのは不問に致しましょう。

【おい、鷺介。チビッコがしっこくてかなわん。なんとかならんか?】

「おい、千歳。このポンコツ、テメーのデバイスだろ?ちゃんと

教育しとけ！」

まーだやってますよ。

というかお二人共、息ピッタリじゃないっすか。いつからこんな仲良しになったんでしょ？

「お二人は仲良しすねえ。」

【「ああん！？」】

怖っ！

「ティアナとの模擬戦の許可が欲しい？」

今日の模擬戦のデータを確認し終えたなのは、驚介はそう切り出した。

「ええ、そうっす。」

「理由を聞いてもいいかな？」

突然の申し出になのは幾分戸惑った。

驚介は、自分から模擬戦をしたいなんて言い出す性格ではない。理由が気になるのは当然の事だった。

「はい。実はすっね」

と、そう言っつて驚介は今日の午後の訓練に入る前にあったティアナ

とのやり取りとそれに対する鷲介の考えを話始めた。
ティアナが、鷲介が特別な力を持っていたのを隠していたのをあまり快く思っていない事。

他のフォワード陣に劣等感のような感情を持っているんじゃないかという事。

このままでは、ティアナにとってもみんなにとっても良くないという事。

「だいたいはこんな理由なんすけど。どうっすかね？」

千歳くんってみんなのことよく見てるんだな。

千歳くんがティアナやみんなに出会ってからまだ、そんなに経っていない。

だから、深く話をする機会があったわけじゃない。

それでも、ティアナの抱える悩みを察してあげられてる。

それが、なんか、ちょっと悔しい。

「ええつと、なのはさん？」

「あ、うん。ごめんね、ぼーっとしちゃって。」

「いえいえ。考えにふけるなのはさんも大変お美しいので、見ているこちらとしては役得っすよ。」

本当に真面目な空気が苦手なんだな。

こうやって冗談を言って、すぐ茶化す。

グレアムさんが言ってた通り。

「模擬戦だね。分かった、許可するよ。」

「ありがとうございます。いやー、なのはさんは話がお分りになる。」

「でも、何で模擬戦なの？」

「へ？」

でも、ちょっと悔しかったから、まだ真面目な時間は終わらせてあげない。

千歳くんは理由を話す時、模擬戦をする理由をあえて避けてた。たがら聞いてみたんだけど、予想以上の効果。

おかげで、呆気にとられた千歳くんが見れて、少し満足。

鷲介は、呆けた顔を正して、一つ咳払いした。

「先ほど、なのはさんとヴィータさんが話しているのを聞いてピロときたんすよ。おっしゃってましたよね？指導は、『模擬戦で徹底的に打ちのめしてあげる方がいい。』って。なら、その流儀にのっとらせて頂こうかなと。」

ああ、そっか。

千歳くんは私の考えに沿って問題を解決しようとしてくれてる。だから、模擬戦なんて慣れない方法を選んだんだ。

「……………ありがとう、千歳くん。」

なのはから眩きにも似た、お礼の言葉から自然に漏れた。

「え？なんすか？」

「ううん。なんでもないよ。」

「そつすか。では、なのはさんの許可も出たことですし、あんまり遅くなるといけませんから、そろそろ行きましようか。」

「そつだね。」

二人は隊舎へと揃って歩き出した。そして、その帰り道、鷺介が唐突に切り出した。

「それにしても、ありがとうございます。なのはさん。これでダメシ食らいとか言われずに済みますよ。」

「え？どついうこと？」

「いえね、ワタクシ六課に配属になってから具体的な仕事を八神隊長から頂いてないんすよ。」

そつだっけ？

あ、思い返してみれば確かにそんな気がする。

「隊員のメンタルケアと隊長の負担の軽減。これは、立派なお仕事つすよね？」

「…そつだね。」

負担かあ。

そんな風に思ったことはないんだけどな。

私がやりたくてやっていることだし、隊のことを考えてあげるのは、隊長として当然だと思ってる。

「これからも、ワタクシの様なヒマ人がいればどんどん使って下さい。なんていっても、なのはさんは隊長なんすから。それに、」
と、一旦言葉を区切って、

「一男性としては、美人にはもっと頼って欲しいなーなんて思うわけなんすよ。」

笑いながらそう口にした。

「口説き文句としては、65点かな。」

「これは、手厳しい。」

自信あったんすけどなー、という鷺介にそう切り返したなのはは、以前も似たような事を言われたのを思い出していた。

それは、なのはが空を飛ぶことを諦めようとしていた、あの時。

「あんさ、オメエはもっと人を頼れ。それに、あー、なんつーの。男ってのはな、女に頼らるってのは嬉しいもんなんだよ。」

『そうなの?』

『そーなの。そーいうもんなの。って、何笑ってやがんだデメエ、ぶっ殺すぞ、このヤロウ。』

『にやはは。顔真っ赤。』

『うるせー!うるせー!見んな!ニヤニヤしながらこっち見んな!』

また、私は独りで全部やろうとしてたんだ。
あんなに言われたのになかなか治らないな。
うん。千歳くんも仲間なんだし、頼ってもきつと大丈夫。
そうだよな。ね、『ドラさん』？

演習場に佇む影。そこに一つの影が近づいていく。

「…こんなところに呼び出して、何の用ですか、千歳さん？」

「演習場でやることいったら模擬戦に決まってるじゃないすか、
ティアナさん？」

ティアナの刺のある問いかけもどこ吹く風と言わんばかり、挑発的に驚介は答える。

「…ふざけてるつもりなら帰ります。明日も訓練が早いので。」

「あれ、逃げるんすか？」

背を向けて歩き出したティアナの肩がピクツと震える。
そして、それを驚介は見逃さなかった。
畳み掛ける様に言葉は続く。

「ま、そつすよな。Cランク程度の魔導士の相手なんてしてらんな
いっすよな。」

安い挑発だつてことは分かっている。

それでも、この人がそんな風に言うのを、私は許せなかった。

「…いいですよ。千歳さんに割く時間ももつたいないですから、ささっと始めましょう。」

「お話が早くて助かります。流星はエリート様。」

その言葉に、私の中の何かが切れた気がした。

「クロスミラー・ジュっ！！セットアップ！！！」

【スタンバイ、レディ。セットアップ。バリアブルバレット。】

「マスター。」

【セットアップ。スフィアセット。】

セットアップはほぼ同時。

そして、ティアナの放ったスフィアが鷲介に吸い込まれる様に飛んでいく。

【【プロテクション&ラウンドシールド】

しかし、スフィアが到達する前に見えない壁に阻まれ、弾かれる。

やっぱり通らないか。

どんな種かは分からないけど、ヴィータ副隊長の攻撃を防ぎきつた防御。

私の攻撃じゃ、突破は難しい、か。

「ストレートシューター。」

射撃魔法!?

そういえば、なのはさんとの模擬戦で使ってた!

「っ!クロスミラージユ!お願い!シュート!」

【了解。】

そう、アイツの魔力弾は目視では殆ど捉えられない。

なら、魔力を正確に補足できるデバイスに任せればいい。

「チェンジ、モードチェイス。」

【了解だ。】

鷲介にアレキサンダーが答える。

刹那、ティアナが放った魔力弾が不規則な動きを始めた。

どうということ!?

【直線型のシューターが誘導型に切り替わりました。】

一度発動した魔法の効果を切り替えるなんて!

どれだけ手札があるっていうのよ、アイツっ!

【駄目です。振りきれれます。】

クロスミラージユの無情な声。

見えない魔力がティアナへと向かう。

切り替えるのよ。

誘導型ならかわすのは無意味。

ならここで迎撃するしかない！

カシュ、カシュつと音がしてクロスミラージュにカートリッジがロードされる。

ティアナの目の前に、複数の魔力弾が現れる。

「シューートっ！！」

魔力同士の衝突が起こり、閃光と暴煙があたりを包みこむ。そして、間を置かず、煙の中から三つの影が踊り出た。

「フェイクシルエットつすか。」

三つの銃口が鷲介へと向けられる。

そして、周りにスフィアが形成される。

ティアナの切り札、クロスファイア。

【鷲介！】

「遅いつ！クロスファイア！シューート！！」

突然、アレキサンダーが声を上げる。

それよりも早く、左側のティアナがバグステップと同時に魔法を放った。

「いい作戦でした。実にお見事です。」

しかし、鷲介の声は正面からではなく、背後から聞こえてきた。

あ、転移魔法。

その思考に至った時には、ティアナの体は見えない鎖に絡めとられたように、動かなかった。

模擬戦を終えた二人は並んで腰を下ろしていた。
ティアナは俯いて、膝に顔を埋めている。

「ティアナさんはどうして強くなりたいたいんですか？」

そんなの決まっている。

兄さんが教えてくれた魔法が、役立たずじゃないことを証明するため。

ランスターの弾丸は、どんなものでも貫けるんだって証明するためだ。

「あー。リアクションがないと非常に寂しいんですけど……。」

「……………千歳さんには、関係ありません。」

「うっ！ま、それもごもつとなんすけどね。」

千歳さんやなのはさんみたいに力や才能がある人には、きっと、私のことは分からない。

なぜなら、私は凡人なのだから。

「なんで、こんなことしたんですか？」

【それは、美少女を虐げて楽しみたいという鷲介の歪んだ性癖の為だ！！】

ティアナの瞳の温度が急激に下がった。

「……帰ります。」

「待った待った待ったー！！誤解です！完全無欠に誤解です！」

「はあ……。じゃあ、理由を説明して下さい。」

呆れた様子でティアナは鷲介の隣に腰を下ろした。さっきまでの張りつめていた空気はもう、ない。

「それはですね。勝負を左右するのは、才能だけじゃないってことをティアナさんに分かって頂きたかつたんすよ。」

「私に勝った千歳さんが言っても説得力ないですね。」

フレンドコネクトシステム、転移・転送魔法、黙視の難しい魔力光と千歳さんには多くの特別な力がある。

それは、努力だけでは手に入れられることのできないもの、つまり、才能だ。

「いえいえ。ワタクシがティアナさんに勝てたのはちゃん準備を整えていたからです。」

「どういことですか？」

「実は、この演習場の至るところに設置型のバインドを仕掛けておいたんです。」

「は？」

「ティアナさんが来るまで時間がありませんでしたし、ワタクシ個人にティアナさんをノックダウンさせる威力のある魔法がないので、捕縛した後に降参して頂くかと思ひまして。」

「はあ！？」

「ま、種明かしするとそんな感じですね。」

私は空いた口が塞がらなかった。

なんで、この人は恥ずかしげもなくこんなに平然としているんだろう？

たかだか模擬戦に勝つためとはいえ、どう考えても卑怯というかコスイ。

【見る鷲介！ランスターくんの『うわあ、この人コスイ…。』っていう顔と蔑む様な目を！！】

「マスター、勝手に盛り上って一人で興奮しないで下さい。」

空気の読めない、もとい読まないアレキサンダーを鷲介はたしなめる。

「自分に有利な状況で戦う、一人で無理なら二人で、攻撃が効かないなら捕縛といった具合に、やり方次第で、案外なんとでもなる

ってことが言いたかったんです。」

千歳さんの言いたいことは分かる。

なのはさんとの模擬戦もそうやって勝ったわけだし、現にさっき私は千歳さんに負けた。

けど、私が求めているのはそういうものじゃないんだ…。

「納得しました。ありがとうございます、わざわざお時間をとって頂いて。」

「とんでもない！ティアナさんは訓練でお疲れなのに、こちらこそすみませんでした。」

「では、明日も早いので失礼します。」

「はい。お気を付けて。」

隊舎へと戻るティアナの姿が見えなくなると、鷲介はため息をついた。

「はあ…。なかなか上手くないもんですね。」

簡単にはいかないとは思ってましたけど、なかなか根は深いようです。

このままいって、取り返しがつかなくならなければいいんですけど。

【ランスターくんがお前の考えが理解できなかったわけではないようだから、後は彼女次第という所だな。】

「そつすね。」

【現状、高町くんの考えでやれることはやった。これ以上は、どちらかが歩みよらん限りは進まん。】

そつなんすよね。

上官と部下じゃなく、高町なのはとティアナ・ランスター。

お互いがそうならないといけない状況なのかもしれない。

でも、それを決めるのは当人同士であって、千歳鷺介では決して
「ごいません。」

【ここでこうしていても何も変わらん。今日はもう休んでしまおう。正直限界だ。】

「そつすね。密度の高い日でしたね。」

首を傾けながら、暗がりの茂みに目をやり、

「ザフィーラさんも一緒にませんか？」

と声をかけた。

茂みから無言でザフィーラが現れる。

それを確認して、鷺介は隊舎へと歩き出した。

「……………何故？と問わないのか？」

後ろから投げかけられた質問に、振り返らずに鷺介は答えた。

「ええ。」

それで充分だと言わんばかりの速答。
その背中は、自分の置かれている立場は分かっていますよと、言外
にザフィーラへ告げている様だった。

お疲れ様でした。

楽しんで頂けたでしょうか？

今回書き方を少し変えて、場面転換時には を使って改行数を減らしてみました。

新しい試みですので、読者の皆様からご意見が頂ければ、大変ありがたいです。

今後も頑張りますので、宜しくお願い致します。

御一読ありがとうございました。

第26話「強行策に出た女医（スクランブルデート）」（前書き）

大変お久しぶりです。

米寿です。

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

中々更新できず大変申し訳ありませんでした。

詳しい事情、もとい言い訳は活動報告に書きましたので、宜しければご覧になって下さい。

間が空いて、少し感覚がおぼつかず作品に違和感があるかもしれませんが、楽しんで頂ければ幸いです。

第26話「強行策に出た女医（スクランブルデート）」

千歳鷺介という男が六課にやってきたその日、私達ははやてちゃんにシグナムを代表して進言した。

『アイツは信用なりません。』と。

千歳くんを寄越したギル・グレアムという人は、私達にとって簡単には許せない相手だった。

時間だつて少なからず経っているし、謝罪も、もう済んでいるのは分かっている。

けど、この部隊は、はやてちゃんにとっては夢の始まり。

それをつまずかせる訳には、何が何でもいかない。

はやてちゃんはそんな私達に、『そんなら、自分の目で千歳くんを見極めたらええ。』と言った。

だから、私達、守護騎士はそれぞれのアプローチで千歳君を見極める事にした。
シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ。それぞれの見極めは済んだ。

後は、私だけ。

だから、今日、兼ねてからの用事にかこつけて、千歳鷺介という人物を知ろうと思う。

願わくば、見極めた末の結果が、主や守護騎士と同じでありますように。

魔法少女リリカルなのはStrikerS×俺たちに翼はない、
『りりつば』『始まります。』

女医って響きがいいですよ。看護師さんつてのも捨てがたいんですけど、ワタクシとしては、断然、前者っすね。

では、ワタクシの理想の女医像を語らせて頂きたいと思います！
えっ！？

聞きたくない！？

またまた、無理はしなくていいんすよ。思春期問わず、男なら語りたくなるシチュエーションじゃないっすか！！

「それで、千歳君には私の用事とお買い物に付き合っただけで欲しいんだけど、お願いできる？」

「この千歳鷺介がシャマルさんの頼みを無下にする男だと思いですか？」

「ありがとう。それじゃあ、三十分後にエントランスで待ち合わせにしましょう。」

「了解っす。」

「よろしくね。」

突然、女医の件失礼致しました。

まあ、理由はお話するまでもないっすよね？

デートっすよ！

お姉様からのデートのお誘いなんですよ！

ワタクシの目的であるお嫁さん探しに、ここに来て大きな進展が訪れようとしております！！

ああ。白衣をはためかせて去っていくシャルマルさん……お美しいです。

「というわけでマスター。お留守番宜しくお願いしますね。」

昔からいいいますもんね。人の恋路を邪魔する者は馬に蹴られて死んでしまえって。

【おいおい。そんな事を言っているのか、鷲介？百戦錬磨の俺ならいざ知らず、童貞&チキンがこの世に具現化したお前ごときにデートなんぞまとものにできるとは思えん。そこでこの俺が】

「いいりません。」

アレキサンダーを鷲介は有無を言わず黙らせる。

その目は真剣そのもので、初出勤の時よりも鋭さを感じる。

「マスター。よく思い出して下さい。これまでワタクシと六課の女性の方々がいい雰囲気になりそうな時、アナタが加わったことでどうなったでしょうか？」

【ふむ。そこまで言っなら思い出してみようではないか。どれどれ……………。】

アレキサンダーが思案するように明滅する。

【すまない、鷺介。悲しい想いをさせて、本当にすまなかった。】

「え？あ、ああ。分かって頂けたのであればいいんすよ……。」

あまりの真剣さを伴う言葉に、逆に鷺介は面食らってしまった。そして、失礼だと思いつつも、こんなことを考えてしまった。

あれ？

マスターってこんなに殊勝なお方でしたっけ？

【どんなに記憶をたどっても、鷺介が六課の女神達といい雰囲気になったことを証明できないんだ（笑）。】

そんなバカな……。

そんなはずは……。

「ちょ、ちょっと、マスター！ちゃんと思い返してみてくださいよ！アナタのおかげで六課の女性絡みでどれだけワタクシに被害があったと思ってるんすか!？」

【確かにMではないお前にとって、彼女たちの責めや罵倒は苦痛だったかもしれん。だが、今の話のポイントは、『その女性達とお前がいい雰囲気になった』という所だろうか？】

「ええ、まあ。」

【残酷な現実だから受け入れられないのは分かる。だが、俺はお前の為にあえて言おう。そんな事実は……ない（笑）。】

その時、鷺介は六課に来てからこれまでのことを走馬灯の様に見ていた。

まだ、それほど日は経っていないにもかかわらず、多くの思い出がそこにはあった。

楽しかったこと、苦しかったこと、様々なことを思い出すことができた。

けれど、だからこそ気付いてしまう。そこにアレキサンダーによって邪魔された恋愛イベントがなかったことに。

「……………そ、すか。そういう、こと、だったんすね。」

【鷺介……………（笑）。】

「全てはワタクシの独り善がりくる、可哀想な妄想でしかなかった、そういうことなんすね。ははっ…とんだ道化ですよ。笑ってくれていいっすよ。」

【そんなこと出来るわけないだろうっ！（笑）俺を信じれんのか、鷺介！！（笑）】

「ありがとうございます、マスター。でもね、ワタクシやっぱりこう思ってしまうんです。」

悲しみと諦めの色を宿した瞳で、鷺介は穏やかな声でアレキサンダーに告げた。

「世界はこんなはずじゃなかったことばかりだってね。」

【……………ブッフ。】

「お待たせ、千歳君。」

「いえいえ、ワタクシも今来たところです。」

これ！これですよ！

これこそデートの定番すよね、『待った？』『今来た所』。

いやー、まさか体験することになるなんて感無量です。

ん？

マスターはどうしたのかって？

マスターはワタクシを内心で嘲笑っていたのと最後に吹き出しやがりましたので、『ヴィータ副隊長のドキ ドキ 個人レッスン』にご招待させて頂きました。

どんなドキ ドキ がマスターに待ち受けているのかは、アナタのご想像にお任せしますよ。

いやー。相棒を労うワタクシ、なんていい使い手なんでしょう。

「そう？それなら良かったわ。」

外に用意してある車へ、鷺介が助手席のドアを開けてシャマルを促す。

「どうぞ。お乗り下さい、お嬢様。」

「うふふ。紳士ね、千歳君。」

感動です。

ワタクシ、これほどミッドで免許を取って良かったと思う瞬間は

「ごぞいません。」

このやり取りと助手席に綺麗な女性を乗せる為、おじ様と姉さん達の目を盗んで頑張った甲斐があったというものです。

感慨に浸りながら、鷲介も運転席へと乗り込んだ。

ゆっくりと車が走り出す。

「それで、本日はどんなご予定で？」

「隊長達のお仕事着を取りに行くの。」

「お仕事着？何か新しいお仕事でも？」

「そうなの。詳しいことはその内、隊長達から通達があると思うから。という訳で行き先は首都クラナガンでお願いね。」

「了解つす。それでは、安全確実にエスコート致します。」

会話が終了したのを見計らって、鷲介はラジオのスイッチを入れた。車内に落ち着いたクラシック調の音楽が流れ、ゆったりとした時間が車内に流れ出した。

「ここが、今回の目的地ですか？」

「ええ、そうよ。」

首都クラナガンの繁華街、ギミバスラ通り。通称ギバラに二人は来ていた。

ギバラは、有名な服飾関係や飲食店が連なる、ミッドの流行の発信地である。

「しかし、シャマルさん。」

「何かしら?」

「ウチの舞台の次の任務の為にここに来られたわけですよね?」

「ええ、そうよ。千歳君に分かるかしら?うふふ。」

うふふって。どうやらシャマルさんは教えてくれないらしいですね。なら、不詳この名探偵千歳鷲介がこの謎を解き明かしてご覧にいきましょう!

「ふむ。ちよいとお待ち頂けますか?」

「いいわよ。お手並み拝見といこうかしら。」

機動六課はロストロギア対策の専門部隊だから、それに関わる任務ってのが前提。その上で、流行の発信地であるここに必要なものがあると、まとめればこんな感じですか。

それを踏まえた上で導き出される答えは……。なるほど、謎は全て解けました!

「解りましたよ、シャマルさん。答えは潜入任務です。その為の衣装をここに調達に来た。こんなところでしょう?」

決まりましたよ!これでシャマルさんもきつとワタクシにメロメロに

「半分ハズレで半分正解」

指を頬に当ててウィンクしながら、シャマルは鷲介の推理に判定を下した。

あつれ〜。おかしいすね。完全無欠で隙の見当たらない推理だと自負していたんすけど。

まあ、シャマルさんが仕草が可愛いんで、ワタクシの推理がハズレたことなんてどうでもいいんすけどね〜。

え？あのリアクションは若干年甲斐がないんじゃないかって？
な、何言ってるんすか。そこがむしろチャーミングじゃないっすかー。は、ははっ……………ふう…。

「それでは、司会のシャマルさん。正解をどうぞー!!!」

誤魔化してなんかいませんよ、ええ、そうですね。このままレディをお待たせするなんてそんな不粋な真似をする訳にはいかないからなんです。本当ですよ？

「分かったわ。正解は次の任務がオークション会場の警備だからなの。隊長陣は内部の警備にあたるから、その為のお仕事着をお願いしていたここに取りに来たのよ。」

「なるほどなるほど。そーいう理由すか。納得致しました。ってちよっと待って下さい！まさか、隊長陣のお仕事着っていうのは…

…?」

「流石は千歳君ね。そう！ドレスよっ！……!」

いやっほううー！ー！！ブラボー！！！！マーベラス！！！！
いやあ、生きてて良かったって言う言葉は今日この日の為にあつた
といつても過言じゃありません！

「さあ！さあ！さあ！行きましょう、シャルルさん！時間は充分
にあるとはいえ、クズクズしているわけには参りません！一分一秒
でも早く隊長達にお仕事着を届けなければ！」

「私のテンションも大概だったけど、千歳君のテンションには流
石についていけないわ…。」

小躍りし、軽やかなステップを踏みながら先行する鷺介にシャルル
は若干引いた様子だ。しかし、周りの目を気にしてでも、シャルル
は鷺介に言わなければいけないことがあった。

「千歳君！」

「なんでしよう!？」

「お店そっちじゃなくて、こっちなんだけど…。」

「え？」

いやあ、非常に有意義な買い物でした。次の任務が楽しみで楽し
みで仕方ありません。

今、ワタクシとシャルルさんは、ギバラで有名なカフェで寛いで
います。

ワタクシとしては、少しでも早くこのお仕事着をお届けしたい所

なんすけど、シャルルさんからお茶のお誘いを頂いたので、喜んでお受けしたというわけです。

「随分嬉しそうね、千歳君？」

「そりゃそうっすよ。美人にお茶に誘われて嬉しくない人間なんていませんよ？」

「まあ、お上手ね。」

ああ、なんて穏やかな微笑なんでしょう。流石は八神部隊長ご自慢の湖の騎士です！

「ねえ、千歳君？ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかしら？」

「どうぞどうぞー。なんでも聞いて下さい。」

「じゃあ遠慮なく。千歳君は機動六課のこと、皆のことをどう思う？」

うーん。美人揃いの素晴らしい部隊っす。そう答えたいところだったんすけど、シャルルさんの目がマジなんすよね。

ワタクシの見解としては、ありきたりなんすけど、優秀なスタッフを揃えた戦力過剰な部隊っといった感じなんです。

ちょっと冷たい言い方もしませんが、それ以上でも以下でもない訳で。一体なんて答えたらいいんでしょう？

そうして腕組みをしながらうんうん言って考える鷺介にシャルルが静かに語りかける。

「六課はね、はやてちゃん…いえ、八神部隊長の夢の部隊なの。だから、躓いたり立ち止まってるわけにはいかない。常に進み続けなければいけない、そんな厳しい部隊よ。だから、これだけは聞いておかなきゃいけなかった。千歳君……アナタは私達の夢への障害になつたりしないかしら？」

「……………」

無言になつた鷺介の目をシャマルはジツと見つめた。答えを聞くまで決して逸らさない、そんな決意の籠つた瞳だ。そんな様子を見て、鷺介はふつと息で前髪をかきあげた。

「叔父様がね、言つてたんすよ。」

「え？」

「昔、八神部隊長には返しても返しきれない恩を貰つたんだそうです。だから、叔父様は決めた。八神部隊長が自分を頼つてきたら、今度こそ全力で助けなければつて言つてました。」

「そう…だったの…あの人は…そんな風に…」

「そんな叔父様に助けて貰つたワタクシも人肌脱ぐのが筋つてもんじゃないっすか？心配するのも分かりますし、信じきれないのも分かります。けど、考えてもみて下さい。こんなに美人揃いの部隊をワタクシが裏切る、なーんてことあるわけないじゃないすか？」

親指をグツ！と立てながらわざとらしいくらいの爽やかな笑顔で鷺介はシャマルへサムズアップした。

「そっか…ふふっ、ごめんなさいね、急にこんな話して。」

「いえいえ。構いませんよ。お役に立てたようで、ワタクシとしても嬉しい限りです。」

二人の顔に笑顔が戻る。それが合図になって、お互い席を立つ。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか？」

「そっすね。しっかし楽しみすね〜。美しく着飾った隊長達を拝見できるのが。」

「あら？今、私が一緒にいるにそんなことを言っているのかしら？」

「おっと！これは失礼致しました！お帰りまでしっかりとエスコートさせて頂きます！」

紳士ぶって張り切る鷺介をシャマルは微笑みながら、見つめていた。

（シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、ちょっといいかしら？）

私は戻ってすぐ、念話を騎士の皆に飛ばした。どうしても報告しておきたい事があったからだ。

（シャマルか。お前がこのタイミングで連絡してきたということ

は、あの件か？)

(ええ。直接皆と話したいのだけど、いいかしら？)

(了解した。皆には私から伝えておく。)

(お願いね。シグナム)

(ああ。では、後でな。)

一先ずはこれでよしね。後は、皆が来るのを待つだけだわ。それにしても、今日は無理にでも千歳君を誘って良かった。おかげで、私の気持ちも決まった。

この強行手段がバレている可能性も否定はできないけど、彼の言葉に私は嘘を感じなかった。

甘い決断かもしれない。それでも、先ずは信じることから始めることにしようと思う。

今日の彼の言葉と初出勤の時に知り合って間もない仲間の為に全力で駆け付けてくれたあの表情は、紛れもなく本物だったから。

「はやてちゃん、皆。私も皆と同じで、千歳君は本当にいい魔導士だと思った。……………戻ってきたら、そう言おう。」

そんなシャマルの呟きが室内の空気に消えた。

第26話「強行策に出た女医（スクランブルデート）」（後書き）

お疲れ様です。

楽しんで頂けたでしょうか？

これから、ボチボチ更新していきますので、また、応援して頂けると嬉しいです。

御一読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0022s/>

『りりつば』

2011年11月13日12時32分発行